

## 第4章 接地性の高い住戸における領域の形成

### 4.0 本章の目的

本章では、タウンハウス形式の接地性の高い低層集合住宅を題材に取り上げ、そこでのさまざまな領域がどのように形成されているかを論ずることを目標にしている。居住者の領域の意識は、単純な階層的な「公」「共」「私」のヒエラルキカルな構成をしているというのではない。住戸はオモテとウラなどのある有機体のようなふるまいをするし、「公」と「私」の間の「移行空間」には、いろいろな次元の領域意識が何層にも重なりあっており、複雑な様相を呈しているのである。このことを明らかにするとともに、「移行空間」をいくつかの私的・公的要因の基準にもとづき段階分けすることをこころみた。

### 4.1 タウンハウス落合の設計方針

#### 4.1.1 多摩ニュータウン「タウンハウス落合」の概要

本章では「タウンハウス落合5」団地をケースとしてあつかう。この団地は、多摩ニュータウンの中核となる多摩センター駅から1.25kmの距離にある低層集合住宅である（fig.4-1-1）。東側と北側は公園に隣接し緑豊かな環境に立地しており、1982年の竣工から11年経過して、成熟した住環境を形成している。fig.4-1-2に示すように事業者、設計は住宅・都市整備公団などがあたった。計画・設計の基本的な特徴は、

- 1) 基本となる住戸は接地性の高いタウンハウス形式（長屋建て）であり、このタウンハウス形式の低層住棟に加え、周辺状況のあわせて3層準接地住棟、中層住棟などが混在して計画されている
- 2) 住戸の平均規模は100m<sup>2</sup>を越えており、3LDKから5LDKまでの間取りである
- 3) 団地内の道は歩車共存道路であり、さまざまな用途で使われるなどが挙げられる。

#### 4.1.2 歩車共存道路

神谷ら（1982）によると、歩車共存道路（いわゆるボンエルフ）は、1970年代中期以降ヨ





fig.4-1-1 タウンハウス落合5 配置図

# 調査対象概要 多摩ニュータウン・タウンハウス落合5

設計者	住宅・都市整備公団東京支社建築部設計課 配置計画：都市研究所、山設計工房 建物設計：山設計工房、みのべ建築設計事務所、manu都市建築研究所、環総合設計
事業主	住宅・都市整備公団
施工年	1982年3月（入居）
所在地	東京都多摩市落合5丁目
用途地域地区	第2種住居専用地域（建蔽率60%容積率200%）、第2種高度地区、準防火地域
敷地面積	20900㎡
建築面積	5252.69㎡
延床面積	13617.94㎡
建蔽率	25.13%
容積率	63.8%
階数	2～4階
住戸数	112戸（2階建タウンハウス40戸、3階建タウンハウス14戸、3階建メゾネット18戸、4階建フラット40戸）
haあたり戸数	53.6戸/ha
駐車台数	112台
附属施設	集会室、プレイロット
雑誌掲載等	DA建築図集 低層集合住宅Ⅱ 新日本建築家協会編 1983 公団の分譲住宅 1981 都市住宅 1982.7 住宅 1983.9 PROCESS 特別号5「豊かさ時代の集合住宅—住宅・都市整備公団の試み」1987

## 調査概要

アンケート調査日時	配布93/9/20, 回収93/9/22,23,26,29
アンケート配布回収数	配布112, 回収81, うち有効回答81
アンケート有効回答率	72.3%
インタビュー調査数	27
インタビュー調査日時	93/9/22,23,26,29（アンケート回収時）
行動観察調査日時	93/9/26(日),9/29(水)
サーヴェイ調査日時	93/9/26,9/29

fig.4-1-2



ヨーロッパで歩行者優先の利用を考慮した道路の計画を考える上で生まれたきたものであるという<sup>81</sup>。これは、

- 1) 不要な通過交通を排除する
- 2) 交通事故の危険を感じずに子供たちが利用できるようにする
- 3) 限られたオープンスペースである道路を有効に利用する

目的があるとされている。

タウンハウス落合団地内の歩車共存道路もこういった基本理念を基にしたものであり、fig.4-1-3 に示されるように、入居者の車、サービスなど車、一般の外来車などによって入ってこれるところを制限するように計画されており、各戸の駐車車両用の車道、サービス用車道、歩行者用通路、レストコーナーなどを兼ねている。また、駐車場は、特にタウンハウス形式の住棟については住戸前の専用スペースに設けられているが、その他のものについては集中駐車場が設けられている。

#### 4.1.3 タウンハウス落合の住戸計画

次に各住戸の計画を概観する。

この団地には次の3つの異なった性格の住棟が混在して計画されている。

- 1) タウンハウス形式の低層住棟
- 2) 3層準接地球棟
- 3) 中層住棟

1) のタウンハウス形式の低層住棟は、いわゆる2階の長屋建てで（一部3階建てのものもある）、各住戸には専用庭が設けられている。また、専用の駐車場が住戸前に設けられている。1階には公室の居間、食堂、台所などがあり、2階には私室である個室が計画されている。またどれも110m<sup>2</sup>～120m<sup>2</sup>前後の面積がある。（fig.4-1-4）

2) の3層の準接地球棟はメゾネット住戸を上下に重ねたもので、下層の住戸は1階に居間、台所などの公室が専用庭に面しており、2階には私室が計画されている。上層の住戸は2階に私室が、3階に公室が計画されている。3階にはルーフガーデンが設けられている。下層の住戸は120m<sup>2</sup>程度、上層の住戸は110m<sup>2</sup>程度である。（fig.4-1-5）

3) の中層住棟は4階建てでフラット住戸である。90m<sup>2</sup>～100m<sup>2</sup>前後の住戸が中心であるが、住棟の裏側には5LDK120m<sup>2</sup>前後の住戸もある。住戸の中心に台所のある平面で、団地の北端に建てられているので南側の居間は低層棟に向いている。（fig.4-1-6）

<sup>81</sup> 「計画的集合住宅団地における歩車共存空間の試み」神谷裕直ほか、都市住宅1982年7月号 pp.97-106。

歩車融合計画道路の利用区分

対象者 ゾーン	※1 一般 外来車	特 定 外来車	住区居住 者の車	※2 当該 入居者
Aゾーン	○	○	○	○
Bゾーン	×	○	○	○
Cゾーン	×	×	×	○

※1 ゴミ回収車、公共サービス車、引越しに伴う大型車  
※2 当該ゾーン内入居者の車

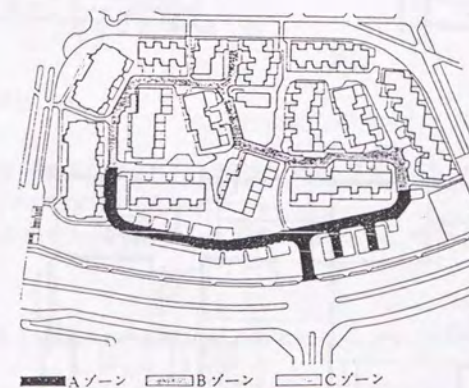
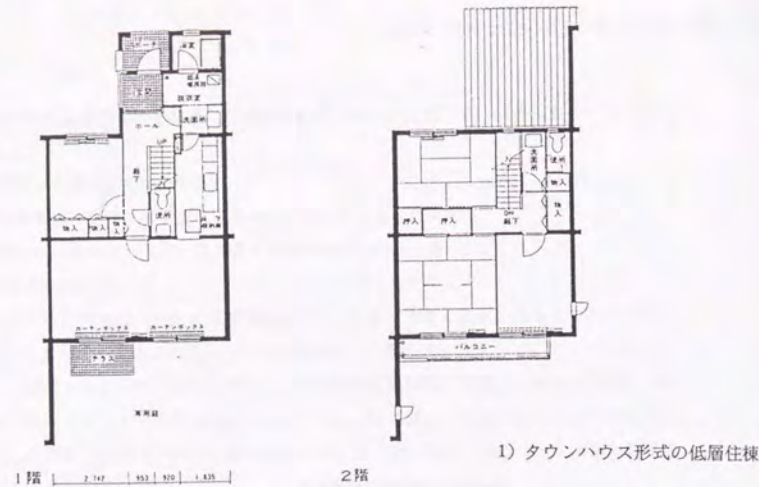
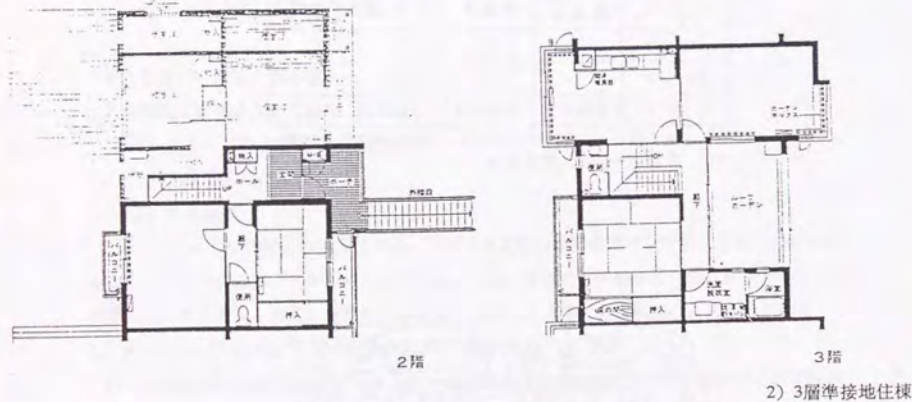


fig.4-1-3 タウンハウス落合-5における歩車融合計画道路区分





1) タウンハウス形式の低層住棟



2) 3層準接地住棟



3) 中層住棟

以上のようにこの団地の住戸は比較的余裕をもって計画されている。また、特にタウンハウス形式の低層住棟は、専用庭、専用駐車スペースが付属して接地性も高いので、一戸建て住宅に近い性格のものとなっている。

#### 4.1.4 管理上の区分

住宅管理組合の規約によると、この団地は低層棟、中層棟を含めて一つの住宅管理組合となっている。

団地内の敷地および団地内道路、集会所、駐車場などは、組合員「全体」の「管理共有物」である。共同住宅の建物の躯体、屋根、外周壁、自転車置場などは、「一部」の組合員の共有物である。さらに専用庭、ルーフガーデンなどは、共有物であるが無償で「専用」使用できるものとなっている。住戸内部は専用使用が認められているものである。

このように落合団地は、組合員の全体の共有の敷地に、一部が共有する住棟が建ち、その中に各居住者専用の住戸があるという管理上の区分がなされており、専用庭、ルーフガーデンなどの一部の外部空間は特定の居住者が専用していることがわかる。規約上では、「全体の共有」「一部の共有」「専用」といった図式が明解であるといえよう。

#### 4.1.5 タウンハウス落合調査の概要

タウンハウス落合団地については、アンケート、インタビュー、行動観察、サーベイを行ったが、その概要についてはfig.4-1-2に示す。

### 4.2 タウンハウス落合団地の居住者意識

#### 4.2.1 居住者の属性

アンケートでは、居住者の属性について世帯全員の統制・年齢・性別・職業について聞いたが、ここでは以下の4項目について整理して述べる。

- 1) 世帯人数
- 2) 家族型
- 3) 世帯主年齢
- 4) 主婦の就業率

#### 1) 世帯人数

タウンハウス落合の世帯人数の分布を、fig.4-2-1に示す。平均は3.78人であった。世帯人数



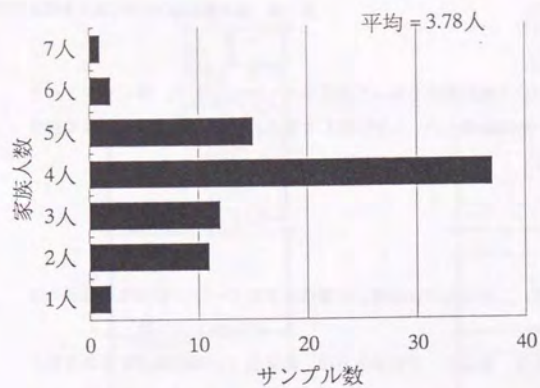


fig.4-2-1 家族人数

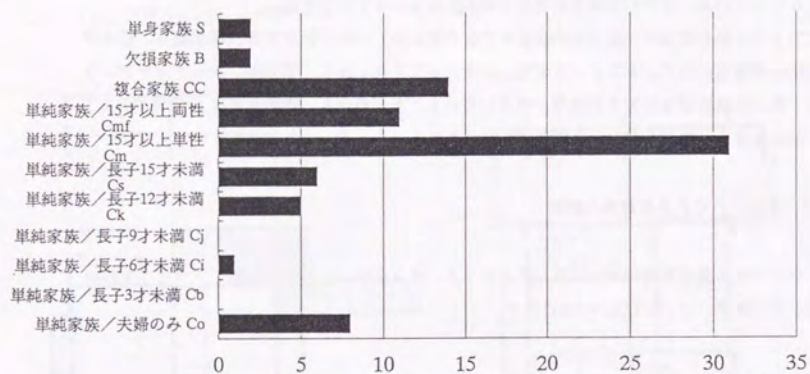


fig.4-2-2a 落合長子年齢別家族分類

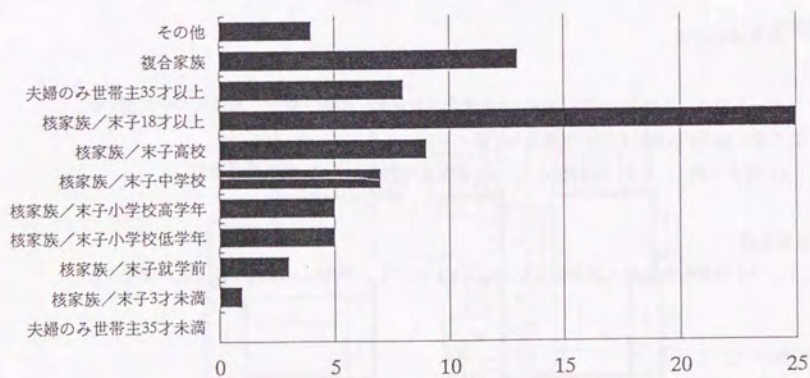


fig.4-2-2b 落合末子年齢別家族分類

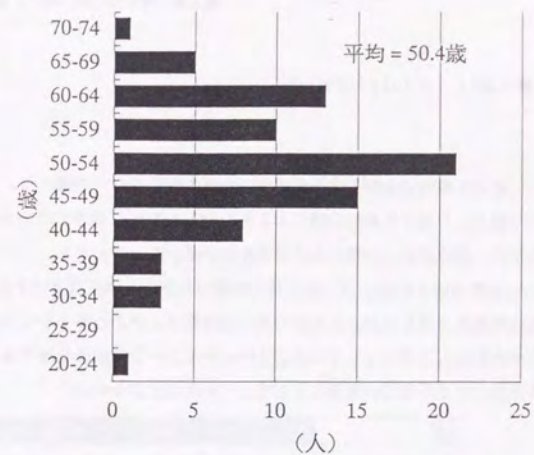


fig.4-2-3 落合世帯主年齢

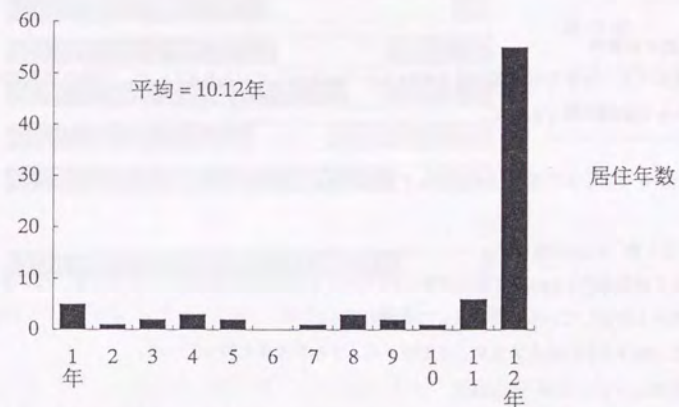


fig.4-2-4 居住年数

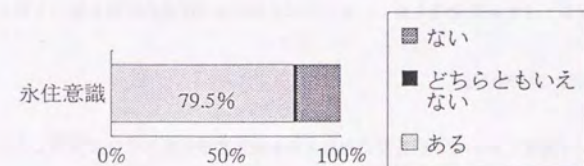


fig.4-2-5 落合永住意識



4人が、最も多く、最大は7人、最小は1人であった。

## 2) 家族型

家族型については、長子年齢別の分類と末子年齢別の分類の両者について調べた。

標準的な家族型の分類として長子年齢別分類によるものをfig.4-2-2aに示す。これから、15歳以上の子供のいる世帯、複合家族、夫婦のみの世帯などが多いことがわかる。

また末子の年齢別の分類 (fig.4-2-2b) は、住宅周辺の遊びの多い小学生以下の子供のいる割合について知るために補足的に示したが、これから末子も18歳以上がその多くをしめ、子育てが終わった夫婦のみの世帯なども多くなっていることがわかる。一方では若年層の夫婦のみの世帯や小学校以下の子供のいる世帯は14世帯にとどまっていることがわかる。

## 3) 世帯主年齢

世帯主年齢の分布をfig.4-2-3に示す。世帯主の平均年齢は50.4歳であり、グラフ上でも50～54歳前後を中心に分布していることがわかる。

## 4) 主婦の就業率

主婦のうち、仕事をもっているもの24人、パートをしているもの5人で、主婦の就業率は、パートを含め37.6%であった。

また居住年数と永住意識についてもアンケートで調べた。

## 5) 居住年数・永住意識

居住年数の分布をfig.4-2-4に示すが、12年と答えたものが全体の67.9%であり、12年前の建設当初から居住している世帯の多いことがわかる。

また、fig.4-2-5に見るように、8割近くの人が永住意識を持っている。

以上、この団地の居住者の多くは、12年前の建設時より居住し、この団地で子育てをし、そのピークもやがて過ぎて、悠々自適の生活をするシニア世代のといったような人々中心であることがわかる。また永住意識も高く、次のべる居住者の団地の評価も高いものと推測される。

### 4.2.2 居住者の団地評価

アンケート調査において、居住者に団地全体や住戸の満足度について質問した。

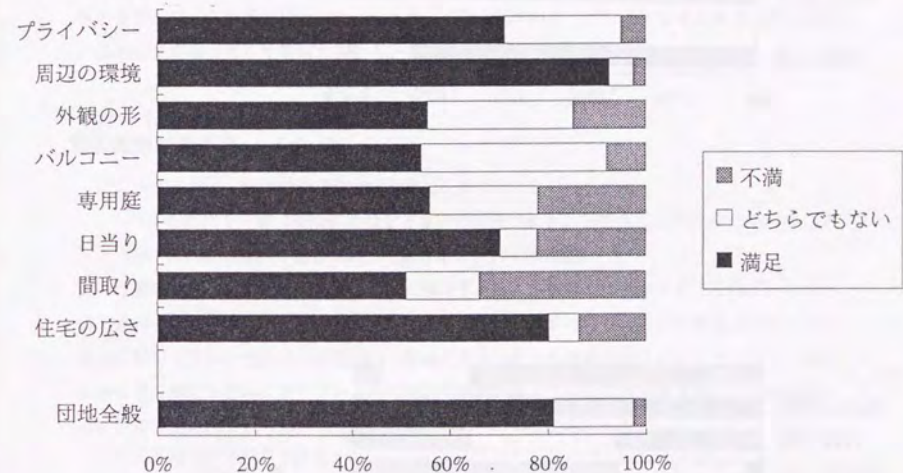


fig.4-2-6 落合団地全体満足度



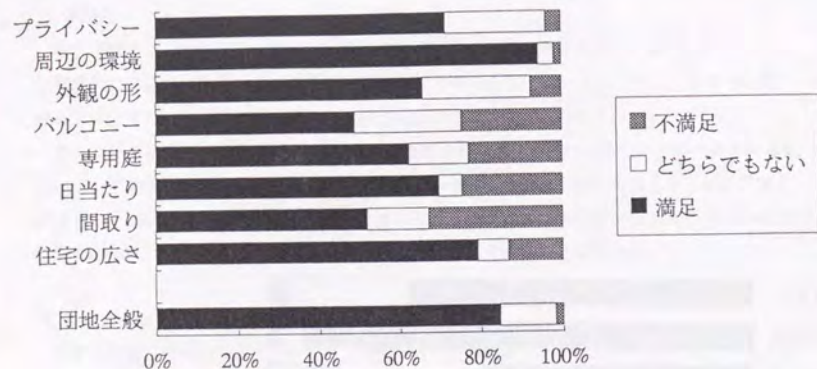


fig.4-2-7a 落合低層棟満足度

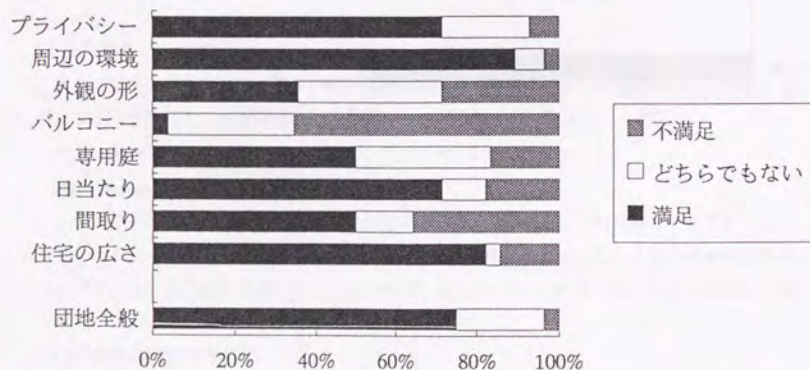


fig.4-2-7b 落合中層棟満足度

fig.4-2-6 は団地全体（低・中層棟両方）の居住者の満足度についてまとめたものだが、「団地全体」については81.2%の人が満足していると答え、不満と答えたものはわずか2世帯であった。

細かい内容について見てみると、「周辺の環境」（満足：92.6%）、「住宅の広さ」（満足：80.2%）、「プライバシー」（満足：71.2%）などについての評価が高く、「間取り」（不満：33.8%）、「専用庭」（不満：22.0%）、「日当たり」（不満：22.2%）などの項目についての満足が比較的低いことがわかる。

これを低層棟と中層棟にわけてみると（fig.4-2-7a,b）、団地全体については80%前後でそれほど顕著な差は見られないものの、中層棟において特にバルコニーに対して不満なことがわかる。実際、低層棟の住民は自住戸まわりの外部空間をかなり自由に利用しているが、中層棟の住民が使える外部空間はほぼバルコニーに限られている。このことを考えれば、評価の低いことは重要な点として指摘できよう。

#### 4.2.3 「近所」と認識する範囲の重なり

アンケートでは、居住者の領域意識を知るために、

「あなたにとって「近所」とはどこまでの範囲ですか。下の地図の中に赤で囲んでください。ご自宅は赤く塗りつぶしてあります。」（地図略）

という質問を行った。近所ということばの意味するところには個人差があり、その広い狭いが何を意味するかは曖昧であるが、近所ということばが一般的であり、近隣交際などのある社会的な行動を背景にした生活領域意識の一形態と考えられるので調査項目に加えた。また、落合団地全体の地図を回答に使っているので選択に制限を与えている恐れもあるが、ある制限の中で例えば団地内での一比較は可能であると考え、この調査を行った。

得られた回答を分類してみると、

fig.4-2-8 近所の型の分類

	中層棟	低層棟
1) 自住棟の一部	6 (27.3%)	1 (2.3%)
2) 自住棟	2 (9.1%)	5 (11.6%)
3) 複数の住棟	5 (22.7%)	22 (51.2%)
4) タウンハウス落合団地全体	8 (36.4%)	13 (30.2%)
5) (タウンハウス落合団地よりも広い) 地区	1 (4.5%)	2 (4.7%)
回答なし	6	10





fig.4-2-9 「近所」と認識する範囲の重なり

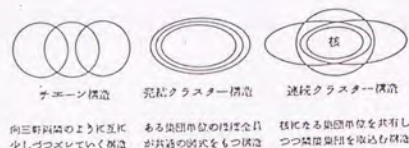


fig.4-2-10 「近所」の図式の重なり方の分類

というように分類できた。低層棟では複数の住棟を選んだものが回答の半数を越えている。

各住棟について調べてみると、それぞれが自住棟を含んでいくつかの異なった広がりがあるものとなっている (fig.4-2-9a,b,c,d)。複数の住棟を「近所」として選んでいるものも低層棟では半数以上と多い。4.1.4では管理上の「共」と「私」の空間分類について触れたが、この分類と近所の範囲とは少し異なったものであることがわかる。管理規約上では、住棟が重要な「共」のユニットであった。しかし、「近所の範囲」という近隣意識には、規約上の「共」の分類とは同じではなく、これより広いものになっている。

また「近所の範囲」を重ねあわせてみると、特に低層棟では異なった範囲がチェーン状に重なりあっており、この団地全体は「近所」という近隣意識の「集合のむすび」であることがわかる。

これは、鈴木、小林ら (1986) が下町の路地空間を調べて、「近所」の範囲を完結クラスター構造、連続クラスター構造、チェーン構造という図式 (fig.4-2-10) に分類したことに関連づけ論ずることができよう<sup>22</sup>。彼らの分類にしたがえば、各住棟の住民の意識は「連続クラスター構造」であるものの、団地全体でいえば核を共有しない「チェーン構造」の近所の図式の重なりをしていることになる。報告書のなかでは、チェーン構造は連続クラスター構造に比べて共有領域形成の上で劣っていると述べられている。事実、この121戸の団地の住民全員が近隣意識を共有して「共有領域」を構成していると考えたことには無理があるろう。それよりも緩やかな近隣意識の共有のかたちである「共居環境」を形成しているとは言えないだろうか考える。

#### 4.2.4 視線に対する意識と防ぐもの

住戸近傍の領域やプライバシーの意識に重要な影響を与えるものとして、住戸外部の人の視線がある。特に低層棟の1階部分の居室は視線にさらされやすく気になるだろうと予想される。一方では、2章でも示したように、高層になるほど視線は気にならなくなるという予想が可能である。ここでは、状況によっては必ずしもそうならないことを示す。

アンケート調査では視線の意識について、次のような場合にわけて調べた。

- 1) 居間 2) 食堂 3) 夫婦寝室

上の1)～3)の場合について、それぞれ

- A) 近所の人が外にいる場合 B) 見知らぬ人が外にいる場合

について、計6パターンの質問をした、その結果を中層棟と低層棟にわけてfig.4-2-11a,bに示

<sup>22</sup> 「近傍概念に基づく住居集合計画の研究」昭和60年度科学研究費研究成果報告書 (代表鈴木成文) pp.24-56 II. 住戸近傍空間における共有領域



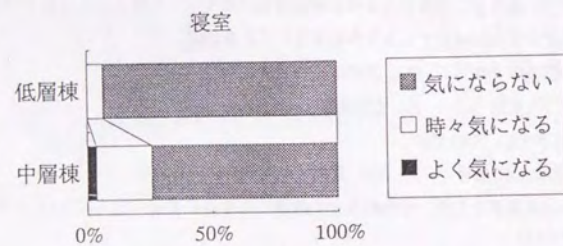
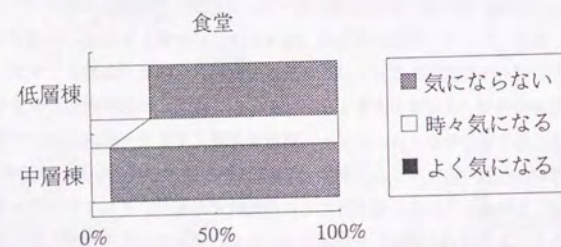
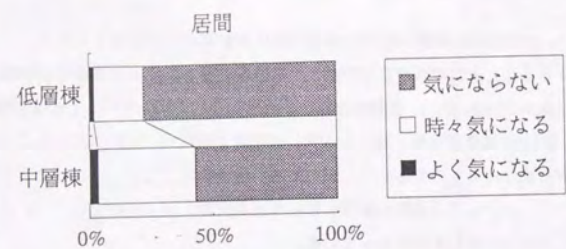


fig.4-2-11a 近所の人の視線が気になるか

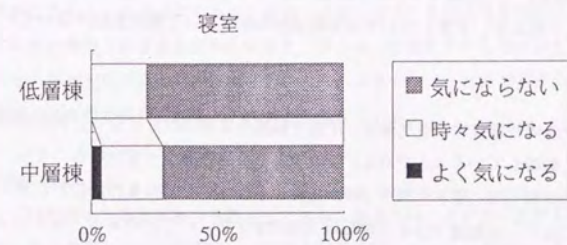
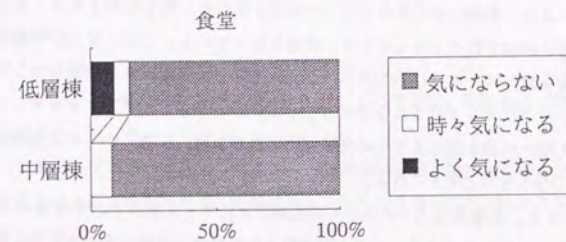
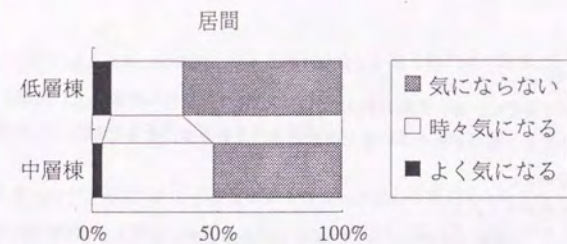


fig.4-2-11b 見知らぬ人の視線が気になるか



し、以下その解釈をのべる。

A) 近所の人が外にいる場合と、B) 見知らぬ人が外にいる場合とを比べてみると、前者の方が「よく気になる」と答えた割合がやや多いなど微妙な違いはあるが、ともに似たような傾向を示していることがわかる。

しかし部屋別にみると差が見られる。

1) の居間にいる際には、中層棟の居住者の方が外部からの視線を気にする人が多い。特に、中層棟の居間にいる場合がもっとも視線を気にすることが多く、4～5割の人がよくまたは時々気になると答えている。これは低層棟のほうが（中層棟に比べて）居間のほとんどが1階部分で、視線の侵害を受けやすいだろうという予想とは矛盾する。しかし、低層棟の住戸のまわりには内部への視線をさえぎるような樹木が十分に繁っており、視線は十分に遮られる。さらには内部への視線をさえぎるような樹木が十分に繁っており、視線は十分に遮られる。さらに、樹木が居住者自身の手によって必要に応じてコントロールできるため、例えば窓をあけて日光を入れようとしても外部の視線を気にしなくてもよい状況となっている。これに対し、中層棟は専用庭のある1階部分を除けば、南側にバルコニーがあるのみで、外部からの視線をコントロールするにはカーテンやブラインドによらなければならない。いつもカーテンやブラインドをしていないので、地上階の外部を通る人や他の住棟（同団地の2階、3階）からの視線は、遮蔽物が少ないだけ気になるものと考えられる。

3) の夫婦寝室についても、中層棟の方が外部からの視線を気にする人が多い。中層棟の寝室は住棟の北側にとられ、北側のプロムナード多摩中央団地の中層棟の南側居室に面して、かなり多数の人の視線に触れる可能性がある。一方、低層棟では夫婦寝室は2階以上に設けられることが多く、カーテンや雨戸などで外部からの視線を遮断でき、かつ2階部分の周囲にある部屋も寝室などのプライベートな性格の部屋が多いことから、不安感が生じにくいと考えられる。

2) の食堂では、低層棟の方が視線を気にする割合が高い。これは、住戸内での食堂の位置に起因するものと考えられるが、食堂については視線が気になるという絶対数は少ないといえる。

このように、外部からの視線に対する意識は、階数や部屋の位置ばかりでなく、樹木など外部空間の要素が大きく影響しているようである。低層棟と中層棟の異なっているところは、低層棟では、住戸近傍の外部空間に樹木や雨戸（後から付けられた）などのものが住戸を薄く被うようにしているのに対し、中層棟ではそれがない（雨戸すらない）ことである。こういった樹木のなどの被いは、長期的にみれば居住者のコントロールが可能なものであり、それが外部の視線から住戸内部をまもっていると考えられる。一方で、中層棟はあってもバルコニー程度の薄い被いであり、これに対しても居住者はあまり働きかけられない（洗濯ものを干すことぐ

らいであり、逆にこのために樹木はあまりおけない）など対照的である。

#### 4.2.5 オモテ・居間の向き・アクセス・南面

集合住宅のアクセスの向きや生活の向きについては、さまざまな角度から検討がなされてきた（例えば鈴木ら（1984）など）。アクセスの向きは外部空間の領域化や近隣交際などになんとも大きな影響を与えるし、生活の向きも重要な要素であると論じられてきた。調査では住戸の向きをきめる要素が何であるか、考えられるいくつかの要素について調べた。それが、

- 1) 「オモテ」 2) 生活の向き 3) アクセス 4) 南面

であるが、これらは以下のように相互に関連していることがわかる。

##### 1) 「オモテ」

アンケート調査では、各住戸内部の平面図を示し、

「家のオモテ側はどちらだと思いますか。上の平面図に範囲を○で囲んでください。」との質問をおこなった。

その結果は、住戸の外部空間（バルコニーの付近）を指し示す回答や、居間などの室内空間を○をつける回答をするもの、玄関付近を示すものも見られた。fig.4-2-12にはそれらをほぼ図式化して示した。

全体としてみると低層棟1階では「オモテ」はアクセスの向きと一致する例が多く（35/40例）、そうでない場合には南側の居間を指し示しているものがほとんどであった（3/40例）。

一方、中層棟は、アクセスは階段室からであるが、こちらを選ぶものは少なく（3/23例）、南側を選ぶ例（17/23例）が多い。（アクセスのある階段室と南側の両方を選ぶものが3/23例あった。）

以上のことから、アクセスの向きと南向きは家のオモテを決定する重要な要因であるといえる。どちらが優先されるか条件かという点、アクセスの側に十分な空間がとられ玄関の体をなしている低層棟ではアクセスが優先され、アクセスまわりがそれほど十分に広くとられていない中層棟では南側が優先されるということになっている。

##### 2) 生活の向き

ここでは居間と食事室の場所を特定してある。調査では、各戸の平面図を示し、部屋の名前を聞き、また代表的な生活行為について使う部屋を聞いたので、それにより各住戸の居間と食事をする空間を特定することができた。この生活の向きは、平面型によるところが大きく、あらかじめ決められた間取りによって使われ方の大方のパターンが決ってしまうが、住戸によ



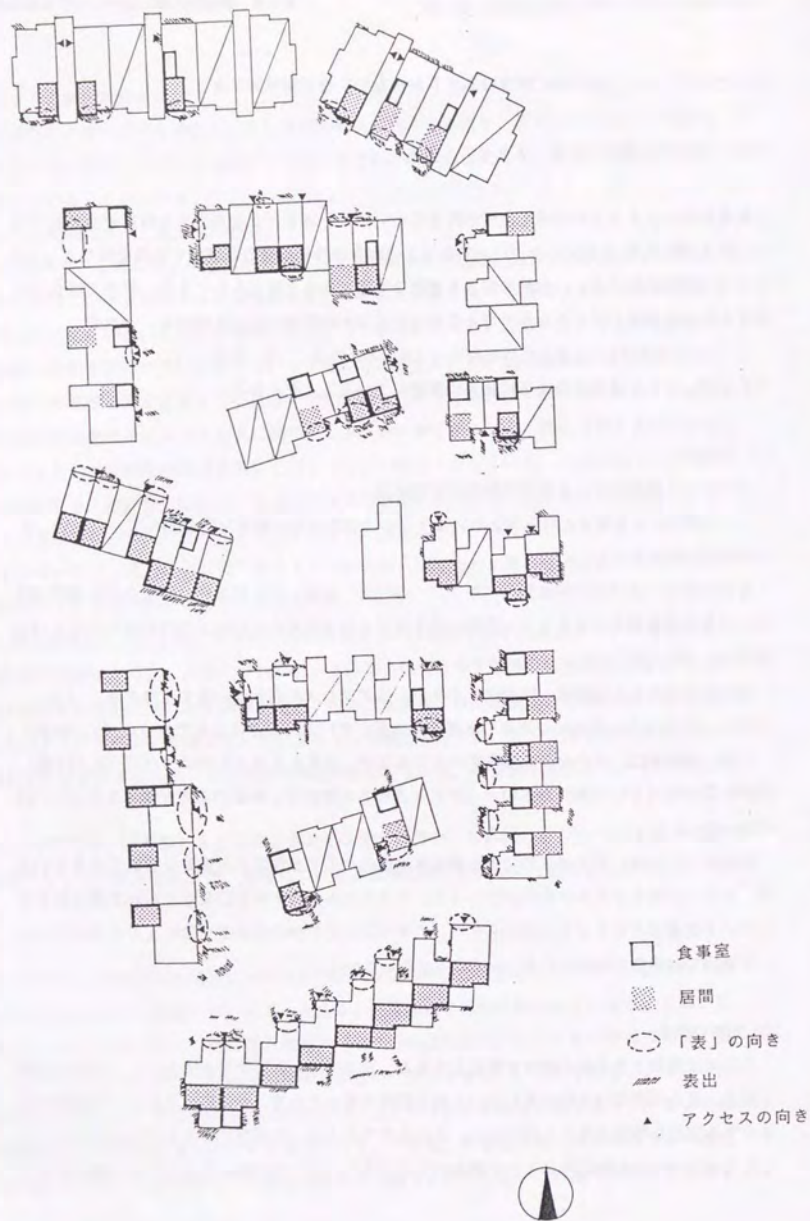


fig.4-2-12a

落合団地におけるアクセスの向き、「表」の向き、公室の配置、表出 (1階)

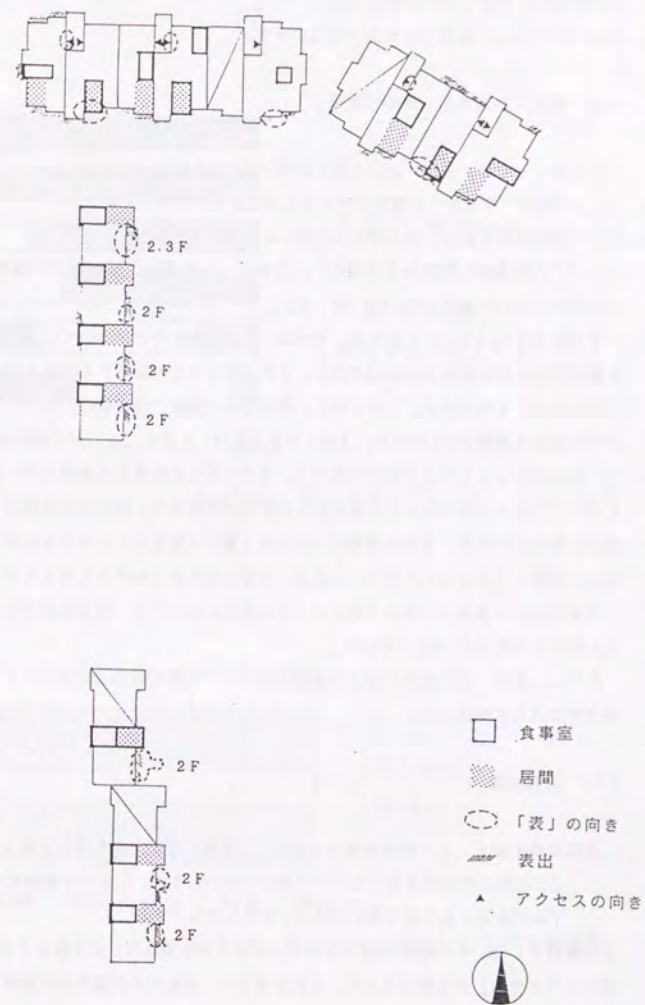


fig.4-2-12b

落合団地におけるアクセスの向き、「表」の向き、公室の配置、表出 (3階)



ては多様性を見せているものもある。

3) 4) についてもあわせてfig.4-2-12に示す。

#### 4.2.6 表出・あふれ出しとその意識

アンケートでは、表出・あふれ出しについての意識を知るために、

「家の'オモテ'に置いてよいと思われるものは何ですか。」

という質問項目を設け、表出やあふれ出しを代表する次の

「イ.植木鉢 ロ.手作りの表札 ハ.自転車 ニ.洗濯物 ホ.物置 ヘ.掃除用具」

それぞれについて意識を聞いた（択一式）。

その結果をfig.4-2-13aに示すが、植木鉢、手作りの表札などについては「すすんで置くべき」と答えたものが2割から3割ほどあり、また「置くべきでない」との答えがなく、表出と完全に認められるものである。これに対し、掃除道具、物置、洗濯物は「置いてもよい」と消極的にでも認める意識が5%程度で、「置くべきでない」と答えたものが7割程度と多数であるので、あふれ出しとしてよいものであろう。その中間の自転車と洗濯物だが、自転車は「置いてもよい」「置くべきでない」と答えたものがほぼ同数あり、居住者の意識の上では曖昧な位置付けにあるといえる。また洗濯物については「置いてもよい」とするものが14.6%あり、58.7%の人が置くべきでないと答えているが、中間におかれるものとも考えられる。

「家の内外に意識してものを飾るか」との質問に対しては、団地全体では「はい」と「いいえ」が半々であった（fig.4-2-13b）。

ただし、表出・あふれ出しを上での質問に基づいて分類し地図上にプロットしても、分布に明確な差は見られなかった。

#### 4.2.7 近隣交際

近隣交際を知人・友人関係全体の中でとらえようと考え、その所在を知るために、

「ご近所とお付き合いについておうかがいします。」という前提のもと、

「ふだんよく会う知り合いの方は、どちらの方ですか。」

との質問をした。その結果はfig.4-2-14に示すが「落合団地内」が半数を占め、「それ以外の多摩ニュータウン」が3割であった。これをすぐに、団地内の近隣交際の頻度が高いと読みかえることはできないが、近所という範囲は、多摩ニュータウンの中でもタウンハウス落合というまとまりが重要な位置をしめていることが理解される。また

「多摩ニュータウンで、どんなきっかけでお知り合い・お友だちができましたか。」（複

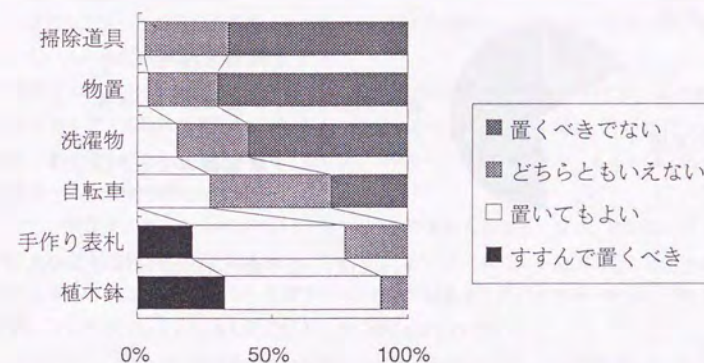


fig.4-2-13a 家の「オモテ」に置いてよいもの

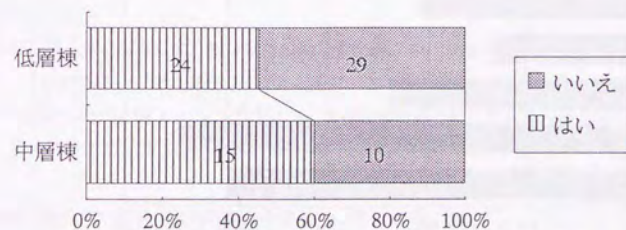


fig.4-2-13b 家の内外に意識してものを飾るか



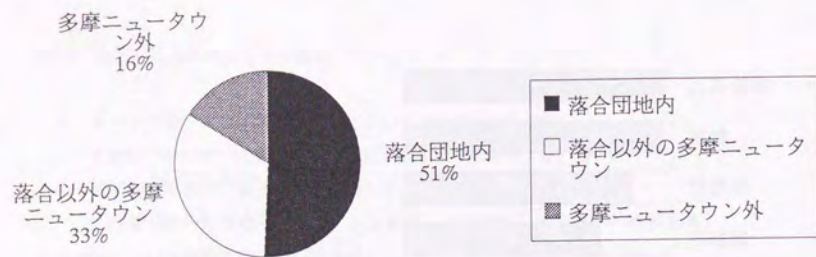


fig.4-2-14 よく会う知り合いはどこの人ですか

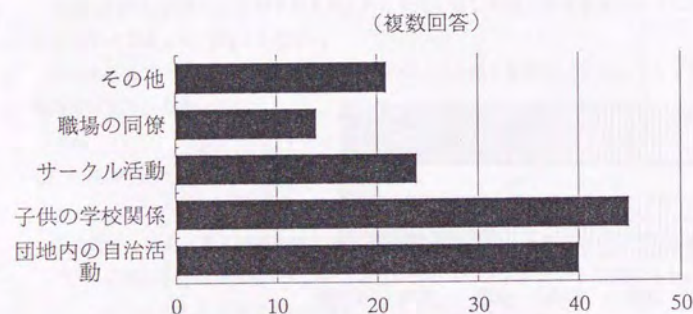


fig.4-2-15 多摩ニュータウンで知り合いになるきっかけ

数回答)

との問いに対してfig.4-2-15のような結果を得た。「団地内の自治活動」や「子供の学校関係」が多く選ばれており、落合団地というまとまりが、重要な近隣のまとまりであるとわかる。

さらに、近隣交際については、

「お知り合い・お友だちの家はどこですか。右の地図の中に○をつけてください。特に親しい人には◎をつけてください。」

との質問をした。これに対する回答例はfig.4-2-16a,bに示すように必ずしも同じ棟とかの近くに限られておらず、団地内の各所に広がっており、狭い意味での地縁的な関係ばかりではない。居住者は、家が近くだからというのみでは知り合い関係をつくらないうで、もっと気のあった人と付き合うという傾向が見られる。

しかし、居住者によって「お知り合い・お友だち」の意味も異なっており、回答数のばらつきの大きかったり、未回答の居住者も多い。ことから、データに次のような加工をした。つまりすべての回答の○(◎も同じに見る)を累積させ、各住戸に集まった○の数をその家の「知り合い指名数」としたのである。これを図に記入したのがfig.4-2-17である。

これをみると、知り合い指名数の高い交際の活発な居住者のいるところが浮び上がってくる。

隣近所の人との在・不在について、

「家の中にいらっしゃるときに、両どなりの方がいるかどうか分かりますか。」

との質問を行なった。これを低層棟と中層棟とで比較したのがfig.4-2-18だが、低層棟では86%の人が「よくわかる」「わかることもある」と答え、中層棟の37%の回答と大きく異なった結果となっている。在宅がわかる理由についても聞いたが、ほとんどが物音をその理由に挙げており、これは低層棟・中層棟ともに変わらない。低層棟と中層棟の違いの理由はここでは特定できない。

また、知り合いなどに会う際に電話の果たす役割について知るために、

「お知り合い・お友達の方と会うときに、どうなさいますか。」(複数回答)

との質問をしたが、fig.4-2-19に示すように直接に訪ねるのよりも電話をして訪ねることが多く電話の果たす役割の大きいことがわかった。

近隣交際については、屋外行動との関係で4.4節でさらに論ずる。



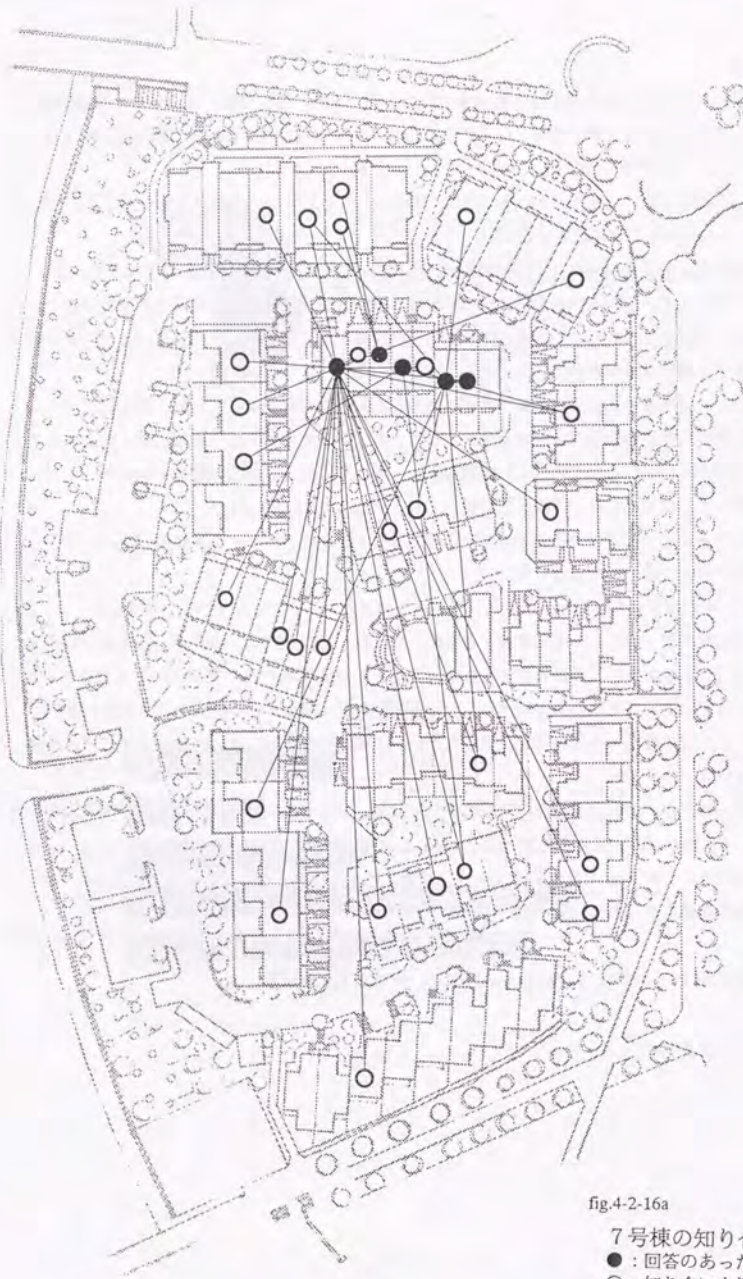


fig.4-2-16a

7号棟の知り合いの分布

- : 回答のあった住戸
- : 知り合いと答えた住戸

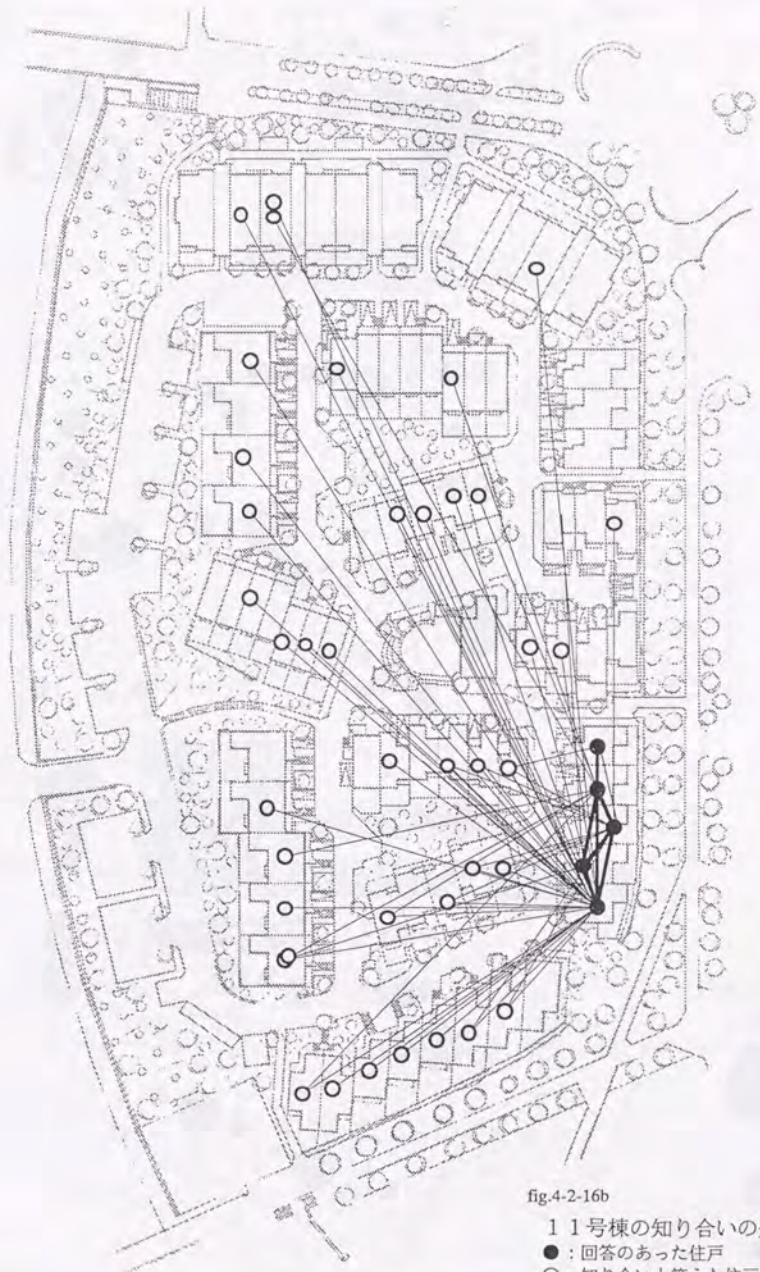


fig.4-2-16b

11号棟の知り合いの分布

- : 回答のあった住戸
- : 知り合いと答えた住戸
- : お互いに知り合いと答えた関係



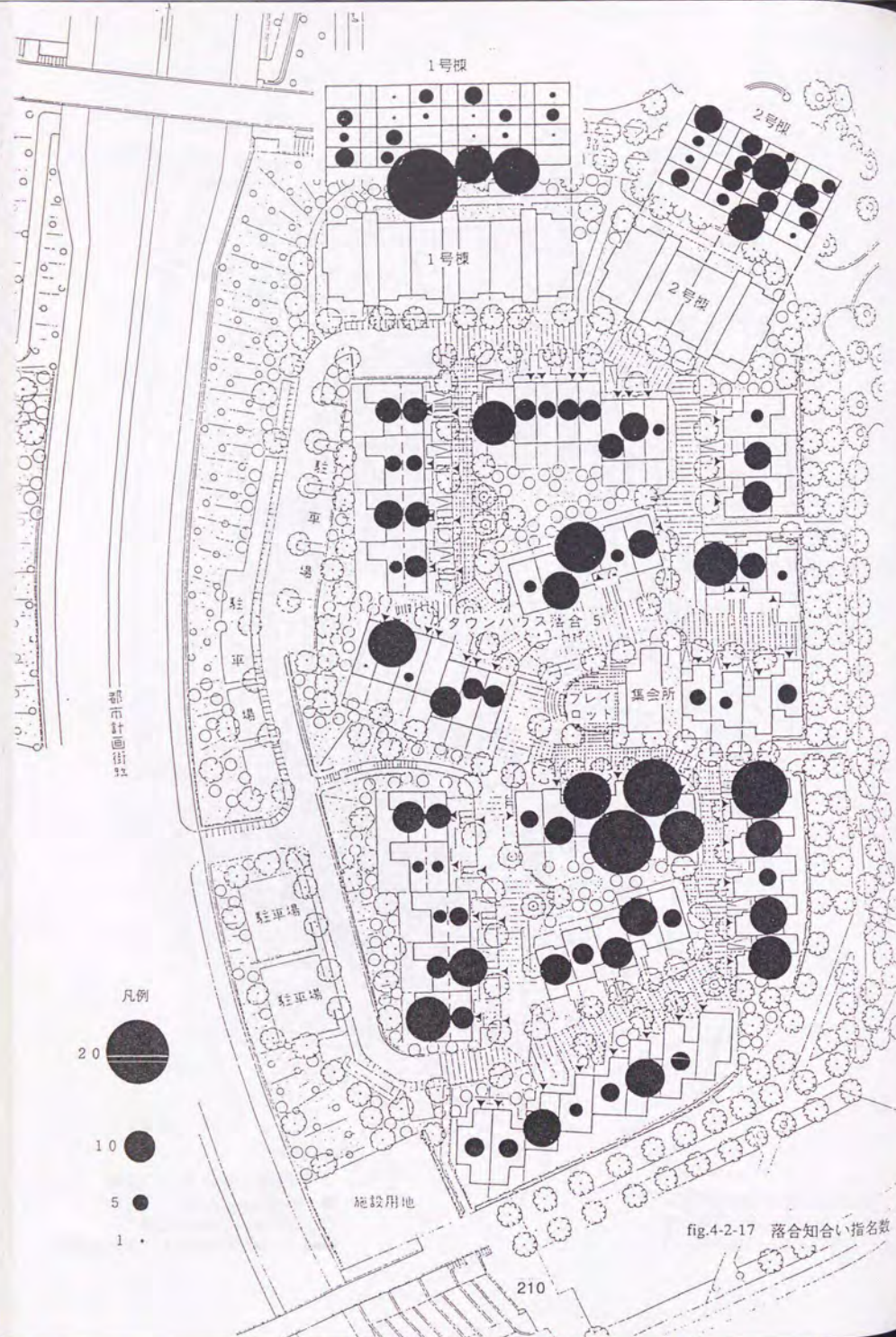


fig.4-2-17 落合知合い指名数

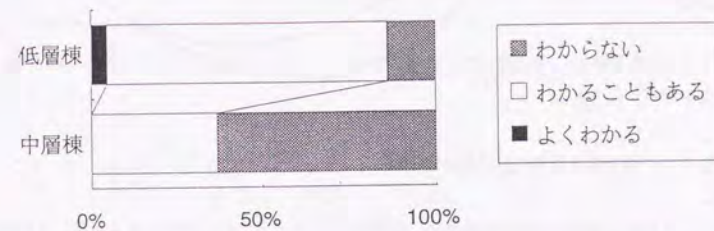


fig.4-2-18 隣の人がいるのわかるか

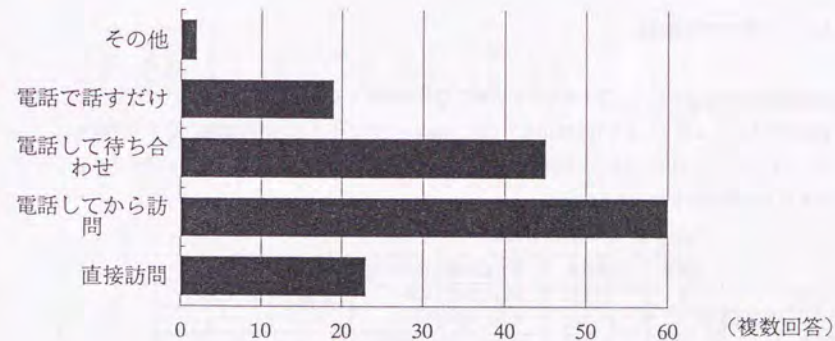


fig.4-2-19 落合知合いと会うにはどうするか



## 4.3 行動よりみた住戸の近隣領域

本節では主に行動観察により得られた結果をもとに、タウンハウス落合団地の住戸近隣の領域の構造を明らかにする。

## 4.3.1 タウンハウス落合団地の行動観察調査概要

タウンハウス落合団地の行動観察調査は、fig.4-1-2に示すように1993年9月26日（日）と9月29日（水）の両日に行なった。両日とも晴または曇であったが、特に9月26日は久しぶりのよい天気ですぐ屋外での活動が活発だと思われた一日であった。平日と休日のを選んだのは、最も行動の内容に違いがあるという観点からである。

行動観察調査は、序でも説明したように、調査員が団地内外を網羅したコースを選んで歩き、調査員の周囲で起こった行動を逐次記録していく方法である。午前7時30分より午後7時30分までの間、30分間隔で巡回して行なった。一回の行動観察に要した時間は、ほぼ5分程度であった。また、一定方向に偏って歩行行動が見られる可能性もあるので、1回毎に正逆がえてコースを歩いて観察した。

## 4.3.2 行動の時間的推移

行動観察で観察された人数と種類別の行動の時間的推移を見るために、1日当たり24回の行動観察の結果を3回（つまり1時間30分）ごと、fig.4-3-1のように8つの時間帯に分けて比較することにした。これは1回ごとの偶然性をなす意味で行うものであるが、各回に想定されるできごとは表に示されるようになる。

fig.4-3-1 行動観察の時間帯

時間帯	行動観察	各行動観察の開始時刻	想定されるできごと
1	1～3回	7:30、8:00、8:30-	出勤（平日）、登校
2	4～6回	9:00、9:30、10:00-	
3	7～9回	10:30、11:00、11:30-	
4	10～12回	12:00、12:30、13:00-	昼食時
5	13～15回	13:30、14:00、14:30-	
6	16～18回	15:00、15:30、16:00-	下校
7	19～21回	16:30、17:00、17:30-	
8	22～24回	18:00、18:30、19:00-	日没後、夕食時

このような時間区分にもとづいて結果の観察された人の数の時間推移をまとめたものがfig.4-3-

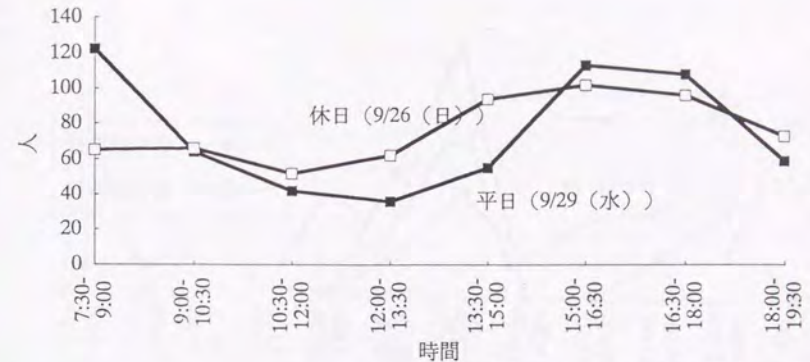
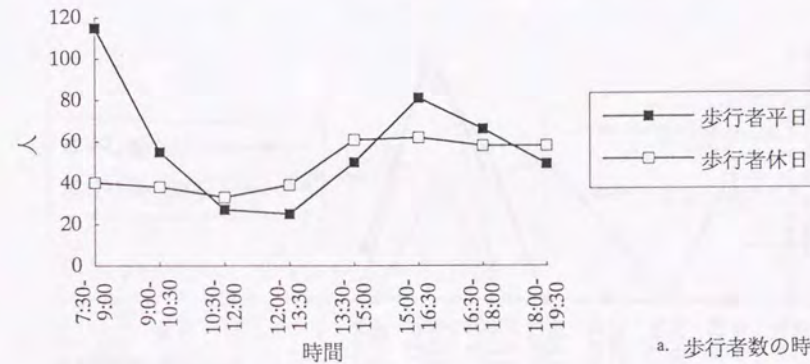
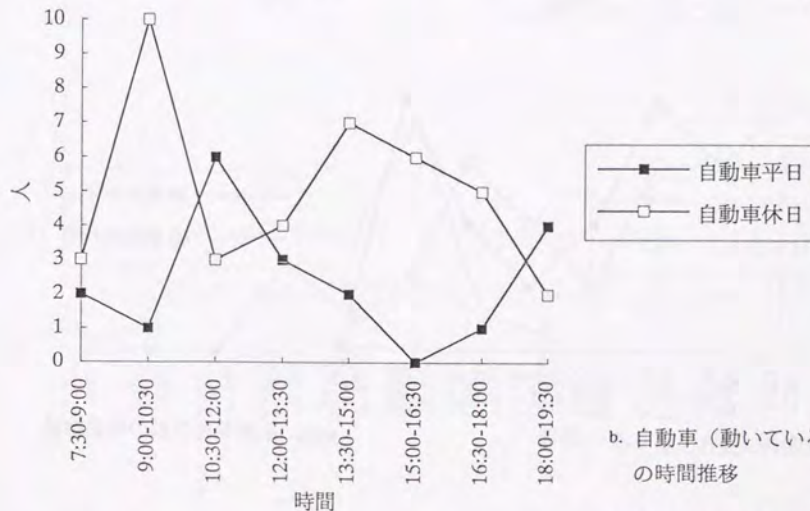


fig.4-3-2 総観察人数の時間推移（1時間30分ごと）



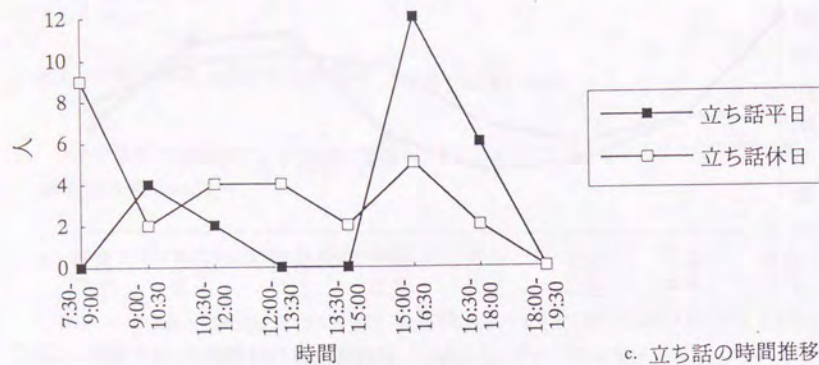
a. 歩行者数の時間推移



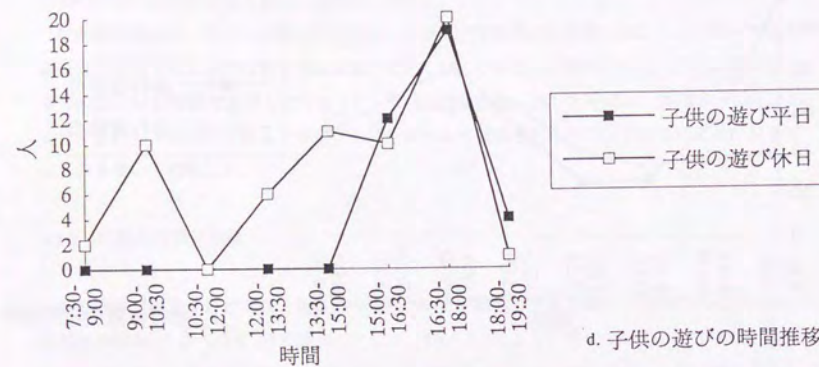
b. 自動車（動いている）数の時間推移

fig.4-3-4 各行動の人数の時間推移

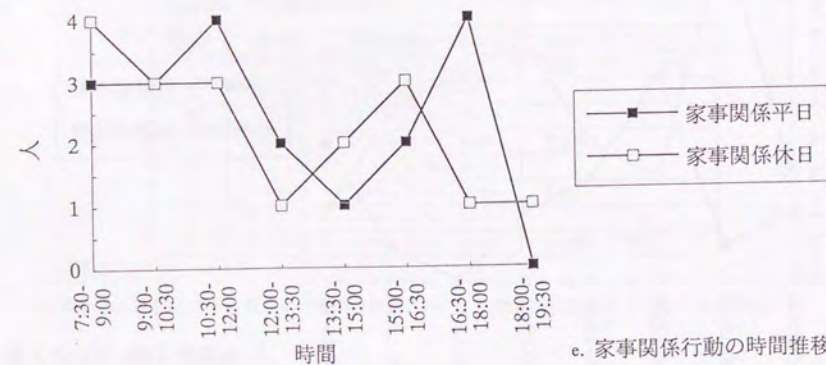




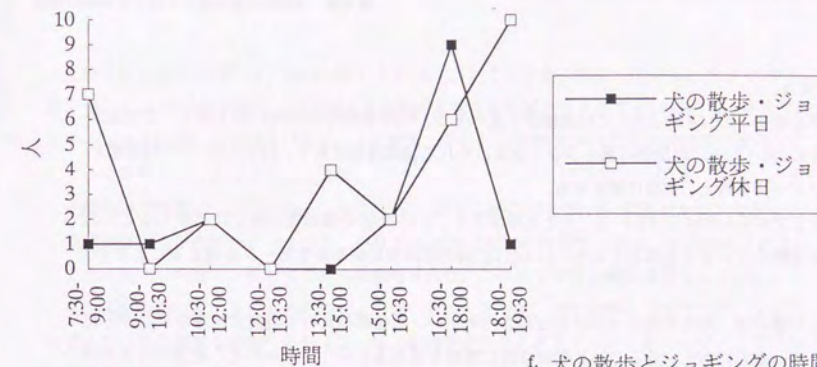
c. 立ち話の時間推移



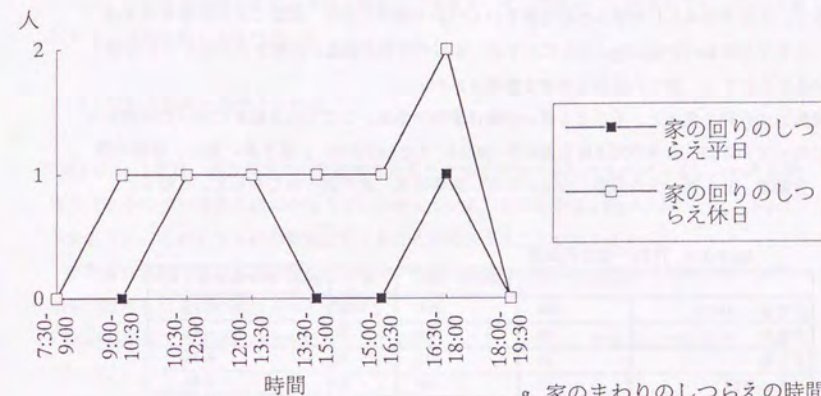
d. 子供の遊びの時間推移



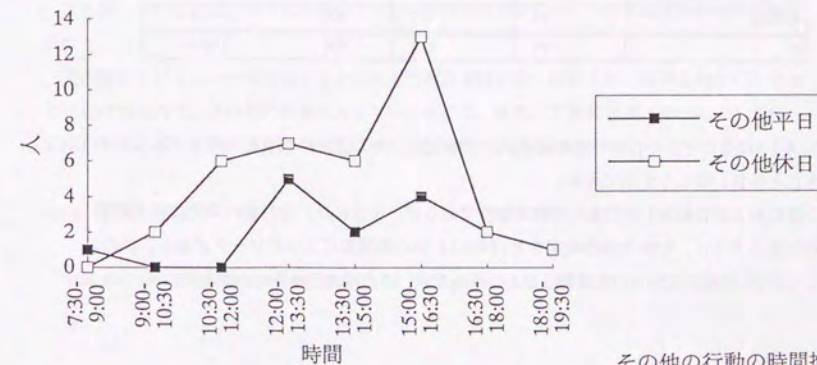
e. 家事関係行動の時間推移



f. 犬の散歩とジョギングの時間推移



g. 家のまわりのしつらえの時間推移



その他の行動の時間推移



2である。

平日である9月29日（水）の時間推移を述べると、7:30-9:00の時間帯に最も多く、以後減少して12:00-13:30の時間帯に最も少なくなる。それ以降は増加に転じ、15:00-16:30の時間帯に再びピークを迎え、以後は減少する。

休日である9月26日（日）をこれと比較すると、7:30-9:00の時間帯は平日ほど多くなく、あまり変動のないまま推移していき、15:00-16:30の時間帯に緩やかなピークを迎えることがわかる。

この違いは、平日が会社や学校などのルーティーンの仕事があって時間に拘束されながら活動しているのに対し、休日には比較的自由に時間を使えるという、我々のごく普通の日常生活を反映しているものだろう。

さて、ここではさらに観察された行動をいくつかの種類に分け、種類ごとに時間推移を追った。ここでの行動の分類はfig.4-3-3に示すが、本研究の他の調査と比較するために同じ分類を用いることにする。詳しい説明は序章を参照されたい。

種類別に行動を見ると、もっとも多い行動は歩行である。ここでは自転車にのった移動もこれに含めているが、全体の70.9%を占める（9/26、9/29の平均）。以下多い順に、子供の遊び、自動車、立ち話、犬の散歩・ジョギング、家事関係、家の回りのしつらえ、となる。

fig.4-3-3 行動の種類別総数

	9月29日（水）	9月26日（日）	計	全体に対する割合（%）
歩行者・自転車	468	389	857	70.89
自動車	19	40	59	4.88
立ち話	24	28	52	4.30
子供の遊び	35	60	95	7.86
家事関係	19	18	37	3.06
犬の散歩・ジョギング	16	31	47	3.89
家の回りのしつらえ	3	7	10	0.83
その他	15	37	52	4.30
計	599	610	1209	100.00

fig.4-3-4はそれぞれの行動の時間推移を、9/29（水）および9/26（日）のそれぞれについて（平日と休日）示したものである。

「歩行および自転車」の行動の時間的推移であるが、平日には、全行動の時間推移で説明したのと同じように、7:30-9:00の時間帯と15:00-16:30の時間帯に二つのピークがある。これに対して休日は13:30-15:00の時間帯にピークがあるが、その増減はゆるやかである。

自動車数の推移の様子は、9/29（水）と9/26（日）とで大きく異なっている。平日では午前中10:30-12:00の時間帯に、おそらくは主婦の買物などのピークを迎えるのに対し、休日では9:00-10:30に行楽などに出かけるピークが来て、さらに午後の13:30-15:00の時間帯に買物などでかけるピークがあると考えられる。

子供の遊び行動は、9/29（水）、9/26（日）ともに16:30-18:00の時間帯がもっとも多い。この時間帯が遊びのピークであろう。平日では12:00-13:30の時間帯以前は、子供の遊びがまったく見られないのに対し、休日では相当数観察された。この点で平日と休日は異なっていた。

家事関係行動、家のまわりのしつらえ、あいさつ・立ち話、犬の散歩とジョギング、などそれぞれの行動の推移を細かく分析するには、観察数が少なすぎると考えられるので、ここではグラフを示すのみにとどめる。ただし、その他の行動のグラフにある15:00-16:30の時間帯のピークは、自動車を洗車している男性を観察したもので、その実数以上に印象的であったので特記する。（後に詳しく述べる。）

#### 4.3.3 行動の種類と場所との対応

fig.4-3-5は平日、休日両方の行動観察の結果をすべてプロットしたものである。これから団地のまわりの歩行者用道路にかなり密に分布していることがわかる。fig.4-3-6からfig.4-3-11に示すように、これをさらに行動別に見てみると次のようなことがわかる。

歩行者は団地内外の各所で観察されたが、団地の西側の公園脇の歩行者用道路に密にあり、団地内はそれに比べて疎に分布している。

団地のまわりの道は歩行者用道路なので当然のこととしてだが、自動車は団地内部に分布している。

家事関係の行動はほぼ団地内部のみで観察された。

子供の遊びは、団地内外の両方で観察された。

立ち話・あいさつは、平日は団地のまわりの歩行者用道路で多く、休日は団地内各所で観察された。

犬の散歩・ジョギングは団地のまわりの歩行者用道路で多く観察され、家のまわりのしつらえ行動は団地内で、その他の行動に入っているものは、来客、工事関係者、セールス、郵便・宅配、クリーニング屋、洗車などで、これらは団地内に多かった。

#### 4.3.4 行動の密度

本項では人の密度分布について述べる。すでにfig.4-3-5に示したように、1日に観察された





fig.4-3-5a

集合・行動観察 全行動  
休日 (9/26 (日))



fig.4-3-5b

集合・行動観察 全行動  
平日 (9/29 (水))

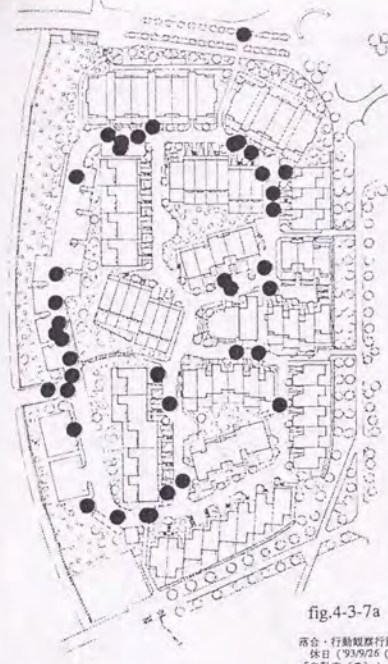


fig.4-3-7a

集合・行動観察行動別分類  
休日 (9/26 (日))  
「自転車 (●)」



fig.4-3-7b

集合・行動観察行動別分類  
平日 (9/29 (水))  
「自転車 (●)」

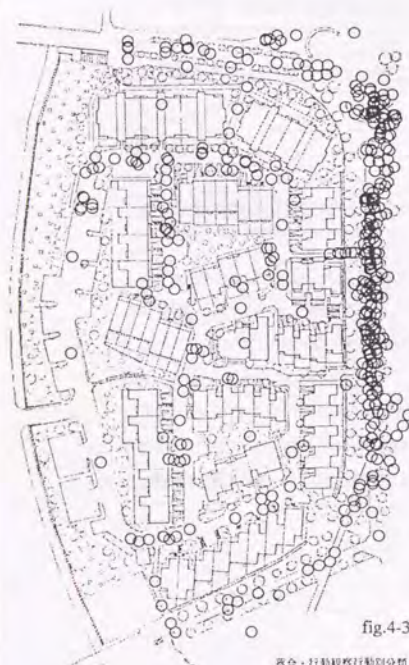


fig.4-3-6a

集合・行動観察行動別分類  
休日 (9/26 (日))  
「歩行者・自転車に乗った人 (○)」



fig.4-3-6b

集合・行動観察行動別分類  
平日 (9/29 (水))  
「歩行者・自転車に乗った人 (○)」



fig.4-3-8a

集合・行動観察行動別分類  
休日 (9/26 (日))  
「家内関係の行動 (X)」



fig.4-3-8b

集合・行動観察行動別分類  
平日 (9/29 (水))  
「家内関係の行動 (X)」





図4-3-9a  
 集合・行動履歴行動履歴分組  
 休日 (93/9/26 (日))  
 平日 (93/9/29 (木))  
 「子供の遊び (△)」



図4-3-9b  
 集合・行動履歴行動履歴分組  
 平日 (93/9/29 (木))  
 「子供の遊び (△)」



図4-3-10a  
 集合・行動履歴行動履歴分組  
 休日 (93/9/26 (日))  
 平日 (93/9/29 (木))  
 「立寄り・散歩 (□)」



図4-3-10b  
 集合・行動履歴行動履歴分組  
 平日 (93/9/29 (木))  
 「立寄り・散歩 (□)」



図4-3-11a  
 集合・行動履歴行動履歴分組  
 休日 (93/9/26 (日))  
 「人の散歩・ジョギング (○)」  
 家のしつらえ (H) ・その他 (☆)



図4-3-11b  
 集合・行動履歴行動履歴分組  
 平日 (93/9/29 (木))  
 「人の散歩・ジョギング (○)」  
 家のしつらえ (H) ・その他 (☆)



すべての行動を地図の上にプロットすると疎密があることがわかる。それを場所ごとに定量的に捉えようとする試みである。ここでいう密度分布とは、100m当たりの人の密度であり、

人/100m・回

という単位であらわすことにする。つまり、ある範囲の場所の密度分布とは、そこを100m歩くと出会うであろう人の数である。ここでは、行動観察調査をした2日間あわせて48回の観察人数の平均値を用い、それをそれぞれの道や場所の距離で除したものである。

さてこの分布を平面図上に示したものがfig.4-3-12であるが、この結果から、団地のまわり、特に団地の西側の公園沿いの歩行者用道路でもっとも多く観察されることがわかる。ここでは6.55人/100m・回であるから、およそ160mあるこの道を端から端まで歩くと、10人強とすれ違ったり追い抜かれたりすることになる。また団地の北側の道路も密度は高くなっている。

しかし、団地内部はこれに比較すると、人の密度分布は低い。平均で1.64人/100m・回であり、最も高い部分で2.53人/100m・回である（1号棟前）。団地の北側、1、2号棟前の辺りがやや多く分布しているが、その他の区間には中層棟通路、クルドサック、路地的空間、駐車場などを除けば、ほぼ一様に分布しているといえる。もし14号棟の住人が1、2号棟脇の通路から家に帰ってきたとすると、約200mの距離を歩いたとして、平均を用いて計算すれば3人強の人に会うことになる。約100mの5号棟の場合ならば1人半ぐらいである。段違いのペデストリアンウェイの値が6.55人/100m・回程度であるから、それに比べれば約1/4の値である（fig.4-3-13）。

fig.4-3-13 タウンハウス落合団地の人の分布密度（人/100m・回）

	団地内部	団地外
タウンハウス落合	1.64	6.55

このように団地内部では、人の分布密度すなわち人に出会う確率は団地外に比べて少ない。この出会った人々の行動の種類については4.3.5に示すこととする。

#### 4.3.5 行動より見た団地内外の人的環境の質の違い

4.3.4で論じたように、団地内外で観察される行動の種類には違いがみられた。ここではこれを人的環境としてとらえ、さらに掘り下げていくことにする。

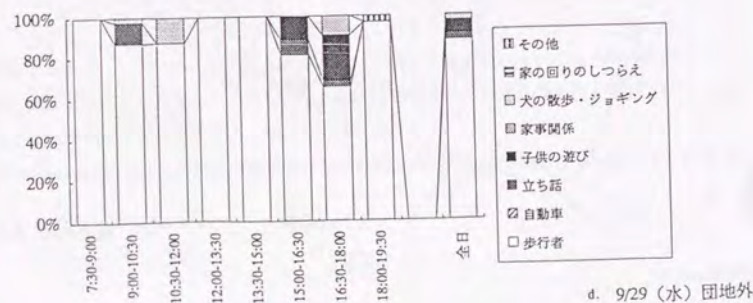
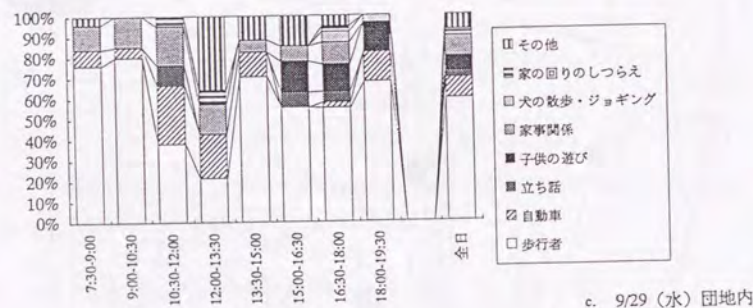
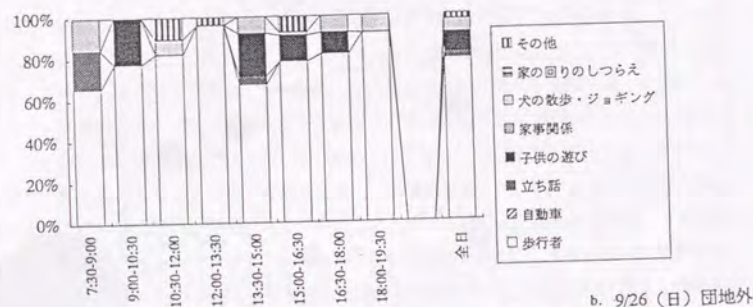
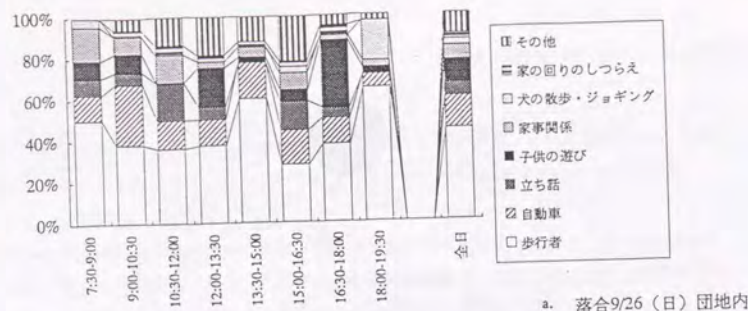
序章でも説明したが、ここでいう人的環境とは、ある人間のまわりにいる人間の状況をさす。特別に会話などの接触を伴わなくても、そこに認知できるかたちで同時に居るという状況を積極的に人的環境として扱おうというものである。

fig.4-3-14a,b,c,d は、行動観察の結果を行動別の割合でみたものであるが、9/29（水）の団地



fig.4-3-12 人の密度分布





外の場合は歩行以外の行動が12.4%であるのに対し、団地内では40.5%（自動車を除くと30.5%）あった。また、9/26（日）の団地外の場合は歩行以外の行動が21.3%であるのに対し、団地内では56.0%（自動車を除くと40.2%）あった。このように団地内の方が団地外に比べて歩行以外の行動の割合が多い。これらの行動は、立ち話・あいさつ、子供の遊び、家事関係、犬の散歩・ジョギング、家のまわりのしつらえ、洗車などであり、生活に関連した行動である。（fig.4-3-15には歩行以外の行動の割合の表を示した。）

fig.4-3-15 タウンハウス落合団地の歩行以外の行動の割合（）内は自動車を除いた場合

	団地内部	団地外
9/29 (水)	40.5% (30.5%)	12.4%
9/26 (日)	56.0% (40.2%)	21.3%
計	49.4% (36.3%)	16.7%

本研究ではこの観察される行動の内容のちがいを、人的環境の質のちがいと見る。

我々が日常に住宅地や団地を訪ねたときに感ずる雰囲気や印象が、物的環境と人的環境の両者によって得られるものだとなれば、この人的環境のちがいは、雰囲気の違いに関係してくるであろう。歩いていて生活に関連した行動をみると、そこが共的な、あるいは半私的な空間であることを感じるからである。

また、いままでも議論してきたように、この人的環境は物的環境とも関連してくるものと考えられる。つまり、物的環境は生活に関連した行動の結果つくられるものであり、生活に関連した行動の割合が多いことは、物的環境への働きかけと大きく関連しており、相互浸透的な状況と考えられるからである。

タウンハウス落合についていえば、4.3.4で述べたような人的環境の量のちがいと、本項で述べたような人的環境の質のちがいは、団地内は団地外に比べて観察される人の量は少ないが、質的には生活に関連したものが多く、これを総合してみれば、団地内の空間は、半「私」的空間と呼ぶことができるであろう。



## 4.4 タウンハウス落合の共居環境

## 4.4.1 「公」と「私」とその間の「移行空間」

タウンハウス落合団地の管理規約によれば、団地内の外部空間は、居住者全世帯の共有部分であるとされている。また、近隣交際の上においてもタウンハウス落合というまとまりは重要な役割を果たしている。

しかし、そこの外部空間を呼ぶのに、「共」という言葉を使うのは避ける。なぜなら、タウンハウス落合の外部環境は「共有空間」であり、全住戸の「共」を意味するが、それは現実には即していないからである。そこにはさまざまな段階がある上、「共」という言葉はあえて使うならば、「私」的な空間である住戸が共存しているという意味で「共居」的な空間であるが、混乱を避けるためにこの言葉は使わない。その代わりに、「私」と「公」をつなぎ、切り放すという意味で「移行空間」という言葉を使う (Lawrence 1987)<sup>23</sup>。そして、この移行空間中の段階を示すことを試みる。

以下、この移行空間の性格と「私」の側に振らせるもの、「公」の側に振らせるものを今までの考察に基づき挙げる。

まず、第一に庭などの専用である。規約上の団地の共有外部空間には、専用庭やルーフガーデン、専用駐車スペースも含まれ、専用庭などは居住者がその共有部分を専用していることになる。また、その他の共有空間でも表出・あふれ出しとして各世帯のものが置かれることもある。このような「共有空間の私的利用」は、より「私」に近いものである。

一方、人が歩いているという場所は、1章や2章で述べたように、たとえそれが居住者であっても「公」的な性格を帯びてくるものである。人的環境の量の多いところは、移行空間であっても「公」的な性格が加わることになる。歩いている人の視線などが「私」的空間を侵害することも考えられるのである。

同じ視線でも住戸の中からの居住者の視線は、移行空間に「私」的な性格をもたらすものであろう。団地内を歩いていて家の中からの視線を感じ、私的領域を侵害したことを感じることも多い。

このように「公」と「私」を結ぶ移行空間は、「公」と「私」の両方の側から人的環境や人的環境の痕跡としてのモノなどの影響を受けて、さまざまな段階で存在すると考えられる。この「公」と「私」の混在し構造化している様子を図化したものがfig.4-4-1である。

<sup>23</sup> Lawrence, R. J. (1987), "Housing, Dwelling and Homes", John Wiley and Sons Ltd. (邦訳「ヨーロッパの住居計画理論」鈴木成文監訳)

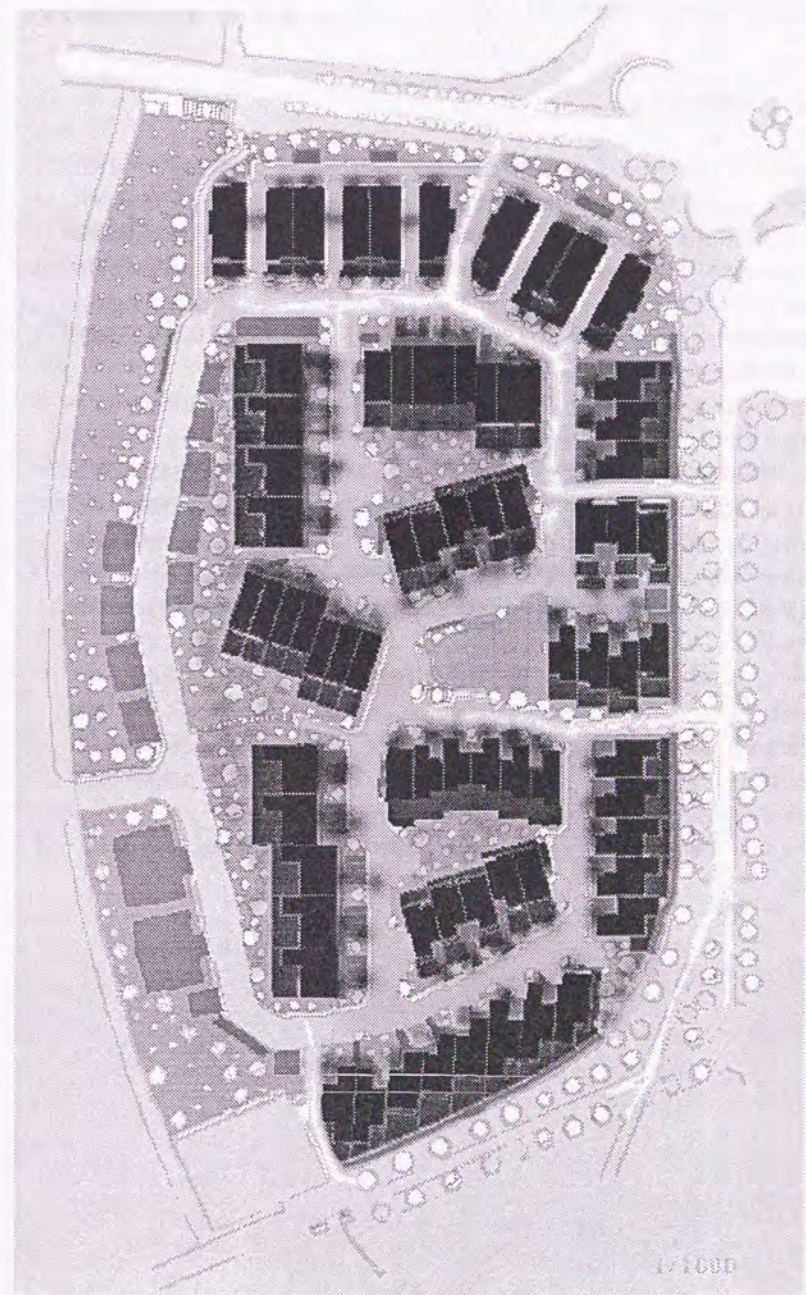


fig.4-4-1 タウンハウス落合における「公」と「私」の段階



## 4.4.2 緩やかなつながり

タウンハウス落合の空間は、行動観察で明らかになったように、まわりのベデに比べて、生活に関連した行動が多く、良好な居住環境を形成している。ある意味では、下町の路地空間に似たような性格も持ちあわせている。しかし、クルドサックになっているようなところは少なく、住戸はグルーピングは路地よりも弱いものになっている。車も進入してくる歩車共存の道路であることがこれには大きく影響している。また、近隣交際の面でもグルーピングによる凝集性はあまり見られない。このようにこの団地の構成は緩やかなつながりのもので、「私」的な空間である各住戸が移行空間に同居していることになる。

居住者同志の緩やかなつながりをしめす次のようなエピソードがあった。行動観察をしている日曜日などには、あちこちで男性が洗車している姿が見られた。これらの居住者の男性はおそらく世帯主であろうという働き盛りの年齢好であった。中には隣どうしの家の前で洗車をしている姿が観察された。しかし、観察している間に会話などを長くしている様子は観察されなかった。ずっと観察するわけにもいかないので断片的なデータであるが、その他の団地での経験からも、おそらくはあいさつ程度で、あまり会話は交わされないであろうと思われる。男性何人かがものもいわずに精を出して洗車している姿は、何となくそれぞれに幸福そうで、印象的であった。

このような同居状態は納得がいく。彼ら働き盛りの世帯主にとってみれば、日々の生活の中心は会社であり、休日にのみ家でゆっくりできる。近くで同じように洗車しているのは、隣近所ではあり見知っているが、あいさつ程度に関係がなく、結局のところ黙って洗車をする。こんな構図ではないだろうか。こんな「日曜日のワックスコミュニティ」は、同居環境の典型かと考えられるのである。

タウンハウス落合団地は地縁の共同体ではなく、同居環境である考えられる。

## 4.5 まとめ

本章で明らかにされたことは次の各項目のようにまとめられる。

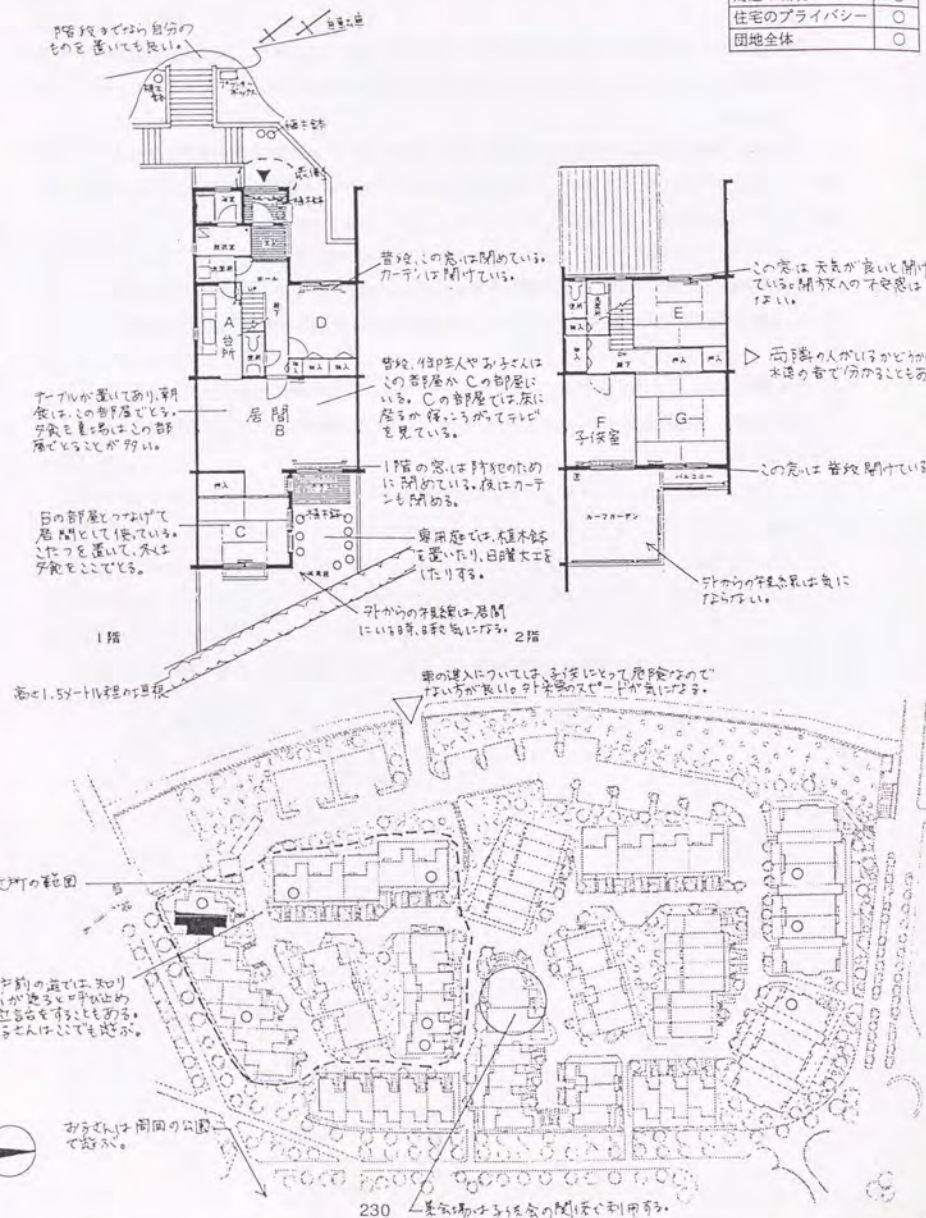
- 1) 近所の範囲や近隣交際についての調査から、居住者相互のつながりは、団地全体や住棟それぞれのグルーピングはそれほど強くなく、緩やかなものである。
- 2) 歩車共存の理念でつくられたタウンハウス落合の団地内は、人的環境の密度からいえば周囲のベデに比べて低くなっており、内部では生活向きの行動が多く観察されて、良好な同居環境になっている。
- 3) 居住者が生活を営む住戸には家の表や生活の向きなどがあり、また住戸外との視線による交流もあり、住戸全体としてはオモテとウラのある有機体のようなふるまいをする。
- 4) 団地内を「公」と「私」をつなぐ「移行空間」と考え、移行空間の中をモノによる専有、人の分布密度、視線の範囲など、いくつかの私的・公的要因の基準にもとづき段階分けすることをこころみた。



家族構成	世帯主	45歳	男	公務員	永住意識	ある
	妻	45歳	女	公務員	居住年数	12年
	長女	15歳	女	学生	知合い数	9戸
	次女	07歳	女	小学生		

落合団地の感想	形にそれぞれ変化があり、住戸の間隔があって良い。前が公園なのも良い。
---------	------------------------------------

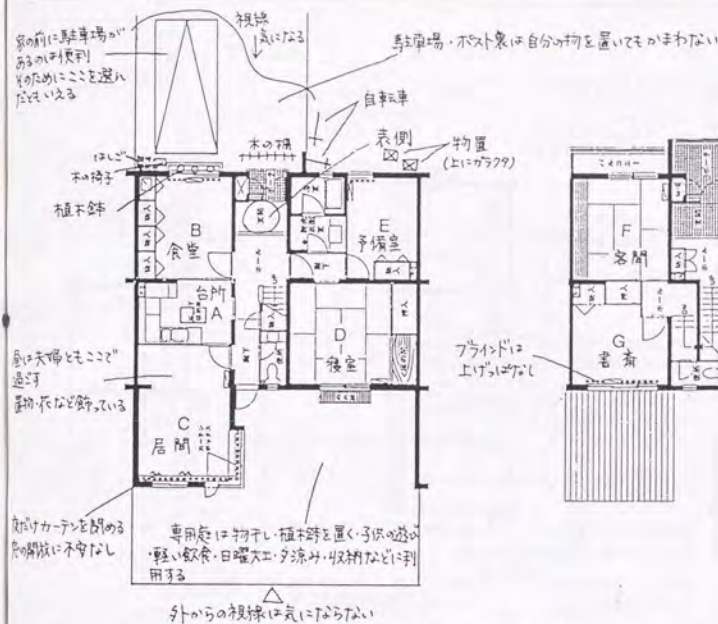
満足度	○満足	×不満足
△どちらでもない		
住宅の広さ	△	
間取り	×	
日当たり	○	
通風	○	
収納量	△	
台所の使いやすさ	×	
専用庭	×	
バルコニー	○	
外観の形	○	
周辺環境	○	
住宅のプライバシー	○	
団地全体	○	



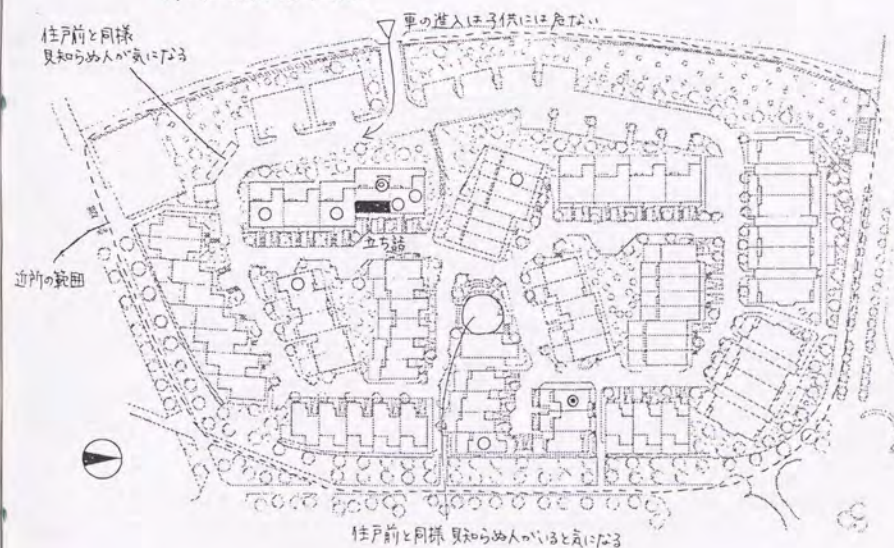
家族構成	世帯主	64歳	男	無職	永住意識	ある
	妻	61歳	女	無職	居住年数	12年
					知合い数	9戸

落合団地の感想	こちんまり独立していて良い。
---------	----------------

満足度 ○満足 ×不満 △どちらでもない	
住宅の広さ	○
間取り	△
日当たり	×
通風	
収納量	×
台所の使いやすさ	
専用庭	○
バルコニー	×
外観の形	△
周辺環境	△
住宅のプライバシー	△
団地全体	△



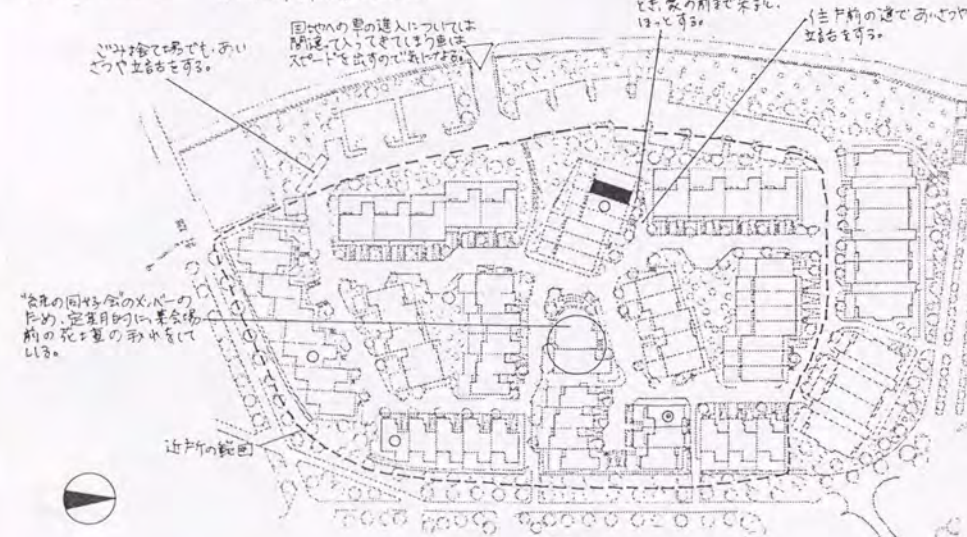
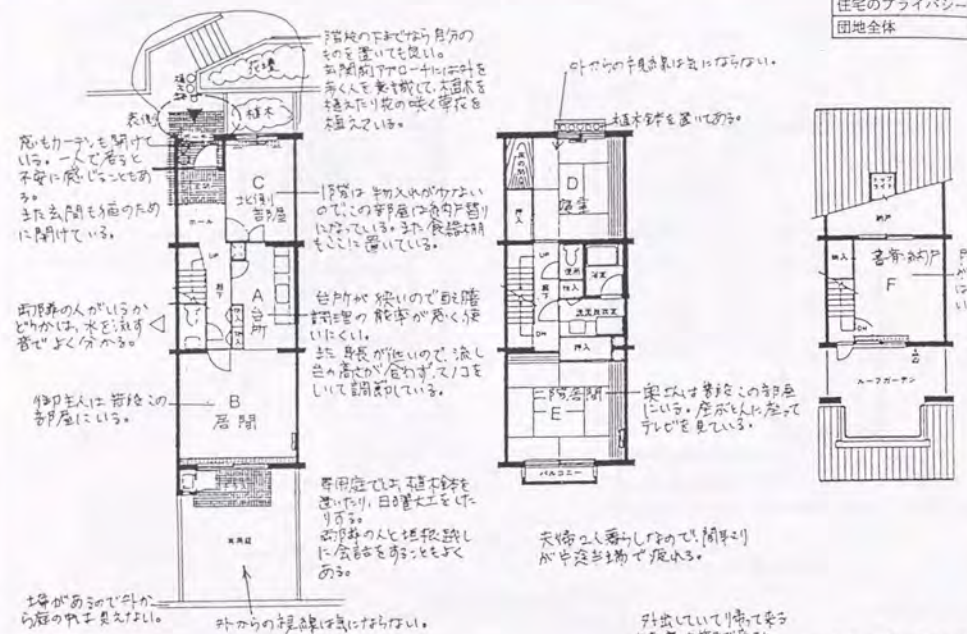
△ 西隣の人がいるかどうかは  
気にしていないので"か"からない





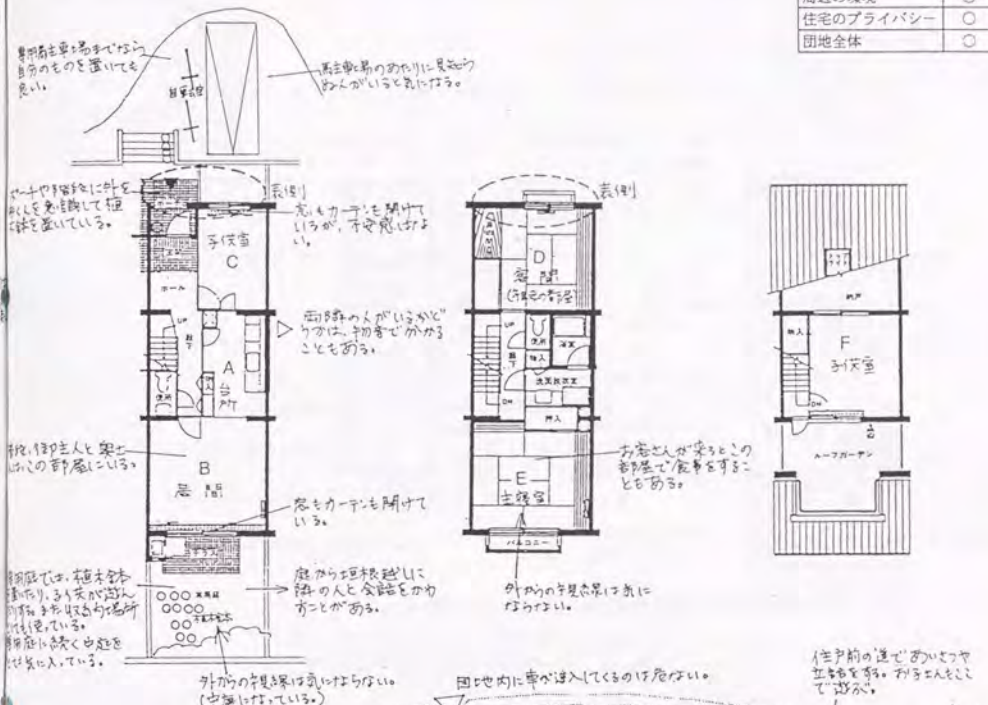
落合団地個人データフェイスシート		住戸番号	5-6	
家族構成	世帯主	66歳 男 無職	永住意識	なし
	妻	62歳 女 無職		居住年数
			知合い数	4戸
落合団地の感想: 嫌いな人達ともつき合わなければならないのが煩わしい。				

満足度	○満足 ×不満 △どちらでもない
住宅の広さ	○
間取り	×
日当たり	○
通風	○
収納量	○
台所の使いやすさ	×
専用庭	△
バルコニー	×
外観の形	○
周辺環境	○
住宅のプライバシー	△
団地全体	×



落合団地個人データフェイスシート		住戸番号	7-6	
家族構成	世帯主	38歳 男 地方公務員	永住意識	ある
	妻	40歳 女 教員	居住年数	11年
	長男	13歳 男 中2	知合い数	2戸
	長女	08歳 女 小3		
落合団地の感想: 住みやすい。中庭が気に入っている。				

満足度	○満足 ×不満 △どちらでもない
住宅の広さ	○
間取り	○
日当たり	○
通風	○
収納量	○
台所の使いやすさ	○
専用庭	○
バルコニー	○
外観の形	○
周辺環境	○
住宅のプライバシー	○
団地全体	○



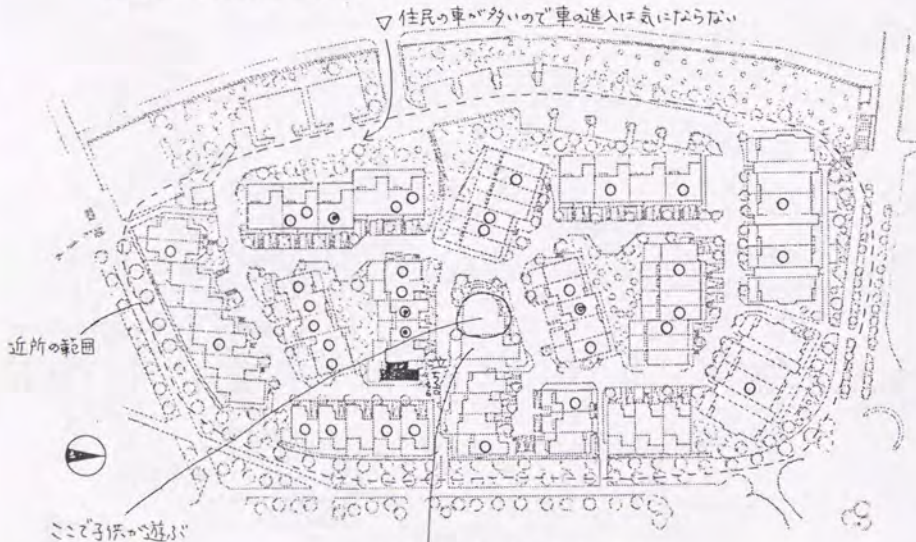
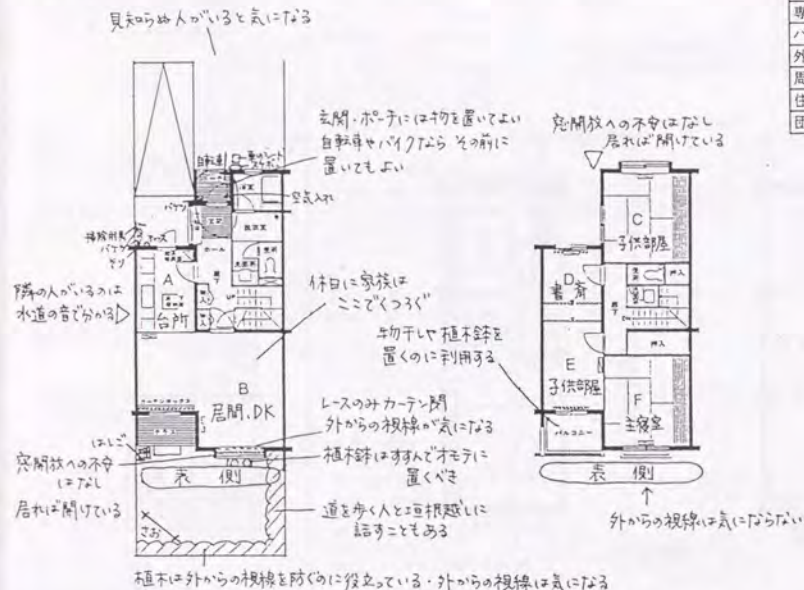


家族構成	世帯主	48歳	男	会社員
	妻	45歳	女	主婦
	長男	16歳	男	高2
	長女	13歳	女	中1

永住意識	ある
居住年数	12年
知合い数	36戸

落合団地の感想: こちんまりして、住みやすい。気に入っている。

満足度	○満足 ×不満 △どちらでもない
住宅の広さ	○
間取り	○
日当たり	×
通風	△
収納量	×
台所の使いやすさ	×
専用庭	×
バルコニー	×
外観の形	△
周辺の環境	○
住宅のプライバシー	△
団地全体	○

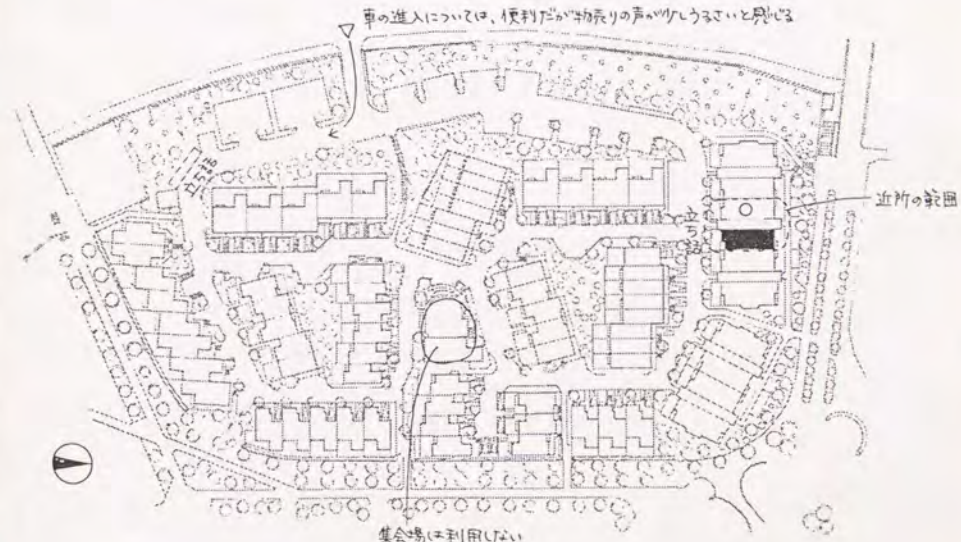
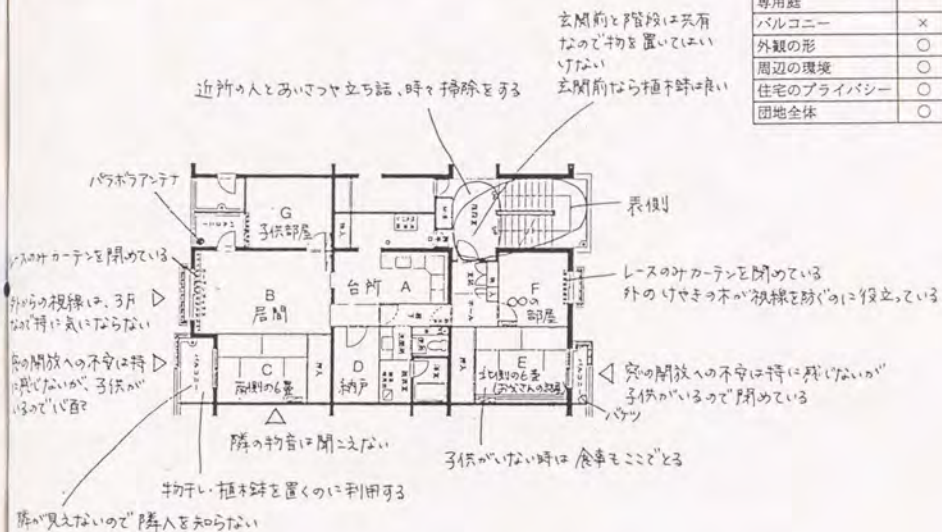


家族構成	世帯主	60歳	男	会社員
	妻	55歳	女	勤め
	娘	26歳	女	会社員
	息子	25歳	男	会社員

永住意識	なし
居住年数	12年
知合い数	1戸

落合団地の感想: 緑が多く、調和がとれている。近所付き合いも良く、住みやすい。

満足度	○満足 ×不満 △どちらでもない
住宅の広さ	○
間取り	△
日当たり	○
通風	○
収納量	○
台所の使いやすさ	△
専用庭	
バルコニー	×
外観の形	○
周辺の環境	○
住宅のプライバシー	○
団地全体	○





1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32
33	34	35	36
37	38	39	40
41	42	43	44
45	46	47	48
49	50	51	52
53	54	55	56
57	58	59	60
61	62	63	64
65	66	67	68
69	70	71	72
73	74	75	76
77	78	79	80
81	82	83	84
85	86	87	88
89	90	91	92
93	94	95	96
97	98	99	100



Figure 1: A detailed architectural floor plan of a building. The plan shows a central rectangular area with several smaller rooms and corridors branching off. The drawing is in black ink on a light background. There are labels in Japanese characters around the perimeter of the plan, likely indicating different sections or rooms.

# Chapter 1: Introduction

## 1.1. Background

The background of this study is the need for a comprehensive understanding of the current state of the field. This involves a thorough review of existing literature and a clear definition of the research objectives. The study aims to explore the various factors that influence the outcome of the research and to provide a detailed analysis of the results.

## 1.2. Objectives

The primary objective of this study is to investigate the relationship between the variables under examination. This involves a detailed analysis of the data collected and a comparison of the results with the theoretical framework. The study also aims to identify the key factors that contribute to the observed outcomes and to provide a clear explanation of the underlying mechanisms. The research is designed to be both exploratory and confirmatory, allowing for a comprehensive understanding of the phenomenon being studied.

The study is structured into several chapters, each focusing on a specific aspect of the research. The first chapter provides an overview of the field and the research objectives. The subsequent chapters delve into the methodology, data analysis, and the results of the study. The final chapter discusses the implications of the findings and provides recommendations for future research.



## 第5章 共居環境を生み出すデザイン

### 5.0 本章の目的

本章の目的は、イギリスの2つのテラスハウス形式の集合住宅を比較しながら、そのデザインの違いが大きく居住者の生活・行動にまで関わってくることを明らかにすることにある。生活を営む住戸の空間はそれ自体が有機体のようなふるまいをするものであり、この私的空間と完全な公的空間とを移行させる集合住宅の外部空間の役割は大きい。2つの集合住宅はともにテラスハウス形式で建てられており、ロンドンの中心部に位置するものである。<sup>81)</sup>

### 5.1 メイデンレーンとエルムビレッジ

#### 5.1.1 現代の英国集合住宅

イギリスにはテラスハウスという形式の長屋建ての集住形式がある。都市部においてはこれが伝統的で一般的な居住形式であった。しかし、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間に郊外住宅として二戸一住宅semi-detachedが大量に建てられたり、第二次世界大戦の後には、イギリスでは住宅の大量供給のためにさまざまな試みがなされ、さまざまな形式で住宅が建設された。これには、例えばニュータウンなどの大規模開発や、板状の中高層集合住宅やタワー状の集合住宅などがミックスして計画する例などさまざまなものがあった。しかし大量供給に対する批判もでてくるようになって、そういった批判に対応して、より細かく密にデザインされた集合住宅—例えばリントンゲートLillington Gate EstateやコベントガーデンオダムOdams Walkなど—が建てられるようになった。また、'An introduction to Housing Layout' (1978) <sup>82)</sup> に示されるような、デザインの細かなガイドラインまでもつくられるようになった。これらは日本にも大きな影響を及ぼした。こういった集合住宅の最大の供給組織がGLC (大ロンドン庁: Greater London Council) であった。

現在では、1985年にサッチャー政権下でGLCも解体され、公共的な組織による公共住宅の供給が下火になってくるのに応じて、集合住宅のさまざまな試みも、伝統的なものに回帰する傾

<sup>81)</sup> この章は、ロンドン大学バートレットスクールの修士課程 (MSc in Advanced Architectural Studies 1988) におけるケーススタディとしてまとめたものを、加筆修正したものである。

<sup>82)</sup> 邦訳「低層集合住宅のレイアウト」GLC編、延藤安弘監訳



向にある。

ここで扱う2つの集合住宅メイデンレーンMaiden LaneとエルムビレッジElm Villageは、1982年と1984年に、ちょうどこういった住宅政策の転換期前に建てられたものである。メイデンレーンは、モダニズムのデザインで建てられたもので、テラスハウス形式をとりながらも、設計の上でさまざまな試みをしている公共住宅である。これに対してエルムビレッジは折衷様式のデザインをであり、伝統的なテラスハウス形式を踏襲しているものといえる。また当時のイギリス流の「民活」ともいえる民間主体による供給であった。

両者ともに、ロンドンの最も大きな鉄道のターミナルの一つであるキングスクロス駅の貨物区に接しており、まわりから切り離されたような立地である (fig.5-1-1)。

### 5.1.2 メイデンレーンのプロフィール

メイデンレーンはロンドンのカムデン区の北、キングスクロス駅の北側に位置する (fig.5-1-2)。東側にはヨークウェイをはさんで倉庫・工場があり、西側は線路が掘割の中を走り、北側にはテラスハウスがならんでおり、この団地とは塀で仕切られている。メイデンレーンは外部に対して閉鎖的で、団地への入り口は、セントポールクレセント (北側)、メイデンレーン (東側)、サービス用入り口 (北側)、線路を越えた歩道橋 (西側) の3つに限られている。観察した限りでは北側のセントポールクレセントとサービス用の入り口が頻繁に使われていた (fig.5-1-3)。

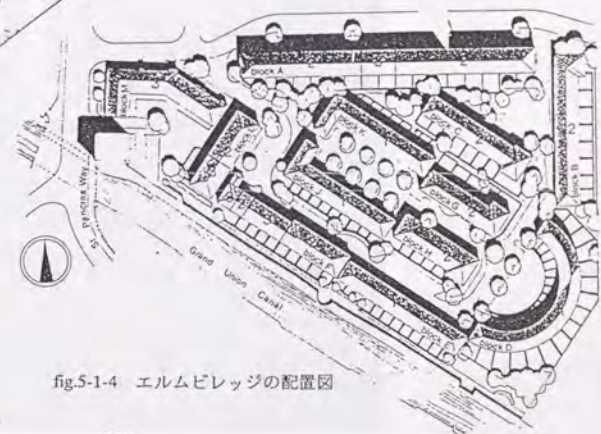
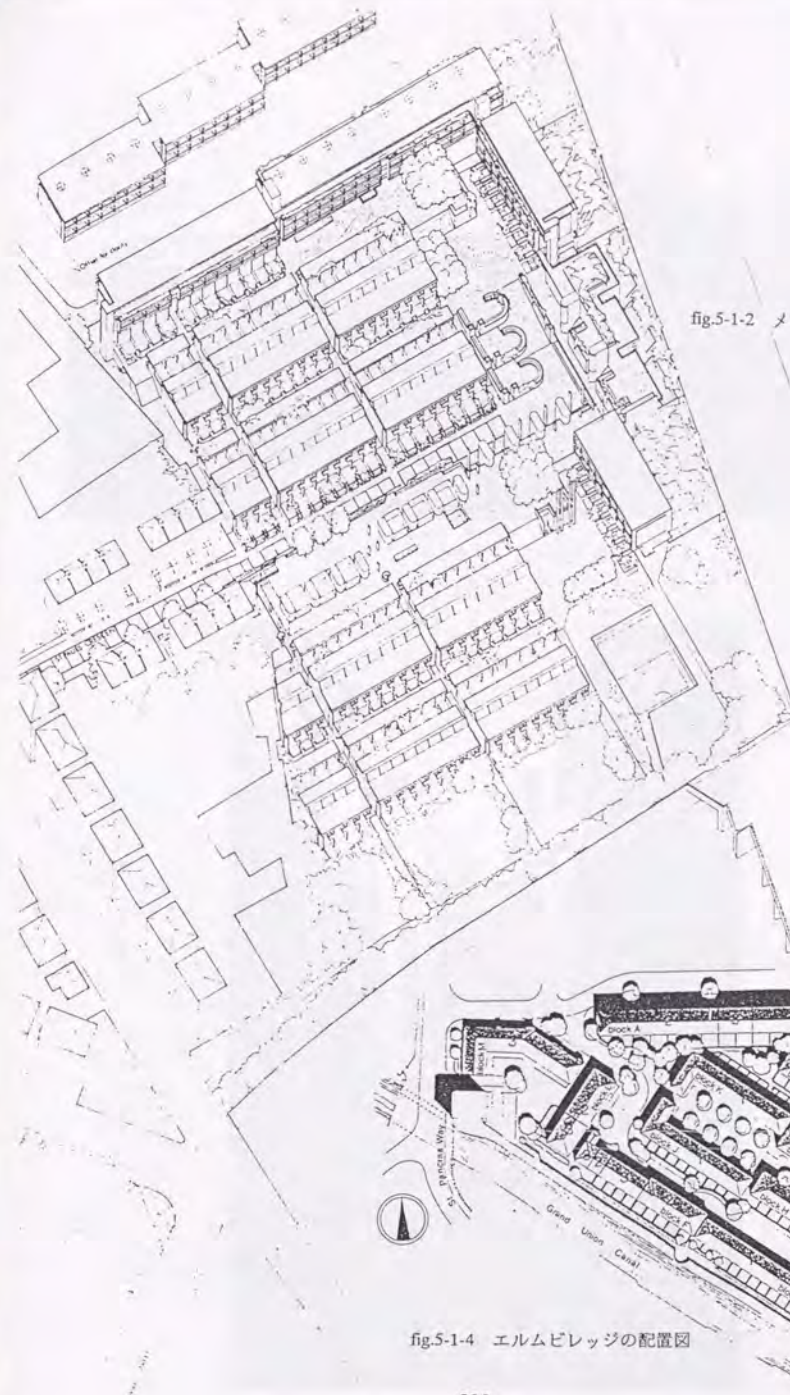
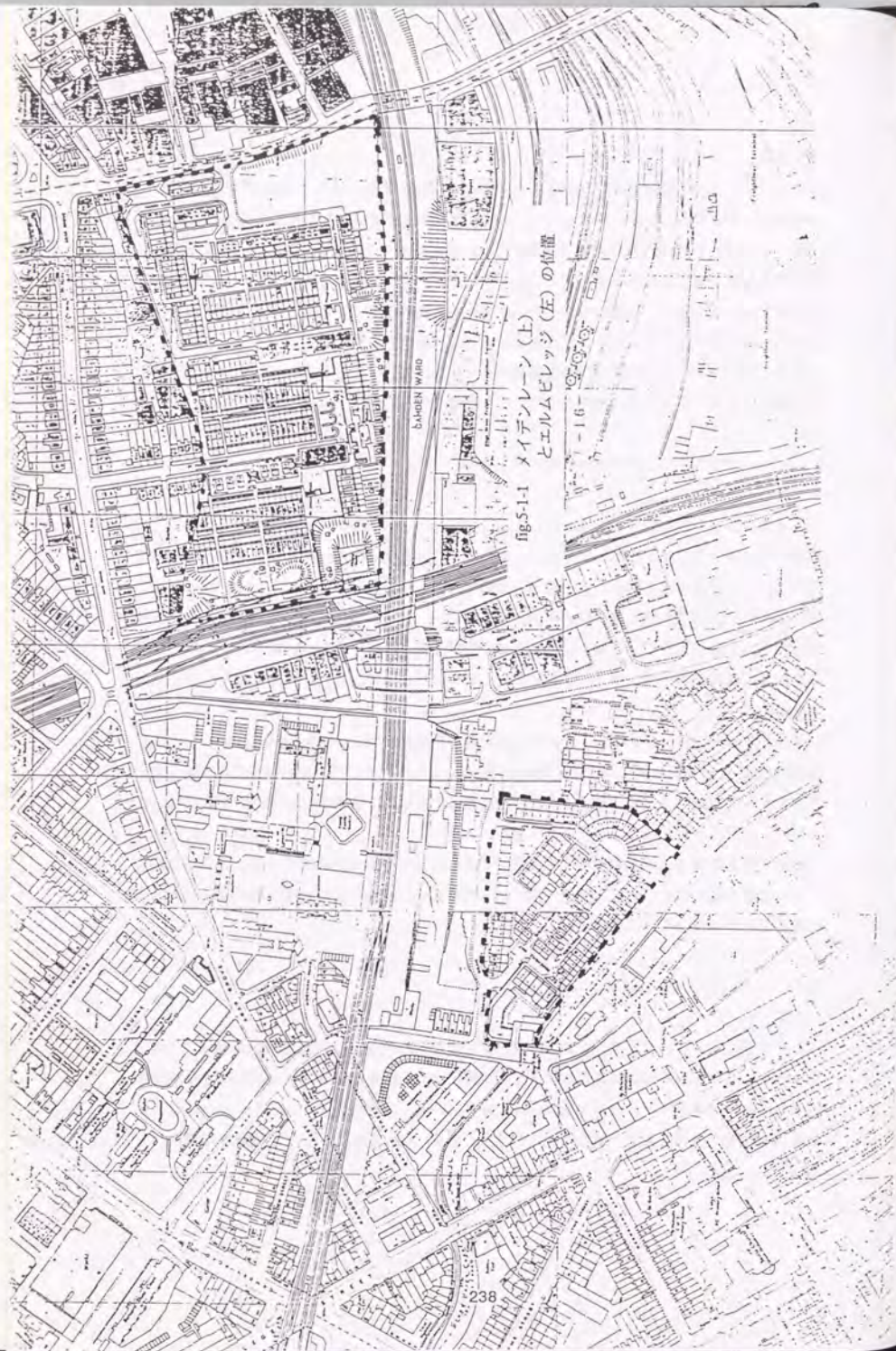
メイデンレーンは、ロンドン・カムデン区に属する建築家ベンソンG. BensonとフォーサイスA. Forsythによって設計された公営住宅public housingである。そのため住戸は賃貸用であった。サッチャーの政策によって3年以上公営住宅に住んだものには住宅を払い下げる政策が行われたので、一部はその対象になったようである。

現在の居住者層は、58%の世帯主が失業者であり、38%が片親の世帯である。住み心地のよくない公営住宅なので、一般の世帯が出ていってしまい、結果として公営住宅の福祉的な性格が強調されてしまっている現状である。

### 5.1.3 エルムビレッジのプロフィール

エルムビレッジは、キングスクロス駅の北西に位置する (fig.5-1-4)。隣接するカムリーストリートを越えて東側には倉庫などがあり、北側には小さなオープンスペースをはさんで鉄道があり、南西側はグランドセントラル運河に接している。北側のバーカードライブからのアクセスが主動線であり、セントバンクラスウェイとカムリーストリートとして団地内につながっ







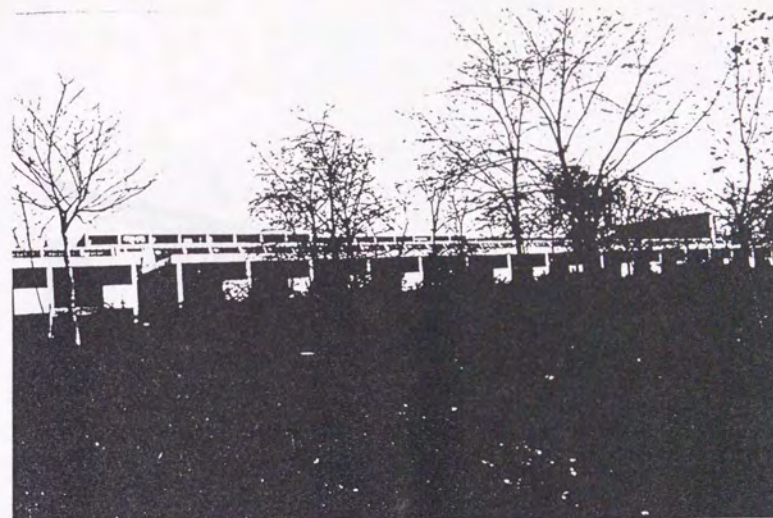


fig.5-1-3 メイデンレーンの外観（上）  
団地内部（下）





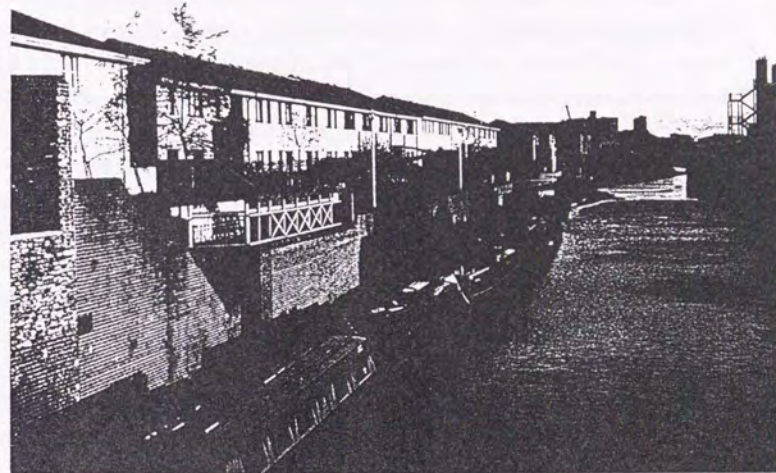


fig.5-1-5 エルムビレッジの外観（上）  
団地内部（下）





ている。また隣の団地にクロフターズウェイがつながっている (fig.5-1-5)。

エルムビレッジは、いわゆるイギリス版「民活」でつくられた集合住宅である。英国ハウジングトラストUnited Kingdom Housing TrustとハリファックスビルディングソサエティHalifax Building SocietyとネイションワイドビルディングソサエティNationwide Building Societyが事業者であった（ハウジングトラストとは非営利の住宅供給団体であり、ビルディングソサエティは住宅ローン専門の金融機関である）。また、162戸中、50戸が分譲cost sale、85戸が共同所有shared ownership、27戸が賃貸fair rentであるなど、異なった所有形態が混在している集合住宅である。設計はピーター・ミシュコン設計事務所Peter Mishcon & Associatesによる。

居住者層については、分譲住宅を買ったり共同所有したりすることができる中産階級がその多くをしめているものと思われる。

このように2団地では居住者層が大きく異なっているので、比較をする際には慎重にならなくてはならない。しかし、公営住宅にも良好な住みこなしのされているところは多く、この後に述べるメイデンレーンの問題のある住まれ方は物的環境によるところも大きいと考えられるので比較することにした。

#### 5.1.4 両団地の使われ方の違い

両団地の使われ方には大きな違いがある。

メイデンレーンは、1982年の建設当初は、建築雑誌などに紹介されはなばなく取り上げられたものの (Boyarsky 1983)、その後、さまざまな問題が生じ、警察も治安上に深刻な問題を引き起こす恐れがあるとの懸念を示すほどになった。建設から6年後の1988年には、地域の建築家ハント・トンブソン事務所Hunt Thompson Associatesが、改善案を用意するまでに至った (ハント・トンブソン報告書 1988)。アーキテクチュラル・レビュー誌は、これを取り上げて'Maiden Amendments' (「メイデンの改善」C. Davies 1988) という記事としてまとめている。その中に次のような居住者の声のせられている。

「ひどい。まるで監獄島のように、全てがみんなに監視されている。」

(*'Disgusting. It looks like Alcatraz, all on top of one another.'*)

「わたしにとっては、モダンな刑務所のようだ。」

(*'To me it looks like a modern prison.'*)

「ひどい。陰気で気持ちが悪そう。たくさんの住宅を詰め込みすぎで、無茶苦茶だよ。この団地を設計した建築家は賞でも貰ったかも知れないけど、馬鹿げているよ。」

(*'Looks terrible, it looks dismal and depressing. Too many flats cramped together. It's really*



terrible. The person who designed was supposed to have got an award. Ridiculous!')

「最初に引っ越してきたときには、ここは約束の地のようでした。新しくて、新鮮で、悪い点など見つけようがありませんでした。高い質をもった団地で、良く管理され、何も問題のないように思われました。しっかりと運営されているコミュニティセンターも頼もしく思われたのです。」

(‘When we first moved in it was the promised land. It was new and fresh and no aggravation. A high-quality estate, well managed and no problems, with a promise of a well-organised community centre.’)

「最初見たときは宮殿だと思ったよ。今じゃ家族もいて、手狭になってきたし、ここから引越したいよ。雑な雰囲気になってしまったしね。犬や子供たちのことさ。今はこの団地好きじゃないね。」

(‘At first it seemed like a palace. Now we have a family, we’re overcrowded and we want to leave the estate. It’s got rough - dogs, kids - and we don’t like the estate now.’)

「最初見たときは感動しました。第一印象はよかったのです。バカンスの村みたいなのが気に入りました。日当たりがよく、たいへん良く見えましたよ。でも、落書きや、破壊行為や、ゴミなんかがあって、ここでは家族を育てられないと思います。」

(‘I was impressed the first time I saw it. My initial reaction was good. like a holiday village, that’s why I like it. Sunny. It looks nice. But because of the graffiti, the vandalism, the rubbish, I can’t bring up my family here.’)

「悪いとは思いません。いいんだけど、管理が悪いだけだと思います。最初にここに来て、歩き回りながら、これは民間の集合住宅じゃないかと思いました。それくらい良かったです。大変モダンで、ふつうの茶色のレンガでできたカウンスルの団地とは違っていました。最初に引っ越してきたとき、レースのカーテンの前は、ござっぱりとまとまっていた。住宅が空だったからです。カウンスルは今じゃ、団地を悪く、だらしく見せるように精一杯のように思えます。」

(‘It’s not bad. Nice, but badly kept. when we first came we walked past, thinking it was a private estate. It looked that good. It’s very up to date, not the usual brown brick council estates. When we first moved in, before the net curtains, it was uniform and tidy, because the flats were empty. The council now seem to be trying their hardest to make it look bad and unkempt.’)

「はじめに越してきたときには、プラントボックスには蔦があってすばらしかったのです。ほとんどの国ではだれも花や木には触れません。だからきれいなのです。ここでは、あるとき突然に、見てみると台無しになっているのです。」



('When we first moved in, all the planting boxes were trailing ivy. It looked lovely. In most countries no-one touches the flowers and trees. That's what makes it look lovely. Suddenly, one day, you look around, and it's all ruined.')

このような住民の不満を聞くと、メイデンレーンには、その管理やメンテナンスの面で問題があるといえるようだ。

ハント・トンプソン報告書にはいくつかの問題点が取り上げられているが、その第一が、ゴミ処理の問題であった。各戸へのアクセスが狭く、地方当局ははじめから各戸からの収集をすることを拒んだ。管理人によって収集されることになったのだが、住民の無関心も手伝って、間違った場所に間違った時間でゴミが置かれるようになった。その結果、団地の共用部分にゴミが散乱する結果になったのである。

駐車場も問題であった。地下に設けられたが、安全でないことと、駐車料が高いことから、使われずに地上に車が置かれ、サービス車両などの妨げになってしまったのである。

住戸内の問題も多かった。湿気、雨漏り、防音、排水、暖房システムの故障、窓の問題などが次々に起きたのである。以上のような問題点が報告書の中には挙げられており、改善案も提案されている。

このような問題は団地を訪ねてもわかり、落書きや破壊行為などが目につく。通路にはゴミが雑然と捨ててあったり、家の中にゴミを投げ入れられないように、手製の柵が付けられていたりする。取り上げられていたような居住者の声も事実だろうと思われる様子であった。

これに対して、エルムビレッジは、何度か訪ねてみても上にあるような問題は見られなかった。ごく普通の集合住宅といった印象である。子供が時々遊んでいたり、家の外で車の手入れをしながら隣人と話したり、庭の手入れをしたり、観察した限りでは、のどかな団地という印象である。

本研究では、団地の一般的な評価についてこれ以上踏み込んで調べていないが、メイデンレーンには問題のある集合住宅、エルムビレッジは普通の使われ方をしている集合住宅として扱うこととする。

また5.1.2で述べたように両団地では居住者層が大きく異なっているので、議論を進めるのは慎重にならなくてはいいけない。しかし、メイデンレーンと同じような公営住宅でも良好な住みこなしをしているものも多く、その住みこなしの違いの多くは物的環境によると考えられるので、比較できうものと考ええる。

## 5.2 英国テラスハウス形式の集合住宅の比較

### 5.2.1 モダニズムと折衷様式

両団地の建築のスタイルは対照的である (fig.5-2-1)。メイデンレーンの建築のスタイルはモダニズムまたはコルビュジエ風と評されるものであり、ブルータリズムのデザインとも呼べよう。アーキテクチュラル・レビュー<sup>33)</sup>の中でウインター (J. Winter 1983) は、メイデンレーンをアトリエ5のジートルング・ヘーレンのイメージと比較しているし、コミュニティセンターのデザインのそこそこには、階段が中に入ったカーブした壁や、垂直方向の部材を減らした長いデッキの手摺など、初期の頃のコルビュジエの建築言語が見られることなどを指摘している。またボヤルスキー (A. Boyarsky 1983) <sup>34)</sup> も「イギリスの集合住宅の流れの中で最良のもので、(イギリスのデザインもようやく) ヨーロッパのものとも比肩し得るほどに文明的になった」と評している。

これに対してエルムビレッジは、折衷様式、あるいはネオバナキュラー、と称されるデザインの様式である。この団地のデザインの様式については、アーキテツ・ジャーナル誌<sup>35)</sup>に「三日月型の平面の住棟は白く塗られ、柱形やテラスをうまく使い細かく分けてカーブしているように見え、縞模様のレンガ積みや面取りしたまぐさなどで演出して、19世紀の職人のコテージを思わせる」(Hanny 1984)ものである。「他のテラスハウスでは真ん中あたりでそのディテールをかせ」、古典様式や初期のLCCの集合住宅デザインを思わせるものであったり、今世紀初めのレンガ積みの様式の影響をうけていたり、「建築家も(デザイン上の)内的な葛藤を引きずっている」と表現されている。エルムビレッジはいくつかの異なった建築言語が混ざりあった折衷様式のデザインであるといえる。

異質のデザインに対する許容性という意味では、メイデンレーンは、洗練されたデザインの方針に基づいているが、逆に、そこには異なったデザインの入り込む余地が少ないといえる。これに対してエルムビレッジのデザインは初めから混ざりあったものであり、別なデザインの要素が加わってもそれを許容する範囲が大きいということが指摘できる。

さらに、メイデンレーンの平面は敷地の境で突然切れたようなかたちになっており、潜在的には敷地の広がりに応じて同じ住戸ユニットを繰り返して、団地を延長することが可能なデザインとなっている。一方、エルムビレッジのプランは現在の敷地の形状にあわせて完結して設計されており、この点でも対照的である。

<sup>33)</sup> "Maiden Lane", Architectural Review, April, 1983, pp.22-29

<sup>34)</sup> "Maiden Lane", Architectural Review, April, 1983, pp.22-29

<sup>35)</sup> "Private Gain, Public Loss", Architects' Journal, 3 October, 1984, pp.26-29



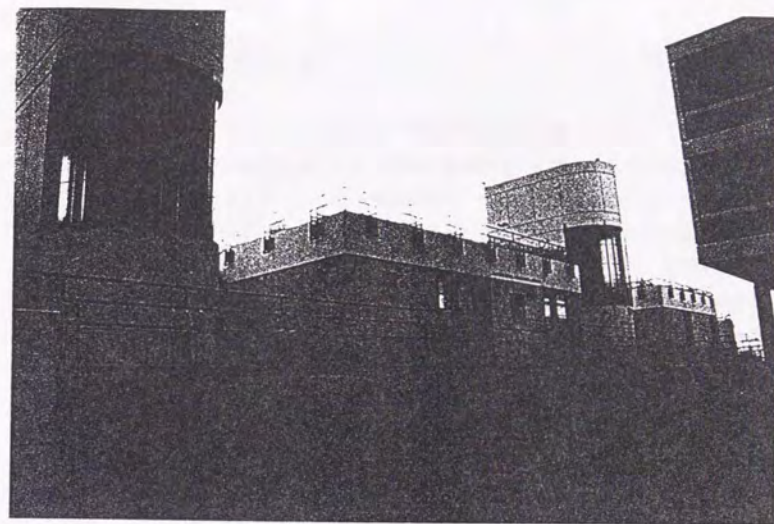
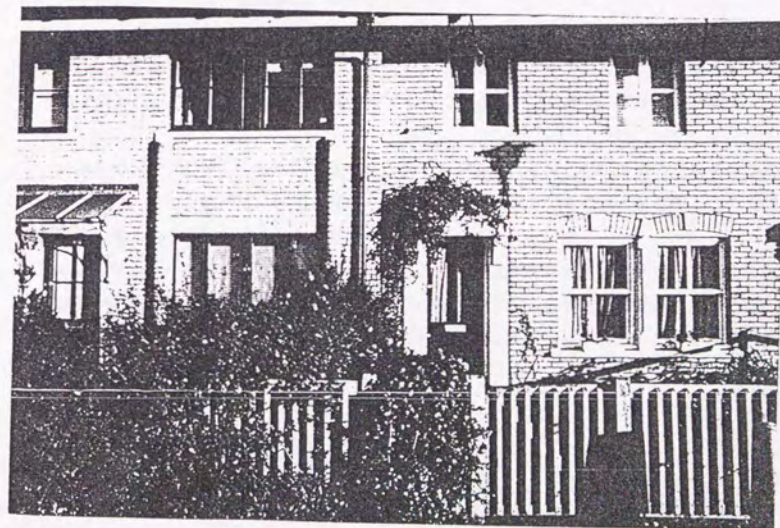


fig.5-2-1 メイデンレーン（上）とエルムビレッジ（下）の建築様式





## 5.2.2 付属の施設と外部空間の比較

メイデンレーンでは、コミュニティセンターが敷地の南端に設置されている (fig.5-2-1)。このコミュニティセンターは3層にわたる歩行者の動線の中心に計画されていた。ハント・トンプソン報告書 (前掲) によると、「サービスが悪く、それもコミュニティのニーズにあっていないものであった」。スカッシュコートなどもあったが、現状では閉鎖しているようである。また店舗も6つ計画されていたが、1店舗のみが営業している状態であった。前にも述べたように、この団地を訪れるとゴミが散乱し、白かった壁には落書きがあって、荒れた印象を受ける。さらに店舗やコミュニティセンターなども閉まっており、時々居住者らしき人を見かけるが、通過するだけですぐに家の中に入ってしまう、閉鎖的で閑散とした感じがする。

一方のエルクビレッジには、コミュニティセンターも店舗も計画されていない。しかし、何度か訪ねる間に住民どうしが会話したりする姿をオープンスペースで観察した。一度などは、ある住民が家の前に車を停めて修理をしながら、近所の子供達と話している様子を観察したりもした。エルクビレッジはこのように開放的な印象を受ける団地である。

## 5.2.3 駐車場の比較

メイデンレーンでは、駐車場は、歩行者動線のレベルとは分けて地下につくられている。土地の高度利用を考えてつくられたと思われるが、現状ではこの駐車場はほとんど利用されていない。この駐車場は、暗くて、物騒で、居住者は地上階のアクセス道路などに駐車している (fig.5-2-2a)。ハント・トンプソン報告書でも、これは安全上の問題と駐車料金の問題と説明されている。

エルクビレッジの多くの住戸には住戸前に駐車場があり、それ以外は近辺の道路に駐車しているようだ。訪ねた時には、住民が車のバッテリーを交換しているところを目撃したり、他の住民は、家の前で洗車していたりした。

エルクビレッジのように家の前に車を停められれば、家主の在不在が何となくわかるなど共居状態が認識されるのに対し、メイデンレーンの集中地下駐車場では、機能的ではあるが、隣人の在不在なども確認できなくて、隣人どうしもコミュニケーションの取りにくい、非共居状態にあるといえる (fig.5-2-2b)。

## 5.2.4 子供の遊び場の比較

メイデンレーンでは、ブレイグラウンドと蹴球場が設けられているが、両者ともほとんど使



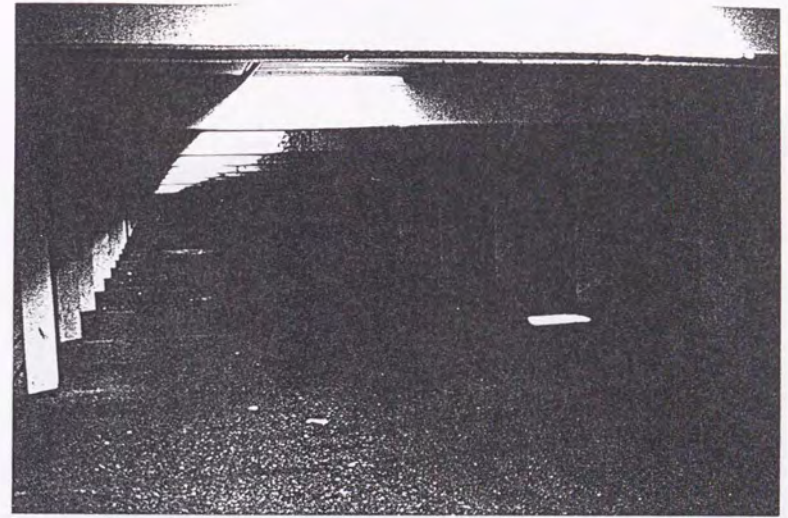
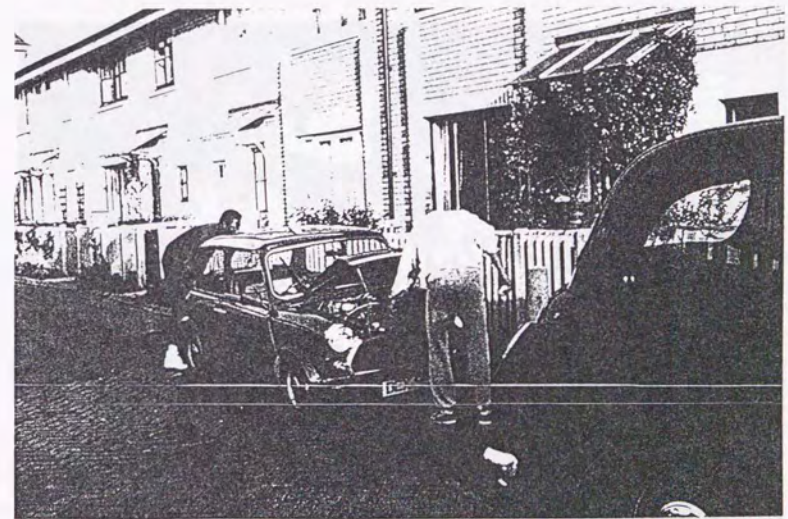


fig.5-2-2 駐車場 メイデンレーン (上) エルムビレッジ (下)





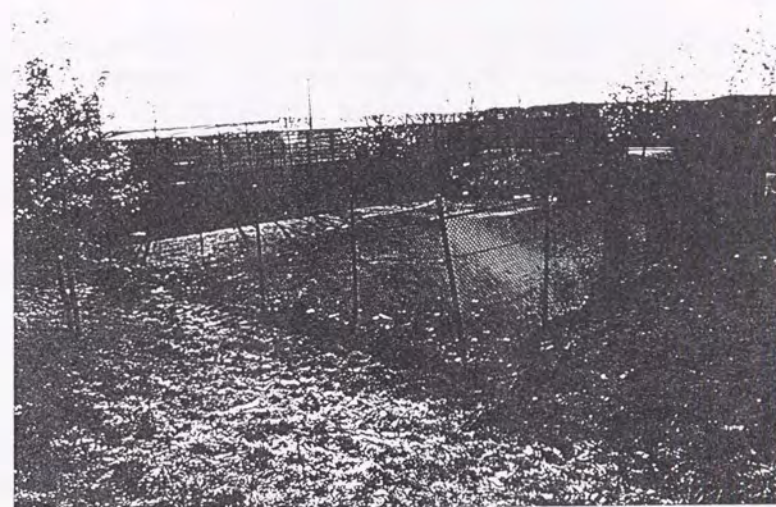


fig.5-2-3 子供の遊び場 メイデンレーン（上）エルムビレッジ（下）





われていない。後で述べるが、各住戸が高い塀で囲まれているので、幼年期の子供を住戸外で遊ばせると母親は目が届かないことになる。このためか、幼年期の子供が団地内で遊んでいる姿は観察されなかった。また、フェンスに囲まれた蹴球場は、敷地の南西の端にぽつんとあり、ゴミが散乱しほとんど使われていない様子であった (fig.5-2-3)。学齢期の子供のボール蹴りの姿は観察されたが、あらかじめ用意された遊び場以外のオープンスペースであった。

一方、エルムビレッジでは、学齢期の子供達の遊びは、敷地内の広くなったオープンスペース（道路でもある）で観察された。住棟の裏側の間には、幼児用の遊び場が用意されていた。利用されているところは観察できなかったが、住戸内から目の届くところに置かれている。

### 5.2.5 外部空間の動線・機能分類

メイデンレーンの歩行者の動線は、3つのレベルに分けられている (fig.5-2-4)。平面図では団地全体はグリッド状で単純な形態であるが、視覚的にはつながっていない。そのため視界の広がりのなかで団地全体をとらえることができず、内部に入ると迷路の迷い込んだような印象を受ける。また既にのべたように、自動車の動線は地下に別にとられていた。この歩車分離により、断面図からもわかるように、各住戸へのアクセス路は最小限の大きさになって、そこを歩く人は圧迫感を受けるほどである。トンプソンの報告書では、この狭いアクセス路は「居住者と外来者のどちらにも、危険と、混乱と、疎外感をつくり出す」としている。居住者の「わたしにとっては、モダンな刑務所のような」との言葉がこれを良くあらわしている。しかし、狭いアクセス路とは対照的に、メイデンレーンの西側には緑のオープンスペースがかなり広くとられている。

これに対してエルムビレッジの外部空間は、同一レベルにある。伝統的なテラスハウスのように一部半階分住戸のレベルが高くなっているところはあるが、各住戸へのアクセスは地上階からである。また、歩車共存の道路となっている。そのため歩行者の（車の）ための動線は十分に広くとられている。団地内を歩くと視界が広くあって開放的である。通路の構成も行き止まりのものではなく、歩行者にはルート選択の自由がある。

またこれも伝統的なテラスハウスに準ずるものだが、この団地では住戸の表裏がはっきりしている。玄関のある表側は、外からもアクセスしやすい広い道路であって、住戸内外もよそゆきに飾ってあるが、裏側は非居住者が入りにくい細い路地の奥にあり、洗濯ものが干してあるなど、生活のにおいが感じられる空間である。

以上述べてきたように、メイデンレーンでは空間をいくつかの機能によって分けて、それを建築家のアイデアにしたがってプログラムし配置していることがわかる。だが、実際には建築





fig.5-2-4 歩行者の主動線 メイデンレーン（上）エルムビレッジ（下）





家の考えたようには人間が行動するとは限らないので、物的なプログラムが強すぎる結果となっている。

一方、エルムビレッジの空間利用は、伝統的なテラスハウスの形式に準じて機能分離されているといえるもので（歩車共存道路というものは新しいコンセプトであるが）、生活に即して構造化されているものである。複合しているのは外観のデザインと同じである。中でも道である団地のオープンスペースはさまざまな行動が複合するようになっており、比較的頻繁に使われていた。

ここまでは、外部空間について見てきたが、次節以降では住戸内外の空間構造について考察する。

### 5.3 メイデンレーンの住戸の空間構造

#### 5.3.1 背の高いコンクリートの塀

メイデンレーンでは、各住戸が背の高いコンクリートの塀で囲まれており、アクセス路から、住戸の中は見えないように設計されている（fig.5-3-1）。この塀は、中にある庭やテラスに目隠しをし、生活を包んで、居住者にプライバシーをもたらそうというものであった。この考え方は、空間を機能的に有効利用するという考えに従っていて、設計のなかで徹底されていることは前にも述べたとおりである。

この団地内では、高い塀に囲まれたアクセス路にいる歩行者は、狭いトンネルにいるような圧迫感を覚えるであろう。また、歩行中は住戸の中は見えないが、無理をして背伸びをすれば、隙間からレースのカーテンを引いた大きなガラス窓が見える。中にいる人が歩行者の気配を感じるほど近くに住戸はあり、中を覗くとほとんどがレースのカーテンを引いていた。

塀があることによって、アクセス路と家の中との視線のつながりは弱くなる。結果として居住者は、外部に感心を示さなくなったり、外部にいる不審な人も監視できなくなる。そして、かなり近くのアクセス路に誰かわからない人がいる状態になって、時には外部の人や物音に不安を覚えたりして、閉鎖的になるのであらうと考えられる。

#### 5.3.2 大きな窓

建築家は、高い塀をデザインすることによって、その中の空間のデザインを自由にする権利を得たように考えた。そうして行った自由なデザインの一つに、各部屋のかなり大きなガラス



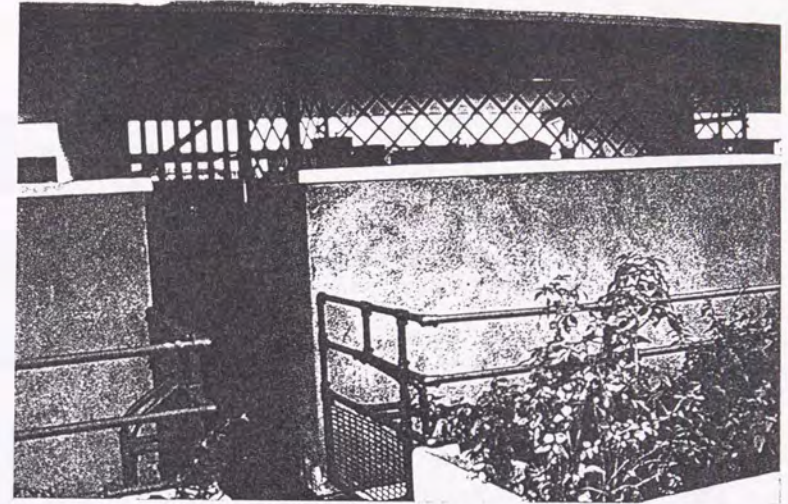


fig.5-3-1 メイデンレーン 住戸前の背の高い塀

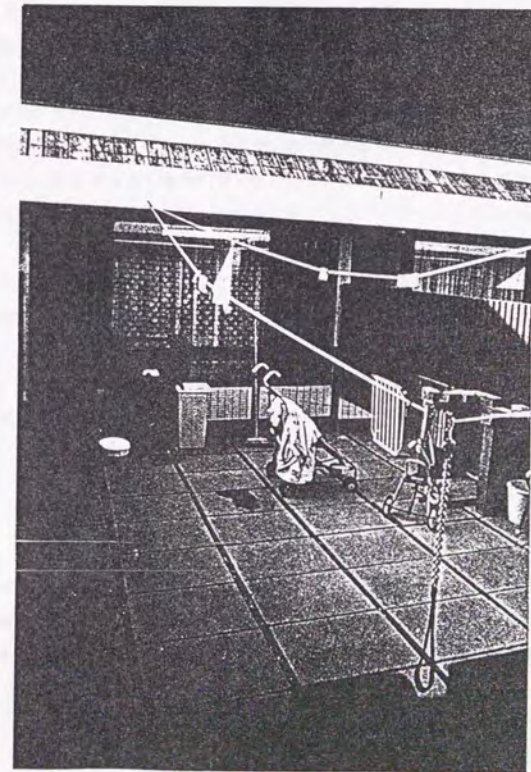


fig.5-3-2 メイデンレーン 大きな窓



窓があるようだ (fig.5-3-2)。大きな窓をデザインした目的の一つとして挙げられているのが、2階に設けられた居間からのロンドン中心部への眺望であった。しかし、実際にはほとんどの家の居間はレースのカーテンを閉めていて眺めどころではないようである。

食堂でも同じで、前に高い塀はあるものの、外の人の気配を気にしてプライバシーのためにレースのカーテンを閉じており、結果として住戸は閉鎖的になっている。これには食堂のルーフライトが室内を明るくして、外から見えやすくしていることが拍車をかけているようである。

### 5.3.3 公室と私室の上下の取り替え

5人家族用につくられた標準的な2寝室住戸の玄関や公室は上階にある (fig.5-3-3)。イギリスでは2階建てならば、1階には玄関、居間、台所、食堂があり、2階には寝室とバスルームといったレイアウトが普通である。これがメイデンレーンでは逆転している。この理由は、前に述べたように上階につくった居間から「ロンドンの景色を広々とみせるため」(White 1983)であった。建築家は居間からの景色を大切なものとしたのであろう。しかし、この上下階の取り替えは問題をさまざまに生んだ。上階からの寝室への騒音とか、地面から寝室への湿気だとか、トンプソンの報告書には挙げられている。

居間が上階に置かれ、それとともに食堂と台所も同じように上階に置かれた。さらに台所にはルーフライトが設けられている。そのため居住者が望んでいるよりも明るすぎて、玄関側にある前庭からは中が見えすぎてしまう結果になった (fig.5-3-4)。台所の大きなガラス窓がこれに拍車をかけており、居住者は常に外からの視線を気にして、カーテンをしていることになってしまった。

上下階を取り替えたため、台所の前のガラス窓の下には、下階の寝室のためにドライエリアがとられていた。居住者の中には環境形成に対する意識が高いものもあるが、ドライエリアが邪魔になってエルムビレッジのように温室を増築しようにもできない状況である (後述)。

上下階の取り替えによって、以上のようなテクニカルな問題の他にも、空間構造的な変化ももたらされた。本来は奥にくるはずの寝室が反対の場所にきて、プライバシーがさらけ出されてしまうのである。これについては5.5節で詳しく述べる。

### 5.3.4 庭

メイデンレーンの住戸には前庭と後庭がある。前庭は台所に面しており、後庭は寝室に面している。前庭は後庭に比べるとよく使われている。モノを干したり、子供の遊び場にしたり、植木を置いているものもあり、中には舗装を外して土を入れ植物を植えている世帯もあった。



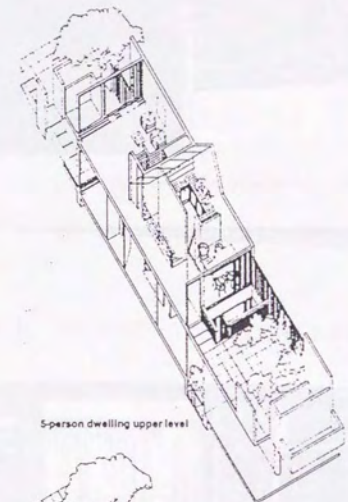
The design of the Meydenleen housing project is based on the concept of a standard living unit. The project aims to provide a high-quality, affordable housing solution for the community. The design focuses on creating a sense of community and shared space, while also ensuring that each unit is functional and comfortable. The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area.

The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area. The design focuses on creating a sense of community and shared space, while also ensuring that each unit is functional and comfortable. The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area.

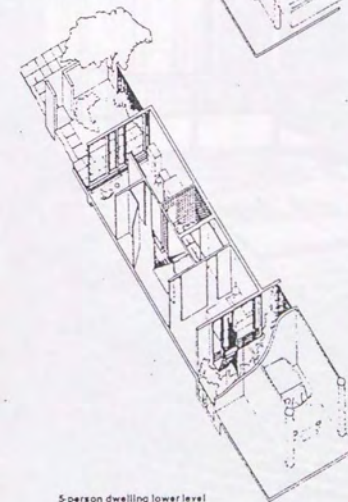
The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area. The design focuses on creating a sense of community and shared space, while also ensuring that each unit is functional and comfortable. The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area.

The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area. The design focuses on creating a sense of community and shared space, while also ensuring that each unit is functional and comfortable. The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area.

The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area. The design focuses on creating a sense of community and shared space, while also ensuring that each unit is functional and comfortable. The project is a response to the need for modern, sustainable housing in the area.



5-person dwelling upper level



5-person dwelling lower level

fig.5-3-3 メイデンレーン 標準住戸ユニット





fig.5-3-4 メイデンレーン ルーフライトで明るすぎる台所

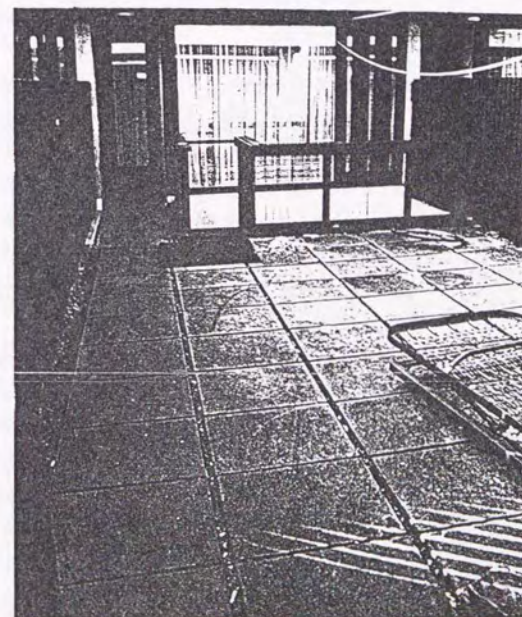


fig.5-3-5 メイデンレーン 使われない庭



ただし、前庭と後庭には多くのモノ（使わなくなったものや外から投げ捨てられたゴミなど）であふれている住戸も多かった。ゴミなどがたまっている住戸の中には空き家もあるが、あまり庭にかまわない住民も多いようである。少なくとも外部に対して閉じているので、飾ろうという意識は一部の世帯にしかないように見受けられる（fig.5-3-5）。

これにはさまざまな理由が考えられる。第一には、高い塀で囲まれているために近隣から見られないし、まわりも見えないので周囲を気にして飾ることはないし、そうする必要がないという理由。第二に外から室内が見えすぎる大きなガラス窓のため、結果としてカーテンなどで閉鎖的にされていて、住戸内外のつながりが悪いという理由。第三は、前庭が舗装され、日当たりも悪いので植栽などを植える庭としては使いにくいという環境形成を阻害する要因によるものなどがある。また、互いに閉鎖的であるので、居住者同志が近隣の庭を意識することなく、勝手気ままに使われ方になっているのである。

このようにメイデンレーンでは普通とは違う一見「機能的な」建築のプログラムが、実は居住者の生活にあわず、さまざまな問題を含んでいることがわかった。次節ではエルムビレッジの住戸内外の空間の構成について論ずる。

## 5.4 エルムビレッジの住戸の空間構造

### 5.4.1 室内空間のレイアウト

エルムビレッジのテラスハウスの住戸のレイアウトはオーソドックスなものである（fig.5-4-1）。1階には、玄関ホール、居間、台所、食堂があり、寝室とバスルームが2階にある。（日本とは違ってイギリスではバスルームが寝室に付属すると考えるのが普通である。）グラフ表現を見てみると（fig.5-5-2）、居間、台所、食堂などのいわゆる「公室」は外部から近い位置にあり、「私室」である寝室が奥にあることがわかる。このヒエラルキーは居間が後庭につながっていると考えてもほとんど変わらない。このように住戸内部の空間のつながりは安定しているのである。詳しくは、5.5節でメイデンレーンと比較して述べる。

### 5.4.2 居住者相互の監視

エルムビレッジでは住戸内外の視線のつながりはよい。いくつかの家では夜遅くまでカーテンを開けているので、居住者には近隣の住宅内で起きていることがらも少しではあるがわかる。逆にいうと近所の人に生活の一部を見せていることになる。いくつかの住戸の居間は団地内の



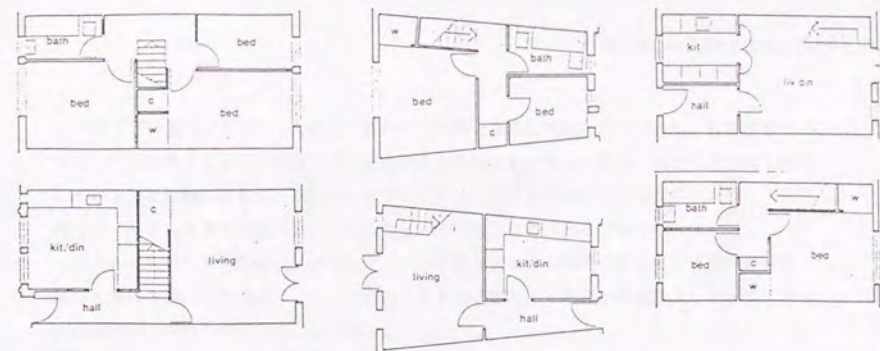


fig.5-4-1 エルムビレッジ 標準住戸ユニット

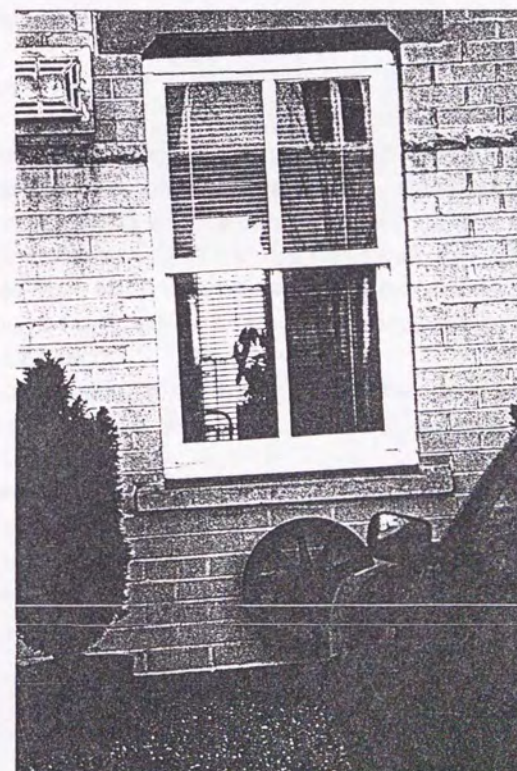


fig.5-4-2 エルムビレッジ 内部の見える窓



広いオープンスペースに面しており、外からの視線を意識して飾られているし、会話の様子などもちらっと見られる。居間はしつらえを見ると外に対して飾っており、外からの視線を意識していることが読み取れる。ただ、メイデンレーンと違うのは窓がそれほど大きくなく、全てのプライバシーをさらけ出すというようなものではないことである (fig.5-4-2)。

エルムビレッジの居住者は、メイデンレーンの居住者よりも外部の者に対して意識があり、筆者も観察の間に、子供達に「何しているの」と質問され、「見知らぬ東洋人」を不審に思った母親が家の中からでてきたことがあった。

エルムビレッジの住戸の前庭は、メイデンレーンのものよりも小さいほどのものである (fig.5-2-1b)。そこには、低い木の柵があり植栽がされているだけである。それでも、これは心理的な障壁になっているであろうし、家の前におかれた車も個人の領域を表示するものとなっている。この前庭のセッティングは、用のない人間が住戸の近傍に近づくことを防ぐが、住戸内での生活が何となくわかる内外のゆるやかな関係をつくっている。

#### 5.4.3 住戸の飾り

エルムビレッジの居住者は、普段から近所の人に見られていることが念頭にあるので、家の顔になる部分を飾ることになる。住宅の前の木の柵の内側には、思い思いに植栽がほどこされ、手入れがなされている。自転車も磨かれて置かれており、玄関のドアを取り替えたり塗り替えたりする居住者もいる。前庭はいつもきれいにしておき物干しに使われたりはしない。カーテンが引かれていない住戸も多く、どれほど自分の生活が楽しいかを見せているようである

(Hanson and Hillier 1982)<sup>54</sup>。居住者が見せている楽しそうな生活は、近隣に対するメッセージと読み取ることができる。

居住者は相互に家の装飾を競いあって、お互いに影響を与えているように見える。相互に少しずつ違った飾り付けをしていて、実際には余り変わらなくても、結果として、それぞれの住戸の個性を表出している結果になっている。

また、何軒かの住宅では温室を家の裏側に増築している (fig.5-4-3)。これは運河に面している住棟に顕著であり、居間の延長として利用され、天気の良い日曜日には午後のお茶の場所として利用されていた。裏庭はあまり高い塀で区切られていないので、互いに何をしているかを見ることができるようになっている。テーブルと椅子がおかれたりしており、オモテのオープンスペースとはまた違った生活向きの使われ方をしている。

<sup>54</sup> Hanson, J. and B. Hillier, (1982), "Domestic Space Organisation", in *Architecture and Behaviour*, vol.2, Saint-Saphorin: Georgi Publishing Company, pp.5-25. このなかで、テラスハウスの住みこなしについて伝統的な労働者階級と新しい中産階級の比較をおこなっている。エルムビレッジは典型的な新しい中産階級の住みこなしに近いと考えられる。





fig.5-4-3a エルムビレッジ 裏庭の私的な様子

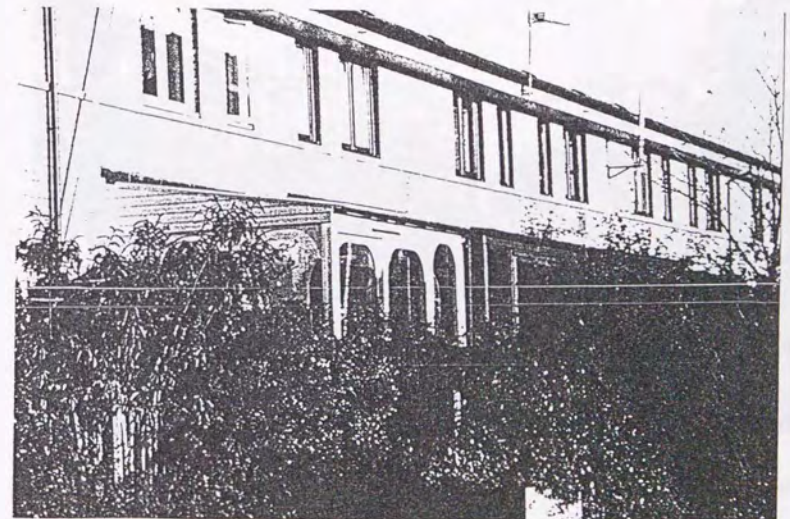


fig.5-4-3b エルムビレッジ 裏庭の温室の増築



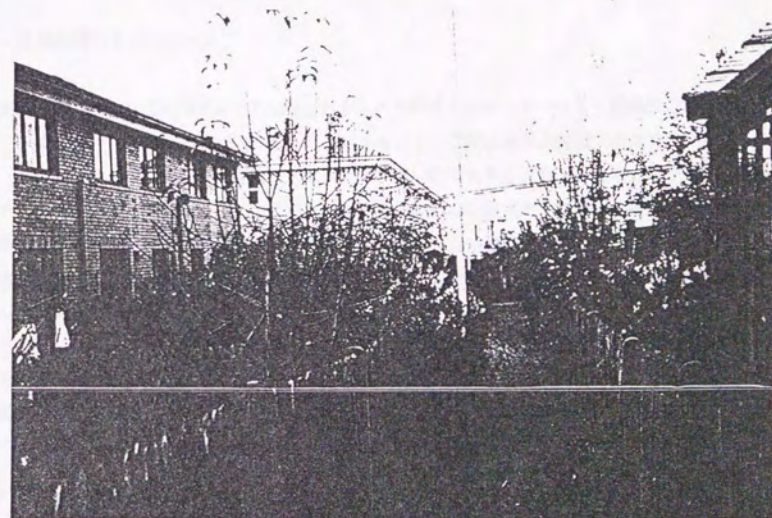


fig.5-4-3c エルムビレッジ 裏庭の私的な様子



## 5.5 外部空間と住戸の解析による比較

前節では外部空間の構造や、住戸の内部空間の構造から2つの団地の違いを見てきたが、ここではさらにグラフ表現を使って住宅のオモテ・ウラという観点から考察する、

## 5.5.1 グラフによる外部空間および住戸の表現

1章では軸線表現による都市空間の解析手法をつかって議論をした。ここでは、グラフを部屋の隣接関係に応用して住戸の表現をし、議論を進める。

外部空間の議論は軸線を用いず、凸空間図を用いておこなう。これは住戸近傍には凸空間図の方が適しているからである (Hillier and Hanson 1984)<sup>87</sup>。

すでに、5.3、5.4節で示したが、ここでの住戸の表現方法はfig.5-5-1に示すように、住戸の居室の隣接関係をグラフで表現し、それを外部とのつながりの観点から並べたものである。外部空間を一番下に置き、その他のものを上に並べるような表現にしてある。oは居室、φは廊下や階段などの空間である。トイレや倉庫などは居室ではないので省略してある。外部空間と室内とのつながりはfig.5-5-1では玄関のみになっているが、外部と他の部屋とのつながりは、適宜考慮するものとする。また奥行は外部空間を0とし、上に従って1、2、3と増えるものとする。

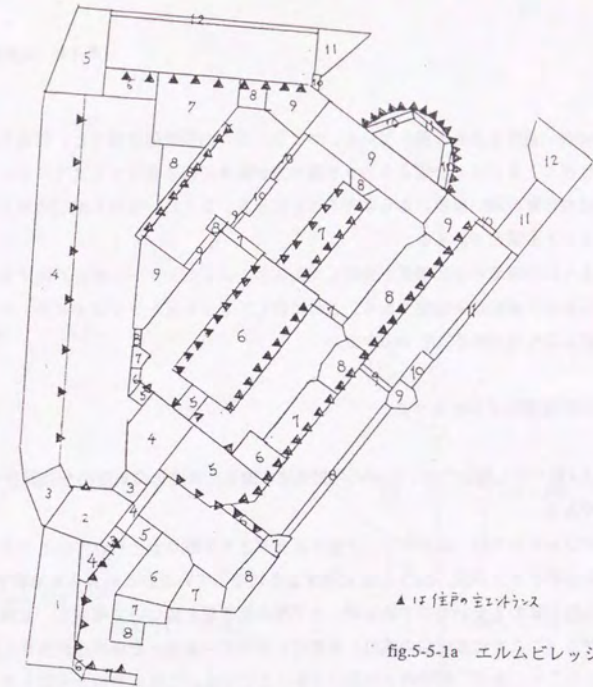
## 5.5.2 外部空間のオモテとウラ

団地の外部空間を凸空間図であらわし団地外からの奥行きを求めると (つまり団地外を0とする)、興味深いことがわかる (fig.5-5-1a)。エルムビレッジでは家の玄関側 (オモテ) が反対側 (ウラ) よりも面している凸空間のステップ数が浅いのである。これは、住宅のウラが、オモテに比べて外からは到達しにくいということになる。その外観ばかりでなく、空間のつながりの上からもオモテとウラの間に区別があることになる。これは居住者や外來の人にとっては空間に書き込まれたルールとして読み取られ、それが居住空間として安定した構造をもたらしていると考えられる。

一方では、メイデンレーンでは、住戸から見ると、1階に寝室があり2階に居間や食堂があってその意味ではオモテとウラが反対になっている (fig.5-5-1b)。凸空間図の上では団地外からの奥行きが玄関側 (オモテ) と反対側 (ウラ) では、団地外からの奥行きは同じであることが多く、逆転していることもある。設計の上ではある住戸の玄関と違う住戸の寝室に面したウ

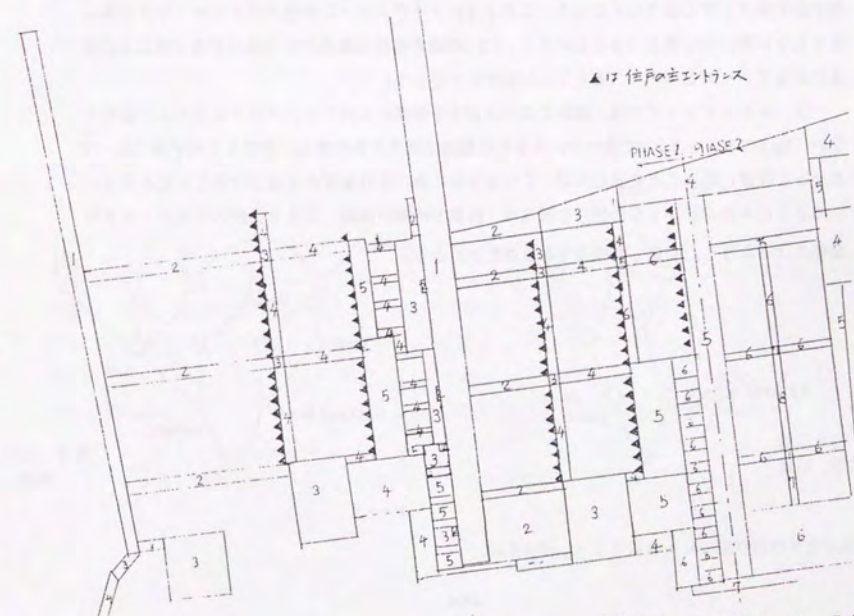
<sup>87</sup> Hillier, B. and J. Hanson, (1984), "Social Logic of Space", Cambridge University Press.





▲は住戸の主エントランス

fig.5-5-1a エルムビレッジ 凸空間図



▲は住戸の主エントランス

fig.5-5-1b メイデンレーン 凸空間図



ラ側とは狭い通路を挟んで接している。つまり、この凸空間図に従うと、団地外から来た人は、ある家に行くときにオモテ側よりのウラ側の方が簡単に行き着けてしまうことになり、ウラ側の寝室は奥行き浅い場所にさらされることになる。さらに、玄関と裏口のつくりが大変よく似ていることも問題であろう。

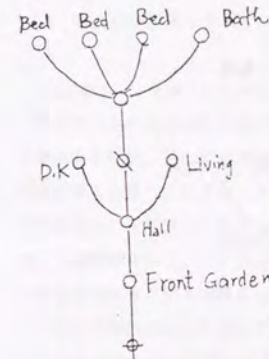
このように両団地の空間構造を分析してみると、メイデンレーンが住戸のオモテ・ウラという点から見ると非常に不安定であり、これに対してエルムビレッジはオモテ・ウラのはっきりした安定したものであることがわかる。

### 5.5.3 内部空間のオモテとウラ

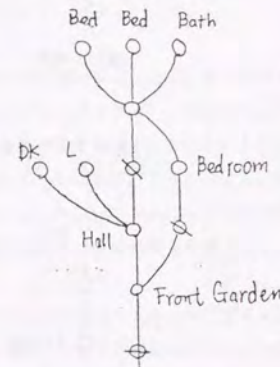
5.3、5.4節で少し触れたが、住戸の内部空間の構造は両団地の典型的な住戸プランで見ると、対照的である。

メイデンレーンでは、住戸内で、公室と私室が上下で取りかえられていることは示した。外部空間からのグラフ表現、fig.5-5-2a に示すようになっている。これ自体を解釈すれば通常の住戸とそれほど変わらないものであるが、上下階の取り替えについて考慮し、玄関以外の外部とのつながり（ここでは寝室前の裏口）を住宅に含めると、この構造が大きく変化する。寝室が浅いところに来て、居間の方が奥にくることになる。これは裏庭から出入りできることになると、プライバシーをさらけ出してしまうことになって、現実的ではない。実情は、住戸の側が絞を閉ざしてしまうことになる。このようにメイデンレーンの住戸はオモテ・ウラがはっきりしない不安定な構造であるといえる。5.5.2の団地全体の構造の中で裏口が表玄関以上に団地外からアクセスしやすいこともこれに拍車をかけよう。

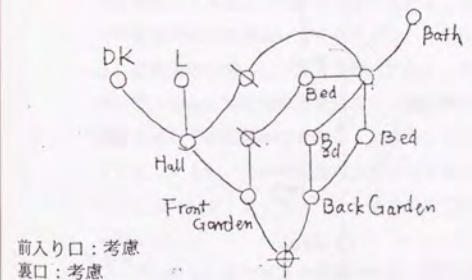
一方、エルムビレッジでは、裏庭とのつながりを考慮に入れても、グラフはほとんど変化しない（fig.5-5-2b）。5.5.2で述べているように裏庭は団地全体の構造の中でもオモテ側に比べて奥まった位置にあることを示したが、これはさらに裏口を外来者から遠ざけることになる。このようにエルムビレッジの住戸の構造は、外部と内部の関係、つまり住戸のオモテ・ウラの関係のはっきりした安定した構造であることがわかる。



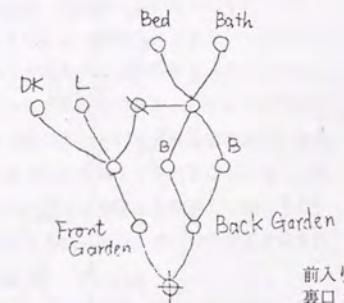
前入り口：無視  
裏口：無視



前入り口：考慮  
裏口：無視



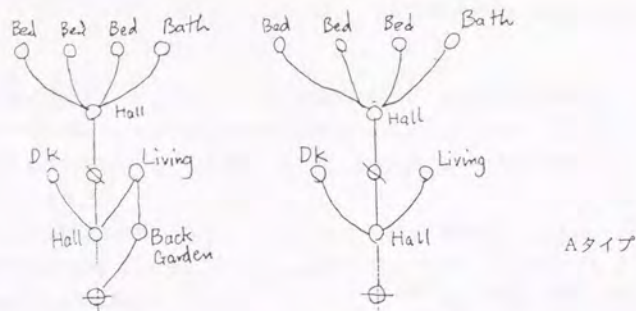
前入り口：考慮  
裏口：考慮



前入り口：無視  
裏口：考慮

fig.5-5-2a メイデンレーン 住戸内のグラフ表現

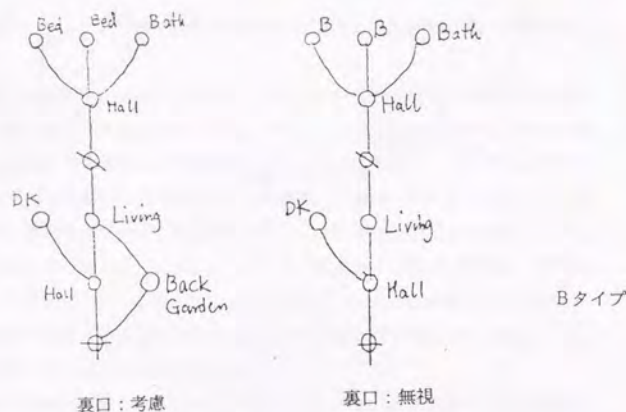




裏口：考慮

裏口：無視

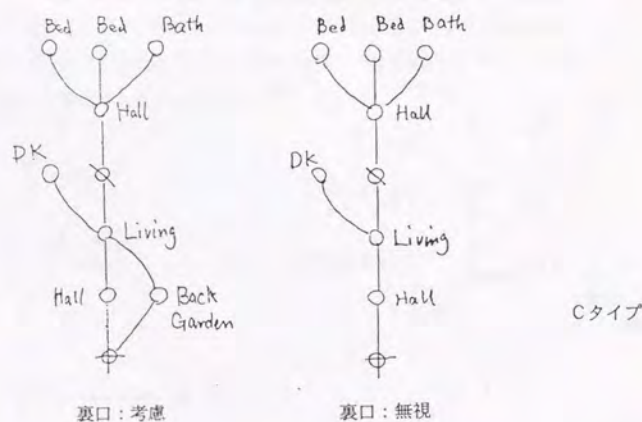
Aタイプ



裏口：考慮

裏口：無視

Bタイプ



裏口：考慮

裏口：無視

Cタイプ

## 5.6 集合住宅の外部空間が持つ役割・意味

集合住宅の外部空間は、それ自体が居住者の生活の場であり、外部と内部の関わりあいの上で構造化されたものであることを述べてきた。本節では集合住宅の外部空間が持つ意味と役割について述べる。

## 5.6.1 環境決定論的なデザインと相互浸透論的なデザイン

5.2.1では、メイデンレーンでは洗練されたデザインの方針に基づいているが、そこには異なったデザインの入り込む余地が少なく、一方では、エルムビレッジのデザインは初めから混ざりあったもので、別なデザインの要素が加わってもそれを許容する範囲が大きいということが指摘できると述べた。また、メイデンレーンでは空間をいくつかの機能によって分けて、それを建築家のアイデアにしたがってプログラムし配置している。一方、エルムビレッジの空間利用は、伝統的なテラスハウスの形式に準じて機能分離されており、生活に即して構造化されているものであるという指摘もした。

デザインの面からいえば、モダニズムのメイデンレーンは、ヴァナキュラーなデザインに則った折衷様式のエルムビレッジ比べて、建築家が物的な環境によってきめたコントロールが強く、決定論的である。また、機能と場所の対応においても、機能の新しいプログラミングをしているメイデンレーンのほうが、伝統的な居住様式に従っているエルムビレッジに比べて、決定論的なデザインであるといえる。一方の、メイデンレーンは、機能と場所の対応において居住者の生活の多様性を許容するものであり、居住者の側からの環境への働きかけが容易であるので、相互浸透的なものであるといえる。

メイデンレーンのような決定論的なデザインのもとでは、建築家によって与えられたデザインと異なったもの、すなわち「汚れ」がよくわかることになる。実際、メイデンレーンではゴミや落書きはそれがはっきりとわかる。そのほかの居住者の生活との不協和も「汚れ」といえる。居住者の不満も広い意味での「汚れ」と考えることもできるのである。このように「汚れ」が目立つのは、物的環境と居住者の生活の間に不調和が生じたときにも、居住者の側から物的環境に対しては働きかけが難しく、人間の側が適応することを余儀なくされるからであると考えられる。もし、この決定論的なデザインを、居住者の生活との不協和を無視して保とうとすれば、強いコントロール（つまり団地の管理）が必要になるのであろうが、公営住宅ではそれも難しい。

一方、エルムビレッジの空間利用は、機能分離されていないもので、複合しているのは外観

fig.5-5-2b エルムビレッジ 住戸内のグラフ表現



のデザインと同じである。環境の人の行動に対する制約はこの団地では弱く、本来多様である居住者の行動が物的環境に強いられることなく自由に行えるようになっている。居住者が玄関のドアを取り替えたりすることや、後ろの庭に温室を増築するなどの環境に対する働きかけ、すなわち、環境形成行動も許されている。このような意味で、物的環境と人間の行動との間の関係は相互浸透的であると考えることができる。この団地のデザインでは居住者の環境に働きかける行為が「汚れ」にはつながらず、環境に対して普段から居住者の働きかけがあるので、環境を保つためにも弱いコントロール（団地の管理）で十分である。

### 5.6.2 非言語コミュニケーションのメディアとしての集合住宅の外部空間

鈴木ら（1982）は、共有領域形成のための仕掛けの一つとして「表出」の果たす役割の重要性を指摘している。「『表出』は共有空間を楽しめるものにし、活気のあるものにし、またそれは近隣交際を促進し、生活の領域をひろげていくのに効果がある」（鈴木ら 1982）という。このように集合住宅の外部空間の役割を広くとらえ、そこでの表出などのモノや人の共居を通して、居住者や近隣の人とのコミュニケーションが成立する可能性が考えられることができる。

非言語コミュニケーションは、普通には、身振り手振りや、表情・顔つき、視線行動、対人接触などの対人の情報伝達手段のことをいうが、集合住宅の外部空間を非言語的なコミュニケーションの手段の「場」あるいは「メディア」として考えることもできよう。これは鈴木らの表出を重視する主張に準ずるものである。

集合住宅の外部空間は、良く計画すれば、居住者相互が入れ替わりに環境にはたらきかけ、表出のようなものを通して、非言語的なコミュニケーションのメディアとなることが考えられる。ただ、このメディアは強いコントロールの下では機能しない。環境決定論では建築家の描いた図面が発するメッセージばかりで、居住者が環境の働きかけることができずに、利用する居住者相互のコミュニケーションが絶たれてしまうのである。集合住宅の外部空間が、そういった場として機能するには、弱いコントロールを必要とするのである。この弱いコントロールの空間とは、住民の外部環境に対する働きかけが比較的自由になるところであり、居住者の環境形成活動が盛んなところである。もちろん、住戸内外の構造がそれを可能にするようになっていなければならない。この例として挙げたエルムビレッジのような団地の外部空間では、居住者の表出などのモノを通して、非言語コミュニケーションが成立する可能性があると考えられる。

逆にいえば、この非言語コミュニケーションを成立させる場こそが、共居環境である。2章で示した「見知っているが話したことのない関係」や4章で述べた「日曜日の男性のワックスコミュニティ」などに見られるような共居的な緩やかな近隣のつながりは、散歩でも、だだべ

ンチに座っているだけでも、車のワックスをかけているのでも、外部空間で何かをしていなければ、生まれにくい。集合住宅の外部空間に滞留し、居住者自らが環境の一部となることが、共居には重要な要素であるが、そのためには、居住者の環境形成行動を活発にするような場は有力なキューとなるのである。

表出やモノを通しての非言語コミュニケーションは、それが仲立ちとなってより積極的な住民相互の交流を生む可能性があると考えられる。そのため居住者の環境形成行動を活発にするような、外部と内部のつながりを考えた、建築の仕組みを考えていかなければならないのである。



## 5.7 まとめ

以上、本章でわかったことは次のようにまとめられる。

- 1) メイデンレーンとはモダニズムのデザインで、外部空間は目的や機能によって行動によって場所を規定するような設計であったが、実際の生活と乖離しており不満足な利用状況であった。これに対し、メイデンレーンは折衷様式のデザインで、伝統的なテラスハウスに準じた構成であって、外部空間のゆったりとられて、一般的な居住者にとっては住みやすいものであった。
- 2) メイデンレーンの住戸は、背の高いコンクリートの塀で囲まれて外部に対しては閉鎖的である上に、さまざまな設計上の問題から住まい方もさらに閉じたものになっている。
- 3) エルムビレッジの住戸は、普通のテラスハウスの住戸であって、視線によって住戸内外が緩やかにつながっていて、開放的で、居住者がお互いに意識しあいながら住みこなしている。
- 4) メイデンレーンの外部空間の構造は、住戸の表裏がはっきりとわからない均質なものとなっているのに対し、エルムビレッジのそれは住棟・住戸の表裏がはっきりとしたものである。
- 5) メイデンレーンの内部空間は外部空間に対し不安定な構造であるのに対し、エルムビレッジのそれは外部に対して安定した構造であり、これが住戸の開放性とかかわっていると考えられる。
- 6) 集合住宅の外部空間は、居住者相互の非言語的なコミュニケーションの場となる可能性があり、共居環境形成のための有力な手段であるが、そのためには居住者の環境形成行動を活発にするような建築の仕組みを考えていかなければならない。



## 第6章 総括

### 6.0 本章の目的

前章までは、集合住宅や住商混合の市街地のケーススタディを記述してきた。本章では、各章で得られた結果を俯瞰して、物的環境とそこでの人間の行動が、一つの系としてどのような状況であるか、どのような共居環境像が形成されているか、を明らかにするのが目的である。

はじめに、集合住宅の外部空間における人の分布密度や行動の質について、その特徴をまとめて述べる。次に、1章から5章のそれぞれのケーススタディが、人間-環境系としてどのようなものであったか、共居環境としてどのような特徴があったのかについて、それぞれを概観する。さらに各章で得られた結果をもとに、共居環境として、望ましい集合住宅のありかたを考察する。最後に、全体をまとめて論文全体を概観する表を添える。

### 6.1 共居環境としての集合住宅の外部空間

#### 6.1.1 共居環境の前提条件

序章では、共居環境について定義をすでに示した。それをもう一度確認すると、「人が互いに認知できるようなかたちでいて、相互の環境になる」というものであった。この定義を集合住宅に、特に外部空間にあてはめるためには、外部空間にどのように人がいて、どのような行動をしているかを確認することが重要と考え、行動観察をおこなった。また、その外部空間の人的環境と居住者の意識や近隣交際の関係についても調べた。

共居環境の前提になっている、都市化された現代社会という、集合住宅のおかれた状況について再確認する必要がある。地域社会における地縁的な関係は、(少なくとも調査した対象の居住者に限っては)薄いつながりになっており、居住者の知り合いや活動の範囲は都市にネットワーク的に広がっているという認識にたっている。これは、現代の集合住宅や住宅地を論ずる際に重要な社会的背景であると考えられる。

一方で、序に示したように、現実の集合住宅の計画上のモデルは「路地モデル」というもので、地縁的なコミュニティ像を前提としている。この点が問題と考え、現実の生活や社会に合致したモデルを考えていく必要があるとした。選択的ではあるが、地域とゆるやかなつながり



のある集合住宅像を考えるのが本研究のねらいであるとして述べたが、そのような集合住宅像を考える際のモデルとして「共居モデル」を考えた。

そのための尺度の一つとして、行動観察により集合住宅外部空間の人的環境をとらえることは重要であると考えたのである。

### 6.1.2 集合住宅外部空間における人の分布密度と行動の質

さて、以上の前提にもとづき、2、3、4章で扱った集合住宅の外部空間における人の分布密度や行動の質についてまとめ、共居環境としての集合住宅外部空間の人の行動の特徴を述べる。

行動観察によって得られた集合住宅の外部空間における人の分布を概観してみると、集合住宅の中での人の分布には、場所によって疎密があることがわかる。このことを人の密度分布から見てみると (fig.6-1-1)、団地内部の住戸がある部分は、概ね低い値となっていることがわかる。団地内部と定義したような住戸の入り口が面している区域や団地中庭などは、これよりもかなり低い値 (2.0人/m・回よりも低い値) となっている。他方、団地外部と定義した部分においては、3.51人/100m・回ないし7.88人/100m・回というような高い値を示すところも見られた。

fig.6-1-1 各集合住宅の人の分布密度と行動の内容

集合住宅	部分	人の分布密度の平均 (人/100m・回)	生活に関連した行動の割合 (%)	生活に関連した行動 (人/100m・回)
プロムナード 多摩中央	団地内部	1.25	54.2%	0.68
	ベデ	7.88~6.34	11.1%	0.87
つくば松代 アパート	1階外側部分	1.64	44.8%	0.73
	1階中庭部分	1.37	57.4%	0.79
	空中歩廊	0.73	65.2%	0.66
人間向陽台 団地	1階外側部分	3.51	20.2%	0.71
	1階中庭部分	1.47	50.7%	0.75
	空中歩廊	1.93	63.3%	1.22
タウンハウス 落合	団地内部	1.64	49.4% (36.3%)	0.81
	団地外	6.55	16.7%	1.09

これは、もちろん、1日の内での変動や季節的な変動のある値ではある。しかし、住戸まわりの外部空間での人の行動は、ある一定の範囲の分布密度で観察されることが多いと考えてよい結果であった。調査対象の集合住宅はそれぞれ構成上の特徴があり、人の分布の上でもこの特徴の影響がみられる。しかし、住戸に近い部分をみても、人の分布はほぼ同じような値を示していることがわかるのである。

密度をみると、その分布には違いがみられるが、その分布の違いは、行動の質 (観察される行動のなかで生活向きの行動の占める割合<sup>3)</sup>) とも関係していることがわかる。fig.6-1-3のグラフは、横軸に人の分布密度、縦軸に生活向きの行動の占める割合をとったものだが、これから人が多く分布しているところには、生活向きの行動の割合が少なく (つまり歩行者や自動車に乗った人のような移動している人の割合が多く) なっていることがわかる。また、fig.6-1-3上で左上にある一群は、人の分布密度は低いが、生活に関連した行動の割合の高いところとなっている。この一群は、ほとんどが団地内部といったところで、住戸が面して外部に曝されているところである。(松代の団地外側は例外であるが、ここは団地の周囲は田園といった環境であった。) つまり、グラフの左上にあるような住戸まわりの人的環境は、ほぼ同じような性格のものであることがわかる。

fig.6-1-2 行動観察における行為分類 (再掲)

行為分類	行為内容
歩行、自転車	(徒歩で、自転車、自転車を押して、ベビーカーを押して、子供を抱いて、子供を連れて) 通行する 家から出る・家に帰る、鍵をかける 自転車に乗る・自転車から降りる
自動車	(自動車・バイクで) 出かける、帰宅する、駐車させる (自動車・バイクに) 乗る・降りる、乗っている
家事関係	ゴミを出す、掃除、洗う、洗濯物干し、洗濯物取込み (布団、座布団などの) 干し、たたき、取込み 子供をあやす
立ち話・挨拶	立ち話、あいさつ、(ベンチ、遊具に) 座って会話
子供の遊び	子供のひとり遊び、おしゃべり、ふざけっこ、(外を、庭下を) 見る 遊具で遊ぶ、砂、砂利遊び、ブランコ、鉄棒、水遊び・プール 自転車・三輪車遊び、サッカー、ボール遊び、キャッチボール
その他	ジョギング、犬の散歩
	家のまわりのしつらえ (植木、草花) いじり、手入れ、水やり日曜大工
その他	自動車・バイクの洗車・手入れ、JAF (自動車整備) 来客、見学者・カメラマン (写真をとる) 工事関係者、セールスマン、郵便配達、運送屋・宅配便、クリーニング屋 アトリエを覗く、説明を聞く

<sup>3)</sup> ここで、生活に関連した行動の割合とは、すべての被観察者数のうち歩行行動を除いたものの割合である。各章の行動観察の項で示したように、この中には上の表 (fig.6-1-2 として再掲) のような行動が含まれており、厳密な意味で居住者の生活行動のみとはいえないものの、十分に生活向きの行動と近似できる値であろう。(例えば、郵便配達などは居住者の行動ではないが、日常生活に関係が深く、生活向きの行動と呼ぶこともでき、その上絶対量も少ないので、除かないことにした。)



fig.6-1-3 人の分布密度と行動の種類との関係



さらに、fig.6-1-1 に示す生活向きの行動の絶対値を求めてみると、0.68～1.22 (人/100 m・回) の範囲にとどまっていることがわかる。このことが意味することは、住宅・住戸のまわりでは、ある一定の確率で生活向きの行動が起きるということである。この生活向きの行動が観察されるのが、住宅地や集合住宅によらずほぼ一定であるのは、ある密度で計画された住宅地・集合住宅で居住者が普通に生活しているならば、外部空間での生活もほぼ想像のつく範囲で行われると解釈でき、そのような結果になったと理解できる。

このように、住居のおかれた集合住宅の外部空間は、特に住戸のまわりを取り上げてみると、人の分布やその行動の質からいうと、定質の、ある特徴をもったものであることがわかる。これを、少なくともこの論文で扱った集合住宅の事例に関していえば、共居環境のもつ特徴の一つと位置付けることができよう。

もちろん、行動観察によって得られた人の分布を細かく見てみると、どの住宅地でもある特定の場所である種の行動がみられた。つまり、子供がよく遊ぶ場所があったり、立ち話・挨拶の多く観察される場所があったり、というようなものである。こういったものはあらかじめ計画され、プログラムされた子供のプレイロットといったものもあるし、見通しがよく比較的人通りがあるため立ち話が多くの観察されたと考えられるものなどもあった。上に述べたことは、こういったミクロな場所性、あるいはモノと行動との対応関係などをおしなべて得られた結果にもとづいたものである。

## 6.2 共居環境の様態

各章で示した共居環境は、上に示したような行動の面での共通の特徴を持つものであると同時に、それぞれが固有の特徴をもつ多様なものであった。ここではそれらの多様性に着目して各章をまとめて述べることにする。

### 6.2.1 地域の核となる共居環境としての商店街

第1章では、谷中・根津という住商混合の市街地を調べ、街路における人的環境をしらべた。都市空間の平面的な構造と歩行者の分布との間には相関関係があり、人の疎密ができることは物的な環境によっていた。一方で、人の疎密によって、個々の建物は店舗として使われたり、住居として使われたりする。つまり、人の行動が、物的な環境の一側面である社会的利用形態を決定している。このように、物的環境とマクロな人間行動の間には相互浸透的な関係がある



ことが示された。さらに、物的な環境である街路の表情を豊かにするものは、画一的でない多様な人間の行動であることが示されたが、これには場の特性が大きくかわっていることがわかり、この点でも人間の行動と物的環境とが合わさった「系」として見ると、相互浸透的状况であることが示された。

谷中の街路空間の人の分布をみると、場所によって、0.0～44.39（人/100m・回）というように、その値にばらつきがあることがわかる（fig.1-2-2）。分布密度の高いところは谷中ぎんざをはじめとした商店街などとなっており、分布密度の低いところは路地などであることは述べた。これらの絶対値をみても、谷中ぎんざなどは24.67～44.39（人/100m・回）であり、路地などは2.0（人/100m・回）以下の値となっている。商店の面している街路だけ抜き出してみると、おおよそ10.0（人/100m・回）以上と高い値となっていて、地域の核の役割を果たしている。

ここでの人と人とのつながりは、住宅地の隣近所といったものとは自ずから異なっている。人の分布密度は高いが、基本的には歩行行動が多いので、群衆状態にあると考えるかもしれない。しかし、そういった中にも店舗内外での会話が見られたり、買物客同志の会話があったりと、人が多くいることにより近隣の知り合いと、たまたま会うといったことも多くなるようである。買物という行為を仲立ちにコミュニケーションが成立していると考えられる。当然商店街の人と近くの住宅地の人とは近隣意識なども異なっており、商店街は人が集まってそこで交流があるという意味で、地域の核となっているといえる。

一方で、住宅地の中に居住する人の生活を考えたとき、こういった地域の核は生活行動圏のなかで重要な位置を占めるものであるといえ、居住と互いに補い合うものと考えられよう。このように、谷中ぎんざや根津の街路は単に商取引のためのものではない、近隣の広い共居を確かめることのできる場となっているといえよう。

## 6.2.2 人的環境と生活の表出

2章で示したプロムナード多摩中央団地は、団地中央部に歩行者専用道（ベデ）があって、ここを通り抜ける人々が多い団地で、人の分布密度が7.88～6.34（人/100m・回）というように高いところになっていた。このベデ上の密に分布する歩行者と、ベデに面して建つ住戸の居住者の間の相互関係には、いくつかの側面があった。

この団地には、計画時は生活の表出を意図してベデに面して部屋が設けられていた。普段にベデを通過するなど、そこ利用している他の団地の人には、そこで居住者によってきれいにしつらえられた部屋がならんだ景観を評価しているという結果が得られた。また、ベデ沿いの住戸が、通過する歩行交通に面していることによって、知り合いなどの関係も生まれたりしてい

るようであった。

一方では、生活の表出を意図してベデに面する部屋があっても、実際にはそこでは行動がほとんど観察されなかったということがわかった。つまり、住宅内外の相互交流が、実際に行動として目に見えて観察されたような例は、きわめて少なかったのである。単に人の密度が高くても、それが直接には立ち話や近隣交際にはつながらない。ここでの生活の表出というのは、生活自体の表出というよりも、生活の痕跡の表出という性格が強いという結果が得られたのである。ただし、「見知っているが話したことのない関係」であるものの、居住者や、通り抜けていく人どうしで、お互いに相手を意識しているようであり、共居状態にあることが理解された。ベデに面した部屋は、必ずしも意図したようには使われていないが、普通の集合住宅とはやや異なった人的環境と対応した状況になっていることがわかった。

この行動観察の結果によって、密な人的環境と居住との関係はすり合わせが容易でないことが理解された。この集合住宅では、現在は、こういった人的環境に面して生活の表出が企画されているが、行動の面からいえば、密な人的環境を生かして商店などが立地できるようにすれば、また異なった系が生まれ、地域の核となる可能性がある。

## 6.2.3 空中に持ち上げられた共居の街路

3章で示した松代・入間の両団地は、ともに中層の中庭を囲んだ形態の集合住宅で、途中階に空中歩廊が設けられているのが特徴であった。

両者に共通して、団地外、団地中庭、空中歩廊などでその人的環境も大きくかわってくるということがわかった。団地の中庭や空中歩廊では、人の分布密度が低くなり、生活向きの行動が多くなっていた。これは集合住宅の空間構成上の特徴によってもたらされたものであると考えられる。空中歩廊に面した住戸の居住環境について述べると、そこでの人的環境は、比較的疎で、生活向きの行動が多いことがわかった。調査結果から、これは集合住宅の立地にあまり影響されないようにできると考えられる。近隣交際や近隣意識も空中歩廊を通じて拡がりを見せている様子である。居住者は、ループになった空中歩廊を目的によって使い分けていることもわかった。空中歩廊の人を気にするというような傾向もみられたが、空中歩廊に面する接地性は評価していた。このように共居環境として空中歩廊をみると、比較的良好なものであることがわかった。これは、この型の集合住宅に共通したものであるといってよいであろう。

一方で、人間-環境系として両者を比較したとき、約10年の居住年の違いや、地域差による居住者層の違いが、団地の評価、近隣交際などにも影響を与えており、集合住宅を単純にモノとして評価するのでは十分ではなく、人間の生活と一つになった系として評価する必要があることが理解できた。



また、設計上の違いが集合住宅の使われ方や居住者の意識に表れていた。両団地で設計による違いが大きいと考えたのは、団地内外のつながりであった。これは、視覚的つながりのみならず、外部空間での人の行動の疎密の程度にまで影響を与えていた。これは、設計時の周辺環境に対する設計者の配慮とも受け取ることもできる。また、空中歩廊の設計上の違い、住戸計画の違い、縦方向動線（階段、エレベータ）のとりあいなどの細かな設計上の違いが、使われかたや居住者意識と関連があるとも推測できた。もちろん、人の側の要因を勘案しなければならず、環境決定論的に論ずることはできない。

本論文には扱っていないが、市街地などで計画されるようになってきた機能複合型の集合住宅、特に積層され複合されたものの計画も、このような視点でとらえることができよう。今後の研究課題として残されている分野である。

#### 6.2.4 共居環境の中のネットワーク

4章では低層集合住宅であるタウンハウス落合団地を取りあげた。この集合住宅は建設後10年程度経過しており、居住環境としては安定した。歩車共存の理念でつくられたタウンハウス落合の団地内外外部空間は、人的環境の密度からいえば周囲のベデに比べて低く、生活向きの行動が多く観察され、団地内部は比較的一様な人的環境であった。これは団地内外のつながりが限られていることによるものと考えられる。

こういった人的環境のもとでの、居住者相互の関係を調べてみると、住棟などによるグルーピングに強く影響されていないことがわかった。つまり、知り合いのネットワークに見られるように近隣関係は選択的に拡がっていることがわかったのである。この団地は共居環境として成熟しているといえる。

序でも述べたように、団地の近隣環境は、路地モデルではない、共居モデルとして、捉える必要があると再認識されたといえよう。印象的であったのは、休日に行動観察した際の男性の居住者相互の関係であった。彼らは自住戸の前の自動車を洗っていたのであるが、隣同志でありながら会話をしている様子は観察されなかった。「休日のワックスコミュニティ」と名付けたのであるが、その様子は共居を楽しむようでもあり、幸せそうに見えた。単に、人と人との相互のインターアクションのみを捉えるのではなく、人と人との共存状態も捉える必要があるのだと考えられる。さらに、それが評価できるような共居環境として成立するための人的環境の要因としては、上で述べたような、比較的低密度の分布密度で、生活に関連した行動が多い必要があると考えられる。

団地内を「公」と「私」をつなぐ「移行空間」と考えてみると、そこにはモノによる専

有、人の分布密度、視線の範囲など、いくつかの移行空間の性格を左右する私的・公的な要因があることがわかった。また、それらはいくつかの次元で何層にも重なりあっていることがわかった。また、移行空間に置かれた住戸も、生活の器として居住者の行動を反映して有機体的ようなふるまいをするものであることがわかった。

これらの諸要因は、生活行動などと関連付けて、さらに細かく構造的に見ていかなければならないだろう。次に述べるように、集合住宅の外部空間を、私的に利用、専用すること、すなわち、居住者が外部環境に適切に働きかけられることは、表出などを通しての居住者相互のコミュニケーションを促進するものであると考えられる。これらは生活行動と対比させて調べる必要があり、今後の研究課題となっている。

#### 6.2.5 共居環境を生み出すデザイン

5章では、イギリスのテラスハウス形式の集合住宅を比較検討した。一方はモダニズムの建築様式、もう一方はネオヴァナキュラーの様式で建てられたものであった。前者は入居後多くの問題が生じたのに対し、後者は良好に住みこなされていた。前者が、集合住宅の計画の上で建築決定論的な設計のされ方をしているのに対し、後者は、本来多様な居住者の行動が許容されるような、相互浸透論的な設計であったといえる。つまり、入居後に居住者が環境に働きかけたりできるよう、居住者が比較的自由に行動が選択できるよう、生活に即して住戸内外が計画され、集合住宅の外部空間が計画されていた。つまり、後者は入居後の集合住宅が、系として、人間の行動や環境形成行動によって豊かになることを前提にしていたと考えられる。

5章でとりあげた環境形成行動は、具体的には、ドアを好きなものに取り替えたり、塗り替えたりすること、温室の増築、庭いじり、車の手入れなどであった。これらの活動が居住者相互の認知できるようなかたちで集合住宅の外部空間で起きるように計画されていることは、共居環境を形成するための重要な要素であると考えた。問題のあったモダニズムの集合住宅でも居住者の環境形成行動はあったが、これが他の居住者には認知されにくく、元のデザインがそれを許容しにくかったので、問題が生じたと考えられる。居住行為やその痕跡が表出することは、居住者相互のコミュニケーションに与するものであるが、そのためには、住戸内外のつながりが生活に即して構造化されており、居住者の環境形成活動をアフォードするような外部空間が豊かに計画されている必要がある。



## 6.3 外部空間の果たす役割

## 6.3.1 準地縁的な近隣関係

生活向きの行動は、住宅・住戸のまわりではある一定の確率で起きていると考えられるが、この値はほぼ一定であるものの、低い値である。居住者にとってみればこういった生活向きの行動に出会う場面はあまり多くなく、滞留行動が直接に居住者相互のコミュニケーションにつながる可能性も少ない。また、日本の住宅の4割程度が昼間に人のいない住宅である。このような状況では地縁的な近隣交際にそれほど多くは期待できないのである。だから、活発な近隣交際というよりも、2章で示した「見知っているが話したことのない関係」や4章で述べた「日曜日の男性のワックスコミュニティ」などに見られるような、共居的な緩やかな近隣のつながりとなることが多いのであろう。

そういった状況のもとで集合住宅を考えると、居住者の生活を選択的ではあるが、地域とゆるやかなつながりのあるものとし、準地縁的な近隣関係といったものをもてるようにするにはどうすればよいのだろうか、このためには、次のような選択肢があると考ええる。

## 6.3.2 地域の核

その第一の方法は、第1章で示したように住区レベルで地域の核、すなわち、谷中ぎんざに代表されるような商店街などを設けることである。もちろんこれは、人の疎密やそこでの行動を、すなわち人的環境の様態を読みとって行われなければならない。商店街は人が密に集まることを必要とするし、逆に住居は人の行動が疎になることが必要である。この相反するものを同時に計画することは難しい。また、単に人が密にいるというだけでは十分でなく、人がお互いを認識できるようなかたちのもの、共居を支援するようなものでなければならない。根津の不忍通りには人は密にいるものの、通過自動車交通が多くて地域の核にはなっていなかった。

上に示したような人の分布の疎密は、都市計画レベルのプログラミングによって決定づけられているもの（2章のプロムナード多摩中央団地の歩行者専用道など）や、集合住宅のレイアウトによってもたらされたもの（4章のタウンハウス落合の団地内外の密度の差など）や、建築の部分的で細かな設計によっているもの（3章のつくば松代アパートの上の道のプレイロットなど）などがある。こういったものは計画の際の与条件であったり、計画により作り出された人間-環境系であったりするが、いずれにしても、画一的になりがちな集合住宅に変化を与えるものである。

## 6.3.3 集合住宅の共居環境

第二の方法は、共居環境としての集合住宅の外部空間をより充実させていく方向である。集合住宅などの外部空間の役割を広くとらえると、そこにおかれた表出などのモノや人の共居を通して、居住者間のコミュニケーションを成立させることも可能であろうというのだ。

そのためには、次のようなことがらに注目するのであろう。

2章で示したように、部屋を人的環境に曝せば、それで生活の表出、特に生活行動の表出につながるとは限らない。プロムナード中央団地のベデでは、むしろ、モノの表出を介しての関係が成立している。そして、お互い意識しつつもあまり踏み込まない「話したことはないが見知っている」ような居住者のつきあいや関係がある。4章で述べた「日曜日の男性のワックスコミュニティ」などに見られるような関係も同じである。こういったゆるやかな近隣関係は、現代社会に適在するものと考えられ、積極的に評価していく必要があろう。

また、4章では、団地内を「公」と「私」をつなぐ「移行空間」と考え、移行空間の中をモノによる専有のようす、人の分布密度の違い、視線のとどく範囲など、私的・公的領域を形成するいくつかの要因を示した。これは多様な居住者の生活行動の結果、生まれたものとする。こういった行動の多様性とモノや領域の様態などの関係は、さらに研究していく必要がある。

5章で示した比較の結果も重要である。一方は、環境決定論的なデザインで住戸が外部に対しては閉鎖的であるため、環境形成行動が居住者相互に見えてこない。もう一方は住戸内外が緩やかにつながっていて、開放的で、居住者がお互いに意識しあいながら住みこなしている。だから、環境形成行動が居住者相互に見え、コミュニケーションも生まれる。この結果から導かれることは、集合住宅の外部空間を共居環境として魅力あるものとするためには、居住者の環境形成行動を活発にする住宅内外の仕組みが必要であるというものである。居住者の環境形成行動の積み重ねた結果として、集合住宅の外部空間が居住者相互のコミュニケーションの場となる可能性も生まれると考えるのである。

環境決定論的に設定された集合住宅の外部空間ではなく、居住者の環境形成行動が相互に認知されるような、多様な居住者の生活行動をアフォードするような、共居環境でなければならないのである。



図5-4-1 各章の内容一覧

章	研究対象	構築環境・居住環境の特徴	扱う人間の行動や意識の特徴	分析の手法	結果（共居環境の特徴）
1. 住居混合の市街地における市街地の環境	谷中・根津（東京都文京区、台東区、荒川区内）	○経年変化によって形成された高密度な住居混合の市街地、商店街、駅地などが混在	○社会的空間利用と歩行者分布 ○商店街の賑わいにおける行動の質と近隣住民の利用	○スベース・スケッチによる都市空間の構造分析 ○歩行者分布密度調査 ○ビデオによる定量的行動観察	○都市空間の構造と多様な人間行動との相互浸透的状況の把握 ○行動の質より見た地域の核としての商店街の賑わいにおける共同の意識
2. 集合住宅と人の往来との関係の考察	多摩ニュータウン（多摩ニュータウン・多摩中央）	○ストリート型集合住宅（中高層） ○居住者の属性の表出を目的とした「フラスコ・マン」のある住宅	○往来のある歩行者専用道とそこに集まる住戸での行動と生活の表出 ○団地内外の人の環境の違い（人の分布密度と行動の質） ○ペーパを運び捨てる人の団地の評価	○行動観察による人的環境の同定（人の分布密度と行動の質） ○アンケート、インタビューなどによる居住者、団地の評価、住戸内外の行動、使われ方、意識、近隣意識などの理解と分析	○「フラスコ・マン」での生活行動の表出よりその結果の表出が主という結果 ○歩行者専用道の人的環境の役割の考察 ○互いに意識しつつ踏み込まない居住者間の共居関係の積極的な評価 ○空中歩道に形成された準段地型の共居環境の性格を記述 ○比較による集合住宅設計技法の点検 ○人間環境系としての集合住宅の時間的変遷の意識
3. 中層中密度集合住宅への接居性導入の試み	茨城県つくば市松代町地 埼玉県春日部市入間向陽台団地	○空中歩道のある中密度集合住宅（中層） ○空中歩道に面する住戸 ○中密度集合形式による異なる4つの住棟	○団地外、中層、空中歩道で観察される人の分布密度と行動の質の違い ○住戸内外の住まい方のパターンの違い	○サーベイ ○アンケート、インタビューなどによる居住者、団地の評価、住戸内外の行動、使われ方、意識、近隣意識などの理解と分析	○共居環境における段階的私的領域の形成の要因の考察 ○行動面から見た住戸の有機的な振舞いに関する考察 ○住戸相互のネットワーク的な関係
4. 接居性の高い住戸における領域の形成	多摩ニュータウン タウナハウス集合5	○歩車混合の配置計画のされた低層集合住宅 ○タウナハウス形式	○団地共用空間の人の分布密度と行動の質 ○私的領域の空間利用 ○住戸内外の人の行動 ○近隣意識やその意識	○サーベイ ○アンケート、インタビューなどによる居住者、団地の評価、住戸内外の行動、使われ方、意識、近隣意識などの理解と分析	○「フラスコ・マン」での生活行動の表出よりその結果の表出が主という結果 ○歩行者専用道の人的環境の役割の考察 ○互いに意識しつつ踏み込まない居住者間の共居関係の積極的な評価 ○空中歩道に形成された準段地型の共居環境の性格を記述 ○比較による集合住宅設計技法の点検 ○人間環境系としての集合住宅の時間的変遷の意識
5. 共居環境を生み出すデザイン	マイデンレーン（ロンドン・カムデン区） エルムビル・カムデン（ロンドン・カムデン区）	機能主義的なモダニズムのテラスハウス（低層） 環境決定論的計画 伝統に基く折衷模範のテラスハウス（低層） 相互浸透論的計画	○団地外空間の環境分類とその使われ方の調査・分析 ○住戸内外の環境形成行動と住まい方との関係	○団地構造と住戸内部の空間構造分析（一部スベース・スケッチによる） ○使われ方調査	○「フラスコ・マン」での生活行動の表出よりその結果の表出が主という結果 ○歩行者専用道の人的環境の役割の考察 ○互いに意識しつつ踏み込まない居住者間の共居関係の積極的な評価 ○空中歩道に形成された準段地型の共居環境の性格を記述 ○比較による集合住宅設計技法の点検 ○人間環境系としての集合住宅の時間的変遷の意識
6. 総括	1章から5章までのケーススタディの結果		○人の分布密度と行動の質	○ケーススタディ相互の行動観察の結果の比較分析	○共居環境における行動の共通の特徴の比較考察（低密度・高生活向き） ○共居環境の模範的記述 ○集合住宅の外部空間の果たす2つの役割について

## 6.4 各章のまとめの表

調査を通して、特に集合住宅における外部空間の人間の行動に着目して、共居環境のありかたを述べてきたが、ここで、構築環境の種類、居住環境の特質、人間環境系の特徴、扱う人間の行動の特質、分析の方法、結果という項目で各章の内容を箇条書にまとめると次のページのようになる。

これらの都市の中の住居混合の市街地から、中層、低層の集合住宅、あるいは、イギリスの事例などにわたる集合住宅の外部空間における人間の行動や意識に関する知見は、集合のありかたを考える際の基礎となるものであり、事例はかきられているものを、これらの考察からは、望ましい集住のありかたとしての共居環境についての普遍性のある知見がえられた。

また、本論では動的で捕まえていく人的環境を調べることによりさまざまなことがわかったが、これも環境の側面に過ぎない。より総合的に客観的に集合住宅の環境を捉えていくことが今後に残された大きな課題であると考えられる。







## 謝辞

この研究をまとめるにあたって、多くの方々のご指導、ご助言を得たことを記したいと思います。まず、研究全般についてご助言、審査をいただいた東京大学高橋鷹志教授、ならびに長澤泰教授、原広司教授、藤井明助教授、大野秀敏助教授に感謝の意を表します。特に高橋先生には、ロンドン大学に留学する機会を与えていただき、帰国後も博士課程において、研究上のさまざまなことがらでのご指導、ご助言をいただきました。

楨文彦先生には、卒業論文のご指導を頂き、都市に対しての興味の扉を開いて頂きました。

神戸芸術工科大学の鈴木成文教授からは、修士課程に進学した際に建築計画学の研究の端緒を与えていただいて以来、長年にわたり機会あるごとに貴重な示唆を頂戴して参りました。ハウジングスタディグループの方々には研究会への参加の機会をいただき、そこから特に住宅や集合住宅の研究に関して多くのことを学びました。研究会のメンバーである埼玉大学在塚礼子助教授、芝浦工業大学小柳津醇一教授、大同工業大学笠嶋泰助教授、九州大学菊地成朋助教授、新潟大学黒野弘靖助手、建設省建築研究所小林秀樹氏、日本大学曾根陽子助教授、東京理科大学高岡えり子助手、八戸工業大学戸部栄一助教授、昭和女子大学友田博通助教授、日本大学長沢悟助教授、芝浦工業大学畑總一助教授、東京理科大学初見学助教授らの諸先生には、ここに感謝の意を表します。

東京大学大学院に在学中は、当時の研究室の長沢悟助手（現日本大学助教授）、西出和彦助手（現千葉工業大学助教授）、菊地成朋助手（九州大学助教授）、鈴木毅助手、大原一興助手（現横浜国立大学助手）、山下哲郎助手の諸先生をはじめ、研究室の諸先輩には、研究途上で忌憚のないご意見を頂きました。特に、西出和彦先生には集合住宅住戸の改造の研究を共同で行う機会をつくっていただき、多くのご助言を受けました。

1988年より2年間、ロンドン大学バートレットスクールで研究する機会を得ました。そこに入学する機会を与えて下さった Martin Symes 先生（現マンチェスター大学教授）、コースのディレクターの Julianne Hanson 先生、Bill Hillier 教授、Alan Penn 先生には、いろいろとご指導頂きました。深く感謝の意を表します。

1993年4月より、早稲田大学人間科学部に助手として勤務させていただくことになりましたが、指導教官である相馬一郎教授をはじめ、山本多喜司教授、佐古順彦教授、野嶋栄一郎教授からは、環境心理学の分野における研究の場を与えていただき、貴重なご指導、ご助言をいただきました。また多くの先生方、同僚の助手の方からも、ご指導を受け、さまざまな領域からの刺激を受けることができました。

以上の諸先生に心から感謝の意を表する次第です。



もとより、この研究は一人で成したものではありません。研究をすすめることができたのは、共同で調査研究をおこなった、李京洛さん、榊原由紀子さん、石井京子さん、村井エリさん、山田純さん、船渡麻由さん、馬淵球子さんらの多くの努力と協力があったからです。ここに謹んで感謝申し上げます。

すべての方の名前を挙げられませんが、東京大学建築学科やロンドン大学バートレットスクール、早稲田大学人間科学部の、諸先生方、職員、学生の方々には、さまざまなお世話になり励ましを受けました。とくに、東京大学高橋研究室の小川暁子技術官には、長年お世話になりました。最後になりましたが、ここに厚く御礼申し上げます。

1993年12月 所沢にて

花里 俊廣



# 発表論文等目録

## 1. 論文

- |  |         |   |
|--|---------|---|
| 「建築計画における評価の問題—動線に関する考察」                             | 1988年3月 | 東京大学工学系研究科<br>建築学専攻修士論文   |
| "Tokyo - A Comparative study of the Old and the New" | 1990年9月 | MSc Thesis Bartlett School of<br>Architecture and Planning,<br>University College, London |

## 2. 著書

- |  |                 |           |
|--|-----------------|-----------|
| 「ヨーロッパの住居計画理論」<br>(共訳、R.J.Lawrence 著、鈴木成文(監訳) 在塚礼子、<br>今井ゆりか、菊地成朋、黒野弘靖、笠嶋泰、杉山茂一、<br>曾根陽子、高岡えり子、武田裕子、戸部栄一、初見学、<br>花里俊廣) | 1992年4月         | 丸善(株)     |
| 「現代日本住居論」<br>(共著、鈴木成文(監修)、在塚礼子、小柳津醇一、<br>菊地成朋、黒野弘靖、小林秀樹、曾根陽子、高岡えり<br>子、戸部栄一、友田博通、畑總一、初見学、花里俊廣)                         | 1994年3月<br>(予定) | 放送大学教育振興会 |

## 3. 学会発表等

- |   |          |               |
|---|----------|---------------|
| 「江戸・東京における閉領域の概念について」<br>(楳文彦、大野秀敏と共著)                                  | 1987年10月 | 日本建築学会大会(神戸)  |
| 「動線概念についての考察—平面評価の方法論—」<br>(鈴木成文と共著)                                    | 1988年10月 | 日本建築学会大会(習志野) |
| 「スペースシンタックス理論<br>1 内部空間解析の手法<br>2 大正期中産階級住宅の比較研究」<br>(村木美貴、高橋鷹志、後藤久と共著) | 1990年10月 | 日本建築学会大会(広島)  |
| 「スペースシンタックス理論<br>3 街路空間解析の手法<br>4 谷中・本郷におけるケーススタディ」<br>(李京洛、高橋鷹志と共著)    | 1991年9月  | 日本建築学会大会(仙台)  |

- |   |         |  |
|---|---------|--|
| 「マンション住戸リフォームの平面型に関する考察」<br>1 リフォーム類型の分析<br>2 社会的・物理的環境移行の様態」<br>(李京洛、高橋鷹志と共著)      | 1992年1月 | 日本建築学会関東支部研究報<br>告会(東京)                        |
| 「用途の混在した都市空間の安定に関する考察<br>—東京・根津におけるケーススタディ」<br>(高橋鷹志と共著)                            | 1992年8月 | 日本建築学会大会(新潟)                                   |
| 「集合住宅にみる建築家の人間・環境系像」<br>(「人間・環境系の計画理論のとらえ方(続)」<br>に掲載)                              | 1992年8月 | 日本建築学会大会研究協議会<br>資料(pp.21-30)(新潟)              |
| 「マンションリフォームにみる平面の多様性に<br>ついて」(「多様化現象を再考する—住宅設計<br>を中心にして」に掲載)                       | 1992年8月 | 日本建築学会大会パネルディス<br>カッション資料(pp.資料-16-23)<br>(新潟) |
| 「ストリート型集合住宅の居住環境に研究<br>その1 行動観察によるアプローチ<br>その2 近隣領域によるアプローチ」<br>(石井京子、高橋鷹志、友田博通と共著) | 1993年9月 | 日本建築学会大会(東京)                                   |



## 参考文献

- Alexander, C. A City is not a Tree 1964 Architectural Forum Apr. and May, 1964
- Altman, I. Environment and social behavior: Privacy, personal space, territory and crowding 1975 Monterey, CA: Brooks/Cole
- Altman, I. and Werner, C.M. (ed.) Home Environments 1985 Plenum Press
- Anderson, S. The Plan of Savannah and Changes of Occupancy during its Early Years: City Plan as Resource 1981 Harvard University Review
- Anderson, S. (ed.) on Streets 1986 The MIT Press
- Barker, Roger Ecological Psychology: Concepts and Methods for Studying Human Behavior 1968 Stanford University Press
- Benedikt, M. L. To take hold of space: isovist and isovist fields 1979 Environment and Planning B, vol.6 pp.47-65
- Bernstein, B. 'Appendix: A note on the coding of objects and modalities of control', in Class, Code and Control, vol 3, pp.140-145 1973 Routledge and Kegan
- Boyarsky, A. Maiden Lane 1983 Architectural Review Apr.1983, pp.22-29
- Brown, F. E. and J.P. Steadman The morphology of British housing: an empirical basis for policy and research. Part 2: topological characteristics 1991 Environment and Planning B: Planning and Design, vol. 18, pp.385-415
- Brown, F. E. and J.P. Steadman The morphology of British housing: an empirical basis for policy and research. Part 1: functional and dimensional characteristics 1991 Environment and Planning B: Planning and Design, vol. 14, pp.407-438
- Canter, D. (宮田紀元・内田茂訳) Psychology for Architects (邦訳: 建築心理講義) 1974 Applied Science Publishers Ltd. (邦訳: 彰国社)
- Chermayeff, Serge and C. Alexander (岡田新一訳) Community and Privacy (邦訳: コミュニティとプライバシー) 1963 鹿島出版会

## 参考文献

- Gibson, J.J. (古崎敬ら訳) The Ecological Approach to Visual Perception (邦訳「生態学的視覚論」) 1979 Houghton Mifflin Co. (サイエンス社)
- Greater London Council (延藤安弘監訳) An Introduction to Housing Layout (邦訳「低層集合住宅のレイアウト」) 1978 (邦訳鹿島出版会)
- Hanny Private Gain, Public Loss 1984 Architects' Journal, Oct 3, 1984, pp.26-29
- Hanson, J. and B. Hillier, Domestic Space Organization 1982 Architecture and Behaviour, vol.2, pp.5-25
- Hillier, B. and J. Hanson The Social Logic of Space 1984 Cambridge University Press
- Hillier, B. and J. Hanson The architecture of community 1987 Architecture & Behaviour Vol.3, No.3
- Hillier, W. In defence of space 1973 Journal of the Royal Institute of British Architects, Nov.
- Jerome Tognoli Residential Environments 1985 Handbook of Environmental Psychology
- Kent, S. Analyzing Activity Areas: an ethnological study of the use of space 1984 University of New Mexico Press
- Koffka, K. Principles of gestalt psychology 「ゲシュタルト心理学の原理」 1935 Harcourt, Brace
- Kruger, M. On Node and Axial Grid Maps: Distance Measures and Related Topics 1989 paper for Unit for Architectural Studies, Bartlett School, UCL
- Lang, J. (高橋鷹志 監訳) Creating Architectural Theory-The Role of the Behavioral sciences in Environmental Design (邦訳: 建築理論の創造-環境デザインにおける行動科学の役割) 1987 Van Nostrand Reinhold Company Inc. (邦訳: 鹿島出版会)
- Lawrence, R. J. (鈴木成文監訳) Housing, Dwellings and Homes (邦訳: ヨーロッパの住居計画理論) 1987 John Wiley & Sons: Chichester (邦訳: 丸善)



## 参考文献

- Lawton, M. Powell Planning and Managing Housing for the Elderly 1975 Wiley Interscience: New York
- Lynch, K. The Image of the city 1962 M.I.T. Press  
(丹下健三、富田玲子訳) (邦訳「都市のイメージ」)  
(岩波書店)
- Mercer, C. (永田良昭訳) Living in Cities-Psychology and the Urban Environment 1975 Penguin Books Ltd. (邦訳: 環境心理学序説 都市化と人間生活)
- Newman, O. (湯川利和ら訳) Defensible Space - Crime Prevention Through Urban Design (邦訳: まもりやすい住空間—都市設計による犯罪防止) 1972 Macmillan; New York (邦訳: 鹿島出版会)
- Proshansky, H.M., Ittelson W.H., Rivlin L.G. (船津孝行訳) Environmental Psychokogy-Man and his Physical Setting- (邦訳: 環境心理学第6巻 環境研究の方法) 1970 Holt, Rinehart and Winston, Inc. (邦訳: 誠信書房)
- Rapoport, A. House, form and culture 1969 Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall
- Rapoport, A. Human Aspects of Urban Form: towards a man-environment approach to urban form and design 1977 Pergamon Press
- Rudolf H. Moos (望月衛訳) The Human Context -Environmental Determinants of Behavior- (邦訳: 環境の人間性—行動科学的アプローチ— 1979 朝倉書店
- Soja, E. The Political Organization of Space 1971 Association of American Geographers
- Stokols, D. Environmental psychology 1978 Annual Review of Psychology
- Stokols, D and I. Altman (ed.) Handbook of Environmental Psychology 1987 Wiley Interscience
- Tymur, N., T.A.Markus, T Woolly Rehumanizing Housing 1988 Butterworths: London
- Winter, J Maiden Lane 1983 Arcjhitecturtal Review Apr.1983, pp.22-29

## 参考文献

- 青木義次、湯浅義晴 開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し—路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証 その1 1993 日本建築学会計画系論文報告集
- 乾 亨、延藤安弘、森永良丙 価値づくりの計画プロセスにおける住み手の計画側への役割の浸透—ユーコートの計画プロセスにおける住み手とコーディネーターの相互浸透性 1— 1993 日本建築学会計画系論文報告集第446号
- 延藤安弘 集まって住むことはたのしいナ 1987 鹿島出版会
- 延藤安弘、横山俊祐、古川智博 コーポラティブ住宅の計画研究としての方法的位置づけ—ユーコートの特質とその計画原理 (1) — 1989 日本建築学会計画系論文報告集第396号
- 延藤安弘、横山俊祐、古川智博 価値づくりの計画としてみた個性的な住戸平面の評価—ユーコートの特質とその計画原理 (2) — 1989 日本建築学会計画系論文報告集第406号
- 王世華、尾島俊雄、三浦昌生 立体用途を考慮した階層別空間利用に関する実態調査研究 1990 日本建築学会計画系論文報告集第410号
- 扇田信、足達富士男他 近隣空間の形成に関する研究—団地における屋外生活の実態調査 1968 日本住宅公団調査研究報告集13
- 近江隆、北原啓司 Small-Urban-Spacesの形態と形成要因 1991 日本建築学会計画系論文報告集第424号
- 小柳津醇一他 集合住宅における近隣関係と生活領域に関する研究 1983 住宅建築研究所報
- 金子勇、園部雅久 (編) 都市社会学のフロンティア3 変動・居住・計画 1992 日本評論社
- 神谷裕直、海宝弘和ほか 計画的集合住宅団地における歩車共存空間の試み 1982 都市住宅 1982.07 pp.97-106
- 久野 覚 因子分析による住民意識の構造分析—居住環境に対する住民意識の構造に関する研究—第1報 1983 日本建築学会論文報告集第334号



## 参考文献

- 久野 覚 MSAの拡張分析による住民意識の構造分析—居住環境に対する住民意識の構造に関する研究—第2報 1985 日本建築学会論文報告集第347号
- 久野 覚、岡垣 晃 居住環境に対する住民の評価回答の安全性に関する研究 1984 日本建築学会論文報告集第336号
- 倉沢進、町村敬志 (編) 都市社会学のフロンティア 1 構造・空間・方法 1992 日本評論社
- 倉沢進 (編) 大都市高齢者と盛り場 1990 日本評論社
- 倉原宗孝、延藤安弘 計画行為における価値づくりに向けてのまちづくりコンクルの有効性に関する考察—東京都世田谷区、熊本県水俣市の場合— 1992 日本建築学会計画系論文報告集第433号
- 黒沢和隆 住宅平面計画へのパターン分析手法の適用性に関する研究 1987 日本建築学会計画系論文報告集第381号
- 黒沢和隆 動線条件から平面構成パターンパターンを導く図法を用いた住宅平面型のパターン分析手法 1988 日本建築学会計画系論文報告集第392号
- 黒沢和隆 住宅の平面構成パターンを用いた型展開分析と平面計画—北海道の戸建住宅を事例として— 1989 日本建築学会計画系論文報告集第405号
- 建築技術 これからの集合住宅計画手法のすべて—住まいづくりのソフトとハード— 1991.11 建築技術別冊Vol.3
- 建築文化 建築文化 (特集:集住の計画学) 1988.3 彰国社
- 建築文化 建築文化 (特集:新都市居住の時代集住の計画学II) 1991.3 建築文化Vol.46, No.533 彰国社
- 小林秀樹 集住のなわばり学 1992 彰国社
- 小林秀樹、鈴木成文 集合住宅における共有領域の形成に関する研究—その1 共有領域の構造— 1981 日本建築学会論文報告集第307号

## 参考文献

- 小林秀樹、鈴木成文 集合住宅における共有領域の形成に関する研究—その2 建築形態の影響 (低層集合を中心として)— 1982 日本建築学会論文報告集第319号
- 財団法人日本建築センター 都市型高層集合住宅共有空間における環境水準の向上に係わる調査報告書 1989 財団法人日本建築センター
- 榎原由紀子 街路における生活行動に関する研究 1992 東京大学建築学科卒業論文
- 住宅・都市整備公団、日本建築学会 多摩ニュータウンベルコリーヌ南大沢の居住実態に関する調査研究 1992 住宅・都市整備公団、日本建築学会
- 住宅・都市整備公団建築部、(社)日本住宅協会 他 住宅団地追跡調査 (6) 報告書—アルファルーム付住宅— 1988 住宅・都市整備公団建築部、(社)日本住宅協会
- 正田 亘 環境心理入門 1984 学文社
- 杉浦進 住戸廻り戸外空間のアメニティに係わる計画指標について 1982 日本建築学会論文報告集第311号
- 杉浦進 住戸の屋外空間の特性・性能に係わる計画指標について 1982 日本建築学会論文報告集第315号
- 杉浦進 住区空間の混み具合に係わる計画指標について 1982 日本建築学会論文報告集第316号
- 杉山茂一、鈴木成文 集合住宅における内と外の対応構造に関する研究 1978 住宅建築研究所報
- 鈴木成文 共有領域の構造 (住宅建築シンポジウム「住居の集合とは何か」) 1982 住宅建築研究所報 第9号
- 鈴木成文、宮内康夫、松川淳子、庄司和彦 生活領域の形成に関する研究 (1) ~ (3) 1966 日本建築学会論文報告集号外
- 鈴木成文、栗原嘉一郎、多胡進 建築計画学 5—集合住宅・住区 1974 丸善



# 参考文献

- 1 鈴木成文、小柳津醇  
一、初見学 1984 鹿島出版会
- 2 鈴木成文、小柳津醇  
一、畑聰一、初見学、  
友田博通 1986 昭和60年度科学研究費補  
助金（総合研究A）研究  
成果報告書
- 3 鈴木成文他 現代日本住居論 1994 財団法人放送大学教育振  
興会
- 4 鈴木克彦 協定運営による住環境保全意識の形成要因と協定援  
用方策（タウンハウス団地の場合） 1986 日本建築学会計画論文報  
告集第368号
- 5 鈴木克彦 協定運営活動における建築形態の同調行動に及ぼす  
影響（タウンハウス団地の場合）—建築協定地区に  
おける住環境管理システムに関する研究—その2— 1987 日本建築学会計画論文報  
告集第379号
- 6 相馬一郎・佐古順彦 環境心理学 1976 福村出版
- 7 高井宏之、高田光雄、  
巽和夫 他 香港における高層住宅居住の実態 1991.10 日本建築学会計画系論文  
報告集第428号
- 8 高井宏之、高田光雄、  
巽和夫 他 シンガポールにおける高層住宅居住の実態 1992 日本建築学会計画系論文  
報告集第431号
- 9 高木幹朗、谷口汎邦  
他 グラフ・ネットワーク指数の検討とその適用による  
地下街街路構成の分析 1991 日本建築学会計画系論文  
報告集第422号
- 10 高田光雄 都市住宅供給システムの再編に関する計画論的研究 1991 京都大学学位論文
- 11 高田光雄、小林秀樹 都市における公・共・私の空間構成—積層集住と共  
同空間 1992 すまいろん、住宅総合研  
究財団
- 12 高田光雄、巽和夫 大都市における民間分譲集合住宅の類型化 1991 日本建築学会計画系論文  
報告集第426号
- 13 高田光雄、巽和夫 中間所得者向け賃貸集合住宅の供給に関する研究—  
間接供給手法の効果— 1991 日本建築学会計画系論文  
報告集第427号

# 参考文献

- 高橋鷹志 空間の知覚的尺度に関する研究 1986 東京大学学位論文
- 高橋鷹志 人間—環境系研究における理論の諸相  
（人間—環境系の計画理論のとらえ方（統）所収） 1992 日本建築学会大会研究協  
議会資料
- 高橋鷹志、岡田光正 新建築学大系13 建築規模論 1988 彰国社
- 高橋鷹志他 設計方法と設計主体（設計方法V） 1989 日本建築学会計画委員会  
彰国社刊
- 巽和夫 現代ハウジング用語事典 1993 彰国社
- 巽和夫、高田光雄 二段階供給形式による集合住宅の開発 1983 建築文化
- 巽和夫、高田光雄他 高層集合住宅の計画に関する調査研究、その3、共  
同空間の利用と評価 1981 日本建築学会大会学術講  
演梗概集
- 巽和夫他 社会資本形成的視点からみた住宅供給システムに関  
する研究 1985 住宅建築研究所報
- 巽和夫編 現代社会とハウジング 1993 彰国社
- 田中智子 生活スタイルと超高層住宅居住 1991 日本建築学会計画系論文  
報告集第429号
- 谷口汎邦、森保洋之 高層集合住宅の住戸・住棟まわりにおける生活施  
設・空間・設備機能に関する居住者要求意識と設置  
計画条件について—市街地高層高密度住宅団地にお  
ける生活と空間に関する計画的研究— 1980 日本建築学会論文報告集  
第298号
- 谷口汎邦、森保洋之 高層集合住宅における住戸まわりの空間形態とその  
使われ方について—市街地高層高密度住宅団地にお  
ける生活と空間に関する計画的研究— 1980 日本建築学会論文報告集  
第293号
- 谷口汎邦、定行まり子 高層住宅の物的条件と居住者（母親）の意識からみ  
た居住環境の特性—都市集合住宅地における幼児の  
生活空間計画に関する研究—その1— 1987 日本建築学会計画系論文  
報告集第379号



参考文献

- 谷口汎邦、定行まり子 高層住宅における幼児の自立行動の発達特性—都市集合住宅地における幼児の生活空間計画に関する研究 その2— 1988 日本建築学会計画系論文報告集第385号
- 谷口汎邦、定行まり子 高層住宅に居住する幼児の自律行動を規定する環境要因の抽出—都市集合住宅地における幼児の生活空間計画に関する研究 その3— 1989 日本建築学会計画系論文報告集第397号
- 陳 亮全 民間分譲マンションの外部共用空間の構成およびその利用に関する研究 1986 日本建築学会計画系論文報告集第359号
- 富樫顯、藤本憲太郎、片山恭弘 低層集合住宅の外部空間に関する研究 1982 (財)新住宅普及会住宅研究研究所報 1982No.8104
- 友田博通 住居集合計画手法に関する領域的考察—住居集合における解放性に関する環境心理的原理とその応用— 1986 東京大学学位論文
- 友田博通 中層集合住宅の計画手法に関する領域的考察—住居集合における開放性に関する領域的研究・1— 1986 日本建築学会計画系論文報告集第365号
- 友田博通 高層住宅リビングアクセス手法に関する領域的考察—住居集合における開放性に関する領域的研究・2— 1987 日本建築学会計画系論文報告集第374号
- 中田裕久、土肥博至 都市空居住者と訪問者の環境認知に関する比較考察—都市空間の認知・評価に関する研究その2— 1982 日本建築学会論文報告集第320号
- 中田裕久、土肥博至、志田隆秀 都市空間の認知・評価に関する研究—その1 初期の環境の認知—評価—行動の構造— 1981 日本建築学会論文報告集第306号
- 西村一郎 今井範子 久保妙子 都市集合住宅地での「住み方ルール」に関する研究 1992 住宅総合研究財団研究 No.8810
- 日本建築学会 建築・都市計画のための調査・分析方法 1987 井上書院
- 日本建築学会 集合住宅計画研究史 1989 技法堂
- 日本建築学会建築計画委員会設計方法小委員会 人間—環境系の計画理論のとりえ方 1991 日本建築学会大会研究協議会資料

参考文献

- 日本建築学会建築計画委員会設計方法小委員会 人間—環境系の計画理論のとりえ方 (続) 1992 日本建築学会大会研究協議会資料
- 野口瑠美子、谷口汎邦 近隣空間の特性と領域化の関係—集合住宅における近隣空間構成に関する研究1— 1986 日本建築学会計画系論文報告集第359号
- 野口瑠美子、谷口汎邦 領域形成よりみた近隣空間計画過程における関・核概念について—集合住宅における近隣空間構成に関する研究2— 1986 日本建築学会計画系論文報告集第368号
- 野口瑠美子、谷口汎邦 計画事例にみる近隣空間の関・核構成計画概念とその方法—集合住宅における近隣空間構成に関する研究3— 1988 日本建築学会計画系論文報告集第383号
- 服部岑生、鈴木雅之 他 ドイツを中心とするヨーロッパの中庭型集合住宅の事例研究—都市型集合住宅の建築計画— 1992 日本建築学会計画系論文報告集第442号
- 服部岑生、鈴木雅之 他 ドイツを中心とするヨーロッパの中庭型集合住宅の住棟・住戸計画—都市型集合住宅の建築計画 (2) — 1993 日本建築学会計画系論文報告集第446号
- 初見学、小林秀樹 都市の住態—社会と集合住宅の流れを追って 1987 長谷川工務店
- 平井聖・本間博文 都市の住まい 1992 財団法人放送大学教育振興会
- 広川美子 夏季の室内環境の居住性が戸外での生活行動に与える影響について—室内の居住性を補完する住棟周辺外部空間の居住機能その1— 1985 日本建築学会計画系論文報告集第356号
- 広川美子 非拘束時の戸外出現行動—室内居住性を補完する住棟周辺外部空間の居住機能その2— 1986 日本建築学会計画系論文報告集第365号
- 広川美子 住棟周辺外部空間での滞在行動—室内の居住性を補完する住棟周辺外部空間の居住機能その3— 1987 日本建築学会計画系論文報告集第379号
- 広川美子 住棟周辺外部空間の熱環境と居住性—室内の居住性を補完する住棟周辺外部空間の居住機能その4— 1990 日本建築学会計画系論文報告集第409号
- 福田由美子、延藤安弘 共用空間と集住生活の相互作用のプロセスの評価—ユーコートの特質とその計画原理 (3) — 1993 日本建築学会計画系論文報告集第444号



## 参考文献

- 船越 徹、積田 洋 街路空間における空間意識の分析（心理量分析）－ 1983 日本建築学会論文報告集第327号  
街路空間の研究（その1）－
- 船越 徹、積田 洋 街路空間における空間意識の分析（物理量分析）－ 1986 日本建築学会論文報告集第364号  
街路空間の研究（その2）－
- 船越 徹、積田 洋 街路空間における空間意識の分析と空間構成要素との相関関係の分析（相関分析）－街路空間の研究（その3）－ 1987 日本建築学会計画系論文報告集第378号
- 船越徹、岸隆 住宅団地の空間構成と近隣関係の関連（その1・その2） 1977 日本建築学会大会学術講演梗概集
- 船越徹、積田洋、河崎俊二 集合住宅地の＜行動＞の拡がりに関する研究（その1） 1989 日本建築学会計画系論文報告集第406号
- 船越徹、積田洋、堀内敏生 集合住宅地の＜意識＞の拡がりに関する研究（その1） 1988 日本建築学会計画系論文報告集第392号
- 舟橋国男 環境行動研究の動向（人間－環境系の計画理論のとりえ方 所収） 1991 日本建築学会大会研究協議会資料
- 舟橋国男 環境行動研究におけるトランザクショナリズムに関する一考察－理論の概要並びに建築計画との関係－ 1989 日本建築学会大会学術講演梗概集
- プロセスアーキテクチャ 豊かさ時代の集合住宅・住宅・都市整備公団の試み 1987 Process:Architecture
- 森保洋之 広島基町高層住棟型ファサードモデル形態の視知覚的把握の特性について－住宅の集合形態の視知覚的把握に関する建築計画的研究その1－ 1990 日本建築学会計画系論文報告集第410号
- 森保洋之 広島基町高層住棟型ファサードモデル形態の視知覚的把握の被験者別特性について－住宅の集合形態の視知覚的把握に関する建築計画的研究その2－ 1991 日本建築学会計画系論文報告集第425号
- 森村清志、松本康（編） 都市社会学のフロンティア2 生活・関係・文化 1992 日本評論社
- 山崎古都子 中高層分譲共同住宅の住戸接続形式の違いから見た近隣関係と近隣トラブル 1981 日本建築学会論文報告集第310号

## 参考文献

- 山崎古都子 民間分譲共同住宅の管理費に関する研究 1985 日本建築学会計画系論文報告集第347号
- 山崎古都子 民間分譲共同住宅居住者の管理観 1986 日本建築学会計画系論文報告集第369号
- 山田朋来、延藤安弘 集住環境生成過程における価値づくりについての考察－コーポラティブ住宅・あじろぎ横町について－ 1993 日本建築学会計画系論文報告集第443号
- 山中知彦、原広司、藤井明、渡辺健一 計画学におけるグラフ理論適用に関する研究－その2 応用編－ 1984 日本建築学会論文報告集第342号
- 湯川利和、渡瀬章子 住環境の防犯性能に関する領域論的研究 その1～2 1980.19 住宅建築研究所報
- 李京洛、橋弘志、高橋鷹志、外山義 高齢者の居住施設における人間の物的環境の関わりに関する研究  
その1.施設内部の領域  
その2.プライベートゾーン内部の領域 1992 日本建築学会大会学術梗概集
- 渡瀬章子 2戸1エレベーター型高層住棟の防犯性能の検討 1989 日本建築学会計画系論文報告集第399号
- 渡辺健一、原広司、藤井明、山中知彦 計画学におけるグラフ理論適用に関する研究－その1 原理編－ 1983 日本建築学会論文報告集第334号



